

生徒が輝く工業教育

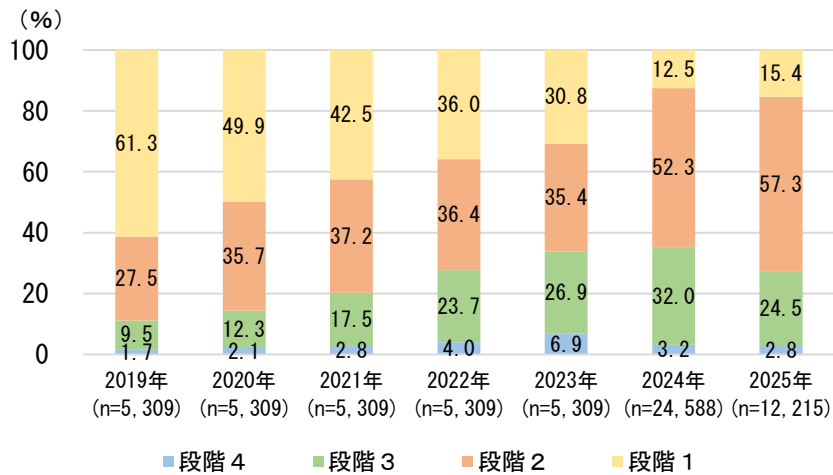
～自らの人生を舵取りする「思考」と「創造」の学び～

資 料

～学習指導要領を着実に実施しましょう～

1. 工業科をとりまく状況について
2. 教育の方向性について
 - ・ 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）
 - ・ 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（論点整理）
 - ・ 産業教育ワーキンググループにおける検討事項
 - ・ 第4期教育振興基本計画
 - ・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方について
3. 高等学校学習指導要領について
 - ・ 実験・実習における安全
 - ・ 工業の「見方・考え方」
 - ・ 情報活用能力の育成
 - ・ 実践的・体験的な学習の充実
 - ・ 教科等横断的な学習の推進
4. 文部科学省各種事業
 - ・ ネクストハイスクール構想
 - ・ マイスター・ハイスクール
 - ・ DXハイスクール
 - ・ 専門高校の特色化・魅力化
 - ・ 全国産業教育フェア
5. 専門高校基礎データ

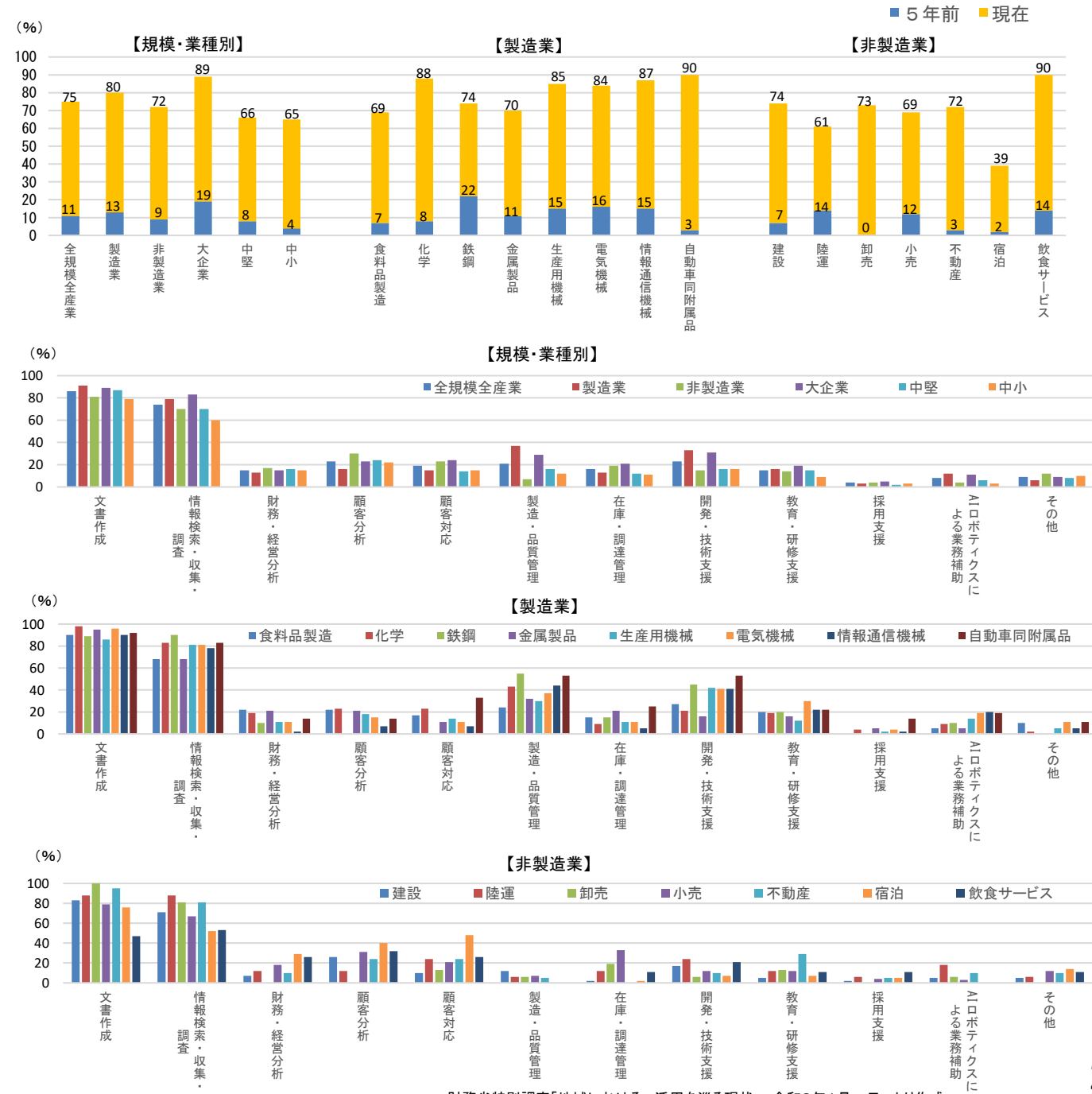
●中小企業におけるDXの取組段階



段階	具体的状況
段階1	紙や口頭による業務が中心で、デジタル化が図られていない状態
段階2	アナログな状況からデジタルツールを利用した業務環境に移行している状態 (例) 電子メールの利用や会計業務における電子処理など、業務でデジタルツールを利用している
段階3	デジタル化による業務効率化やデータ分析に取り組んでいる状態 (例) 売上・顧客情報や在庫情報などをシステムで管理しながら、業務フローの見直しを行っている
段階4	デジタル化によるビジネスモデルの変革や競争力強化に取り組んでいる状態 (例) システム上で蓄積したデータを活用して販路拡大、新商品開発を実践している

中小企業庁 中小企業白書2024,2025,2026 より作成

●企業におけるAIの活用(5年前と現在)



どのようにつくるのか

解を高速に探索する存在

AI



得意領域

- ・リアルタイムの計算
- ・反復的な最適化
- ・自立化されたデータ分析
- ・パターンの発見

必要条件

- ・データ
- ・アルゴリズム
- ・計算資源

解の候補を
提案する

循環

問いを立てる

何をつくるのか

問いを立て、価値を決める存在

人間の創り手



得意領域

- ・課題設定
- ・倫理的判断
- ・社会の潜在ニーズの感知

重要スキル

- ・分析的思考
- ・創造的思考
- ・回復力、柔軟性、適応力
- ・リーダーシップと社会的影響力

(世界経済フォーラム2025)

【AIが苦手なこと】

- ・何を解くべきか決める
- ・何が社会にとって重要かを判断する

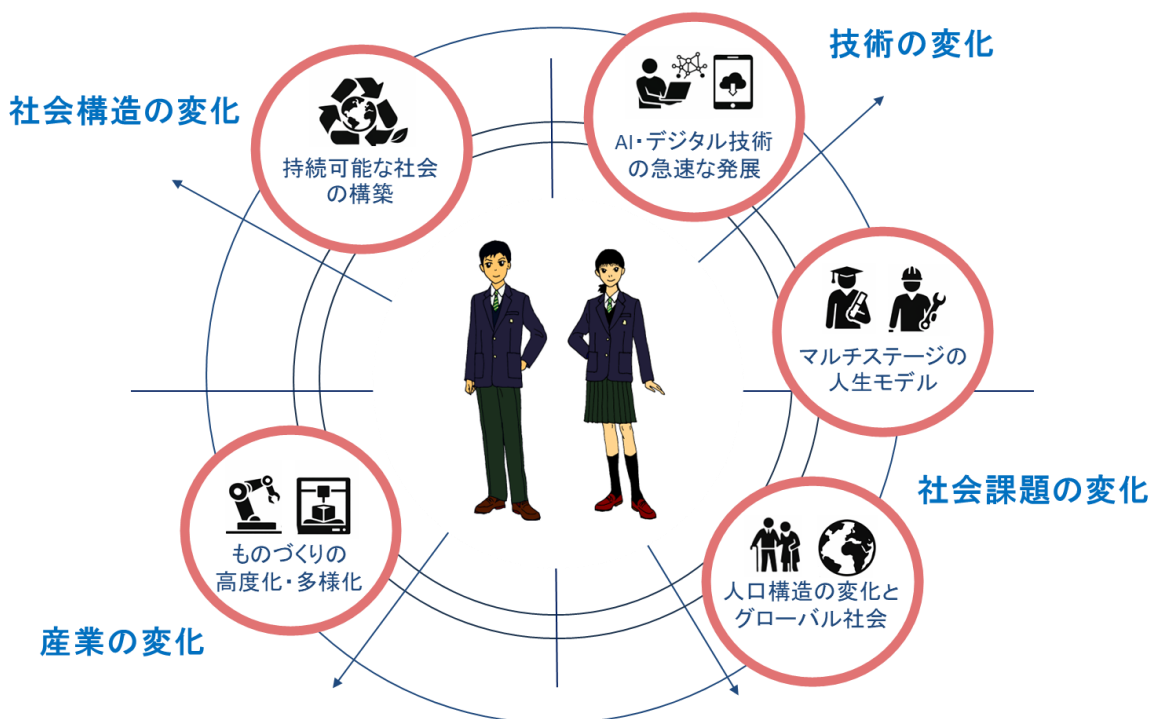
【人間が得意なこと】

- ← 何が問題かは人間が考える
- ← 社会にとって意味があるか人間が判断する

よりよいものづくりのために、創り手である人間には「問いや目的を示す力」がより重要になる

社会の変革

激しい変化が止まることがない時代を生きる子供たち



予測不可能な社会において、決められた手順をこなす力だけでは多様な他者と対話し「持続可能な社会の創り手」になることはできない

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について
（令和6年12月25日中央教育審議会諮問）【概要】

子供たちを取り巻くこれからの社会の状況

- 不確実性の高まり（少子化・高齢化、グローバル情勢の混迷、生成AI等デジタル技術の発展等）
→子供たちは、激しい変化が止まることがない時代を生きる
- 労働市場の流動性の高まり、マルチステージの人生モデルへの転換
→自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性
- 内なるグローバル化やデジタル化の負の側面等による社会の分断の芽への指摘
→多様な他者と、当事者意識を持った対話により問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育てる必要性
- テクノロジーは変化に伴う困難だけでなく多様な個人の思いを具現化するチャンスも生み出す
→生産年齢人口が急減する中、あらゆる資源を総動員し、全ての子供が豊かな可能性を開花できるようにすることが不可欠

現在の学校現場の状況

- 現行学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」を明確化し、「どのように学ぶか」の重要性を強調し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を提示
- コロナによる制約に苦しみながらも、GIGAスクール構想による1人1台端末環境も活用し、精力的な授業改善が行われてきた
- 全国学力・学習状況調査やOECDのPISA調査において地域間格差・学力格差の改善も見られている
→我が国の初等中等教育は、質の高い教師の努力と熱意に支えられ、大きな成果を上げ続けている

顕在化している課題

① 主体的に学びに向かうことができていない子供の存在

- ・ 学ぶ意義を十分に感じだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供の増加
- ・ 不登校児童生徒、特別支援教育の対象となる児童生徒や外国人児童生徒、特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の充実とともに、多様性を包摂し、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題
- ・ これらに向き合うことは、「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点からも重要

② 学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば

- ・ 習得した知識を現実の事象と関連付けて理解すること、概念としての知識の習得や深い意味理解をすること、自分の考えを持ち、根拠を持って明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと、等に依然として課題
- ・ 子供の社会参画の意識、将来の夢を持つ子供の割合等についても、改善傾向も見られるものの国際的に見て低い状況

③ デジタル学習基盤の効果的な活用

- ・ デジタル学習基盤(※)は、一人一人のよさを伸ばし、困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、効果的な活用は緒に就いたばかり
- ・ 我が国のデジタル競争力は国際比較でも低位であり、デジタル人材育成強化は喫緊の課題
- ・ 「デジタルの力でリアルな学びを支える」との基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って、積極的に取り組む必要

(※) GIGA スクール構想による1人1台端末やクラウド環境等のデジタル学習基盤

○ 子供たちが社会で活躍する2040年代を展望するとき、初等中等教育が果たすべき役割はこれまで以上に大きい

→これまでのよい部分を継承し、課題を乗り越え、高等教育との接続改善や国際的な潮流にも配慮しながら、新たな時代にふさわしい在り方を構築する必要

○ 教師の努力と熱意に対して過度な依存はできず、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合う必要性

→令和6年8月の中央教育審議会答申に基づく教員の勤務環境整備と整合させつつ、「令和の日本型学校教育」を持続可能な形で継承・発展

※別途諮問している「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」に係る検討と連携

主な審議事項

1 質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方

- 生成AIが発展する状況の下、知識の概念としての習得や深い意味理解を促し、学ぶ意味や社会とのつながりが重要となる中、そうした授業改善に直結する学習指導要領とするための方策（特に、各教科等の中核的な概念等を中心に、目標・内容を一層構造化）
- 目標・内容の記載に表形式等を活用すること、学校種間・教科等間の関係を俯瞰しやすくすることのほか、デジタル技術を活用した工夫の在り方
- 重要な理念の関係性の整理（「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」、「学習の基盤となる資質・能力」等）
- デジタル学習基盤の活用を前提とした、資質・能力をよりよく育成するための各教科等の示し方
- 学習改善・授業改善に効果的な評価の観点や頻度、形成的・総括的評価の在り方（特に、「主体的に学習に取り組む態度」をはじめ観点別学習状況の把握をより豊かな評価につなげるための改善）

3 各教科等やその目標・内容の在り方

- 小中高等学校を通じた情報活用能力の抜本的向上を図る方策（生成AI等に関わる教育内容の充実、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化を含む）
- 質の高い探究的な学びを実現するための「総合的な学習の時間」、「総合的な探究の時間」の改善の在り方（情報活用能力の育成との一体的な充実等を含む）
- 高等教育段階でデジタル・理数分野への学部転換等の取組が進む中で、初等中等教育段階における文理横断・文理融合の観点からの改善の在り方
- 生成AIの活用を含めた今後の外国語教育の在り方や、手軽に質の高い翻訳も可能となる中で外国語を学ぶ意義についての考え方
- 教育基本法、学校教育法等に加え、こども基本法の趣旨も踏まえた主体的に社会参画するための教育の改善の在り方
- 多くの教科・科目の構成の改善が行われた高等学校教育について、その一層の定着を図るとともに、職業教育を含めた今後の改善の在り方
- 特別支援学級や通級指導に係る特別的教育課程、自立活動の充実等を含む、障害のある子供の教育的ニーズに応じた特別支援教育の在り方
- 幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善の在り方、設置者や施設類型を問わず、幼児教育の質の向上を図る共通の方策

2 多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方

- 興味・関心や能力・特性に応じて子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる学習環境デザインの重要性、デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学びや教師の指導性の在り方
- 教師に「余白」を生み、教育の質の向上に資する可能性も含めた、子供たちの可能性が輝く柔軟な教育課程編成の促進の在り方（各種特別校制度等を活用しやすくすること、標準授業時数に係る柔軟性、学習内容の学年区分に係る弾力性、単位授業時間や年間の最低授業週数の示し方）
- 高等学校の生徒の多様性に応える柔軟な教育課程の実現のための、全日制・定時制・通信制を含めた諸制度の改善の在り方
- 不登校児童生徒や特定分野に特異な才能のある児童生徒など、各学校が編成する一つの教育課程では対応が難しい子供を包摂するシステムの構築に向けた教育課程上の特例等の在り方

4 教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

- 教育課程の実施に伴う過度な負担や負担感が生じにくい在り方（学習指導要領や解説、教科書、入学者選抜、教師用指導書を含む）
- 現在以上に増加させないことを前提とした年間の標準総授業時数の在り方、教育課程の実施に伴う負担に留意した上での、現代的な諸課題を踏まえた様々な教育の充実の在り方
- 新たな学びにふさわしい教科書の内容や分量、デジタル教科書の在り方
- 情報技術など変化の激しい分野において、教師の負担軽減を図りつつ最新の教育内容を扱うことを可能とするための方策
- 各学校での柔軟な教育課程編成を促進し、多様な取組の展開に資する、教育委員会への支援強化、指導主事等の資質・能力の向上の在り方
- コミュニティ・スクールを含む地域や家庭との連携・協働を促進しつつ、過度な負担を生じさせずにカリキュラム・マネジメントを実質化する方策
- 学習指導要領の趣旨・内容について、保護者をはじめ社会全体と共有するとともに、学校種を超えて一人一人の教師に浸透を促す方法の在り方



次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～

主体的・対話的で
① 深い学びの実装
(Excellence)

主に第2,3,4,6章
(生きて働く「確かな知識」の習得、資質・能力育成の具体化・深化、「好き」を育み「得意」を伸ばす、情報活用能力の抜本的向上、個別最適な学び・協働的な学び等)

② 多様性の包摂
(Equity)

主に第3,7章
(調整授業時数制度、裁量的な時間、個別の児童生徒に係る教育課程の仕組み、デジタル学習基盤を活用した学習環境デザイン、個別最適な学び・協働的な学び等)

③ 実現可能性の確保
(Feasibility)

主に第5,7章
(授業時数の適正化・平準化、教科書の精選、構造化、裁量的な時間など様々な方策による教師・子供双方の「余白」の創出、カリキュラム・マネジメント等)

学びをデザインする高度専門職としての教師 デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白 総合的な勤務環境整備

多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる 民主的で持続可能な社会の創り手 をみんなで育む

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた

補足イメージ 1-②

自らの人生を舵取りする力 と 民主的で持続可能な社会の創り手 育成 (今後の検討イメージ)

「好き」を育み、「得意」を伸ばす
(興味・関心)

当事者意識を持って、自分の意見を
形成し、対話と合意ができる

【各教科等での検討イメージ】

好き・得意をベースとした
主体的な進路選択の促進

高
中
小
幼

課題設定
の充実

グループ探究
個人探究

総合

生きて働く「確かな知識」の習得

興味・関心が広がる
教材・学習方法の選択を促進

自分の意見を表現する活動の充実

探究的な要素を持つ学習活動の充実

家庭学習の内容を自律的に決めら
れるような段階的指導
(家庭学習は学習習慣の確立を含む)

各教科等

児童生徒主体のルール
形成や学校生活改善、
行事の創造等の明確化
(みんなが学びやすいルールや環
境の構築を含む)

納得解を形成しようとす
ることの重要性の明文化
(安易な多数決の回避や少数意
見の吟味)

特別活動

考え、議論する
道徳の徹底
(主体的な判断の
重要性、知・徳・体
の調和のとれた発達
に向けた、道徳的価
値の対立を乗り越え
る必要性や道徳的
実践の強調)

道徳

言葉を用いて思考を深めていく指導

他者と関わり協同する力の育成

多様な子供を誰一人取り残さない
視点としての個別最適な学びと協
働的な学びの一体的充実

科学的知見も生かした
効果的な指導計画・授業方法
児童生徒の学習方略の指導

障害や認知特性等
多様な実態を踏まえた調整
(教科等、家庭学習含む)

全ての活動の基盤としての
心理的安全性の確保

学びをデザインする高度専門職としての教師 デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白 総合的な勤務環境整備

※本イメージ図は、自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手育成という今後の検討の一部を資料化したものであり、学習指導要領の改訂に関わる全ての要素を網羅する性質のものではない



教育課程企画特別部会 論点整理
令和7年9月25日



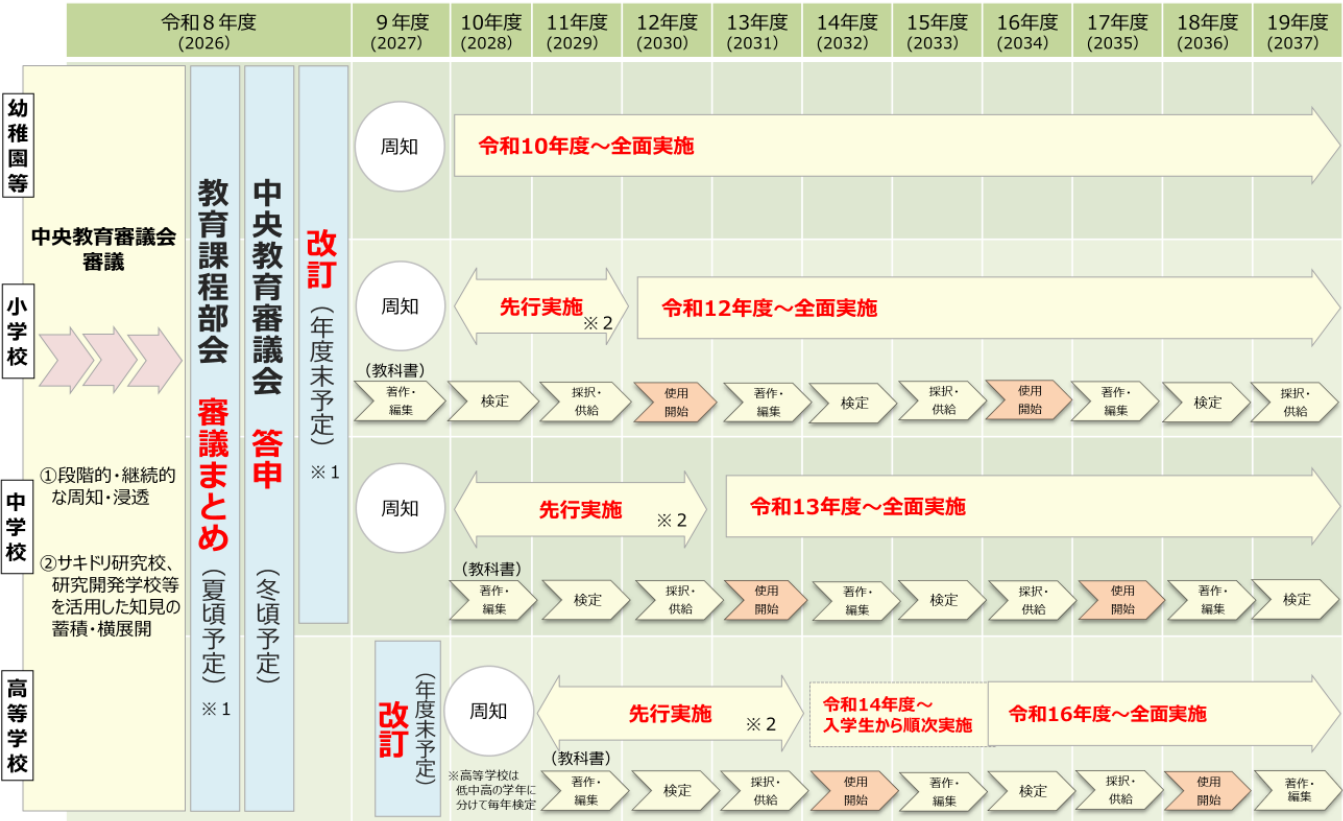
教育課程企画特別部会 論点整理
令和7年9月25日 (概要版)



教育課程企画特別部会 論点整理
令和7年9月25日 (詳細版)

学習指導要領等の改訂に関するスケジュール（イメージ）

※今後変更の可能性がありうる



※1 審議まとめ及び告示案については、パブリックコメントを実施予定
※2 移行期間中の先行実施の具体的な時期や実施する内容については随時検討
※3 特別支援学校学習指導要領（幼稚園及び小学部・中学部）については、幼稚園・小学校・中学校、特別支援学校学習指導要領（高等部）については、高等学校と同様のスケジュールを想定

産業教育の具体的方向性と論点

- ① 自らの人生を舵取りしつつ、市場環境の急激な変化や業態変更等に柔軟に応える力を育成するため、変化への対応能力を核と位置付け、産業教育に共通する資質・能力を検討し、各教科共通に記述する方向で検討すべき
- ② ①の一環として、小・中学校における情報活用能力の抜本的強化を前提として、データサイエンス・AIを活用した実践的な学びを充実するなどの改善を図るべき
- ③ 産業界等との連携など、職業教科における専門的かつ実践的な学習の充実のため、探究的・実践的な学びの積み重ねや深まりを意識できる構造に改善するとともに、各専門科目で身に付けるべき資質・能力の更なる明確化を図るべき
- ④ 専門高校における、質の高い、深い学び（カリキュラム・マネジメントや産業界等と連携したカリキュラム開発等を含む）の実現に向けて、分かりやすく使いやすい学習指導要領とするため、職業に関する各教科固有の留意点を踏まえつつ、専門教科についても、表形式や箇条書き、デジタルの活用を積極的に検討すべき
- ⑤ 今後、専門高校の教員が企業経営やマネジメントの視点も含めて企業での経験を積むことができる環境を整えることの可否などを含め、専門高校が更に発展・充実していくために必要な条件整備について検討すべき

①産業教育の在り方

【現状と課題】

産業界における課題

- ① 変化の激しい社会の中で、前例にとられず市場環境や業態変化に柔軟に対応できる産業人材の育成が必要となっている
- ② 都市部以上に地方で顕著な人口減少に伴い、機動的な人手不足が課題となっている（特に、地元経済を支える企業のDX化を牽引する即戦力となる人材が必要）

職業教育の課題

- ① 産業界の実態に即した探究的・実践的な学びは、主に卒業生次の「課題研究」等を中心に行われるが、そこに至るまでの選択履修科目の内容が（指導項目）流中心として構成されていることも相まって、
 - 生徒が探究課題に出会う機会に限られるなど、職業人として多様な課題に対応できる探究的・実践的な力を育成するための学びの積み重ねが十分でない
 - 知識・技術の習得に偏った実験・実習や、資格取得のみに執心するあまり、職業人として身に付けるべき資質・能力を踏まえたい授業展開が十分でない
- ② 産業界等と連携した取組が進められているが、単発で学校全体としての持続可能な連携になっていないなど、バランスが見られる
- ③ デジタル技術の日常への浸透により、主たる就職先である地元産業界においてもDXによる変革の余地が大きく、専門教科全体として、データサイエンス・AIに関連する教育内容を充実させる必要がある

【具体的方向性と論点】

※教育課程の柔軟化（第三章（3）参照）に加え、産業教育特有の事項として

- ① 自らの人生を舵取りしつつ、市場環境の急激な変化や業態変更等に柔軟に応える力を育成するため、変化への対応能力を核と位置付け、産業教育に共通する資質・能力を検討し、各教科共通に記述する方向で検討すべき
- ② ①の一環として、小・中学校における情報活用能力の抜本的強化を前提として、データサイエンス・AIを活用した実践的な学びを充実するなどの改善を図るべき
- ③ 産業界等との連携など、職業教科における専門的かつ実践的な学習の充実のため、探究的・実践的な学びの積み重ねや深まりを意識できる構造に改善するとともに、各専門科目で身に付けるべき資質・能力の更なる明確化を図るべき
- ④ 専門高校における、質の高い、深い学び（カリキュラム・マネジメントや産業界等と連携したカリキュラム開発等を含む）の実現に向けて、分かりやすく使いやすい学習指導要領とするため、職業に関する各教科固有の留意点を踏まえつつ、専門教科についても、表形式や箇条書き、デジタルの活用を積極的に検討すべき
- ⑤ 今後、専門高校の教員が企業経営やマネジメントの視点も含めて企業での経験を積むことができる環境を整えることの可否などを含め、専門高校が更に発展・充実していくために必要な条件整備について検討すべき



初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（論点整理） 令和7年9月25日

工業科

現行学習指導要領のポイントと現状

- 工業科では、実践的・体験的なものづくりを通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人としての資質・能力の育成を図ることとしている。
- 今次の改訂では、安全・安心な社会の構築、職業人としての倫理観、環境保全やエネルギーの有効な活用、産業のグローバル競争の激化、情報技術の技術会心の開発が加速することなどを踏まえ、「技術の高度化や情報技術の発展等への対応に関する学習の充実」、「環境問題や省エネルギーに対応した学習の充実」などの学習内容の見直しを行った。

【課題】

【方向性と具体的論点（案）】

※高校全体及び産業教育全体の論点に加え、工業科特有の事項として

- ものづくりを通じて社会課題の解決に貢献できる人材を育成するため、科学的根拠や法的根拠に基づいた仮説を立て検証する指導の在り方や、「課題研究」の指導内容の見直しを含む、産業界等との連携強化を含めた探究課題へ出会うための指導の在り方を検討してはどうか。
- DX化の推進に伴うものづくり技術の急激な変化に柔軟に対応するため、従前から基礎・基本とされていた指導とのバランスを図りながらも、従前の考えに捉われない視点から各科目の指導内容を検討してはどうか。
- 実践的・体験的な学びを充実し、深い理解につなげるための、データサイエンス・AIとDX技術を融合したものづくりの学習の指導の在り方を検討してはどうか。
- 科目相互の連携による体系的な学習や、生徒の学習段階に応じた系統的な学習を推進するため、体系的・系統的な視点から、指導内容も含め、科目の再構成を検討してはどうか。
- 産業界の変化に対応しながら、創造的なものづくりの学習を推進するために必要となる柔軟な教育課程の編成を可能にするため、学校の特色に応じて科目の指導内容に選択の自由度をもたせることを検討してはどうか。

1. 産業界における課題

- ① 事業者の稼働力の向上やGX推進が求められる社会の中で、製品の製造にとどまらず、ものづくりを通じて高付加価値を創出し、社会課題の解決に貢献する人材の育成が必要。
- ② DX推進に伴いものづくり技術の変革が起きている。殆どの業種で深刻な人手不足となり、労働生産性の向上が図られる中、DX化を牽引する人材が必要。

2. 工業教育における課題

各学校において、特色ある取組が展開されている一方で、以下のような課題も見られる。

- ① 知識・技術の習得や資格取得に向けた取組が重視され、「課題研究」を中心に探究的な学びが卒業年次に限定的に実施されていることから、科学的根拠や法的根拠に基づいて仮説を立て検証する学習活動が十分でなく、探究課題に出会う機会も限られている。
- ② 創造的なものづくりを行う上で必要とされる、身に付けるべき知識及び技術の多様化への対応。
- ③ ものづくり技術の急速な進展に対応するため、産業界におけるDX技術やデータサイエンス・AIに関連する教育内容の充実。
- ④ 各科目の内容が多岐にわたっていることから、体系的・系統的に学ぶには教育課程の編成や教師の指導の工夫が必要となっている。



教育課程部会 教育
課程企画特別部会
(第17回) R8.8.31

次期学習指導要領等
に向けた審議まとめ
(素案) (1/4)

文部科学省

令和8年8月31日
教育課程企画特別部会
資料 1

教育課程企画特別部会

次期学習指導要領等に向けた
審議まとめ(素案)



次期学習指導要領等に向
けた審議まとめ(素案)
(2/4)



次期学習指導要領等に向
けた審議まとめ(素案)
(3/4)



【産業教育含む】
次期学習指導要領等に向
けた審議まとめ(素案)
(4/4)

産業教育

産業教育の目標、見方・考え方（素案）

2-2 産①

目標

地域や社会、産業の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力について、実践的・探究的な学びを行うことなどを通して、次のとおり育成することを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
産業教育	各職業分野について社会的な意義や役割を踏まえ、体系的・系統的に理解するとともに、各職業分野の発展及び職業人としての自己の成長のために必要となる技能を身に付けるようにする。	各職業分野に関する課題を発見し、科学的な根拠に基づいて探究するとともに、職業人としての倫理観を踏まえ、合理的かつ創造的に解決する力を養う。	① 各職業分野の事象に主体的・協働的に関わり、職業人としての視点から、問いを見いだし、よりよい解決に向け追求し続けようとする態度を養う。 ② 職業人としての倫理観と豊かな人間性を育むとともに、社会の一員として産業の発展に寄与し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

見方・考え方

※産業教育の目標、見方・考え方を踏まえ、各教科において更に検討。

- 社会や産業に関する事象を、職業に関する各教科の本質に根差した視点で捉え、職業人としての自己の成長と、社会や産業の発展につなげること。

<各教科における見方・考え方の整理（イメージ）>

農業	農業や農業関連産業に関する事象を、生産・環境・資源の統合的な視点で捉え、職業人としての自己の成長と、農業や農業関連産業の持続的な発展につなげること
工業	工業に関する事象を、よりよいものづくりを創出する視点で捉え、職業人としての自己の成長と、社会の発展につなげること
商業	企業活動に関する事象を、利益の追求と社会的責任の視点で捉え、職業人としての自己の成長と、ビジネスの持続的な発展につなげること
水産	水産や海洋に関する事象を、海洋資源を持続的に利用する視点で捉え、職業人としての自己の成長と、水産業及び海洋関連産業の持続的な発展につなげること
家庭	生活産業に関する事象を、生活の質の向上の視点で捉え、職業人としての自己の成長と、生活産業の発展につなげること
看護	人間の健康に関する事象を、回復や増進の視点で捉え、職業人としての自己の成長と、健康的な生活・環境の実現や地域医療の発展につなげること
情報	情報に関する事象を、情報の構造と働きに着目して、課題解決や価値創造の視点で捉え、職業人としての自己の成長と、情報及び情報技術を活用したよりよい社会の実現につなげること
福祉	生活に関する事象を、人間の尊厳と自立の視点で捉え、職業人としての自己の成長と、地域福祉の推進につなげること

882

【総括的な基本方針・コンセプト】

2040年以降の社会を見据えた教育施策におけるコンセプトとも言うべき総括的な基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げる。



－5年間の教育政策の目標－

- 目標1 確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成
- 目標2 豊かな心の育成
- 目標3 健やかな体の育成、スポーツを通じた豊かな心身の育成
- 目標4 グローバル社会における人材育成
- 目標5 イノベーションを担う人材育成
- 目標6 主体的に社会の形成に参画する態度の育成・規範意識の醸成
- 目標7 多様な教育ニーズへの対応と社会的包摂
- 目標8 生涯学び、活躍できる環境整備
- 目標9 学校・家庭・地域の連携・協働の推進による地域の教育力の向上
- 目標10 地域コミュニティの基盤を支える社会教育の推進
- 目標11 教育DXの推進・デジタル人材の育成
- 目標12 指導体制・ICT環境の整備、教育研究基盤の強化
- 目標13 経済的状況、地理的条件によらない質の高い学びの確保
- 目標14 NPO・企業・地域団体等との連携・協働
- 目標15 安全・安心で質の高い教育研究環境の整備、児童生徒等の安全確保
- 目標16 各ステークホルダーとの対話を通じた計画策定・フォローアップ

初等中等教育段階で推進(抜粋)

- 学習指導要領の着実な実施 【目標1】
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進
カリキュラム・マネジメントの確立
学習指導要領の趣旨の理解と実施
- 実践的な教育等を通じての学校の特色化・魅力化 【目標1】
工業科においては、産業界や地域と連携したもののづくりの学習が強い
産学官連携による探究的な学習やインターンシップ等の充実
- 地域、高等教育機関、行政機関等との連携の推進 【目標1】
教員自身も産業界や地域と積極的に関わりを持とうとする意識
- 体系的・系統的なキャリア教育の推進 【目標1】
キャリア・パスポート等の活用
「キャリア・パスポート」が生徒が学びと将来とのつながりを考えたり、できるようになったことなどを振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるものとして機能しているか
- 生徒の情報活用能力の育成 【目標11】
学校のエデュケーション全体を通して育む
小・中学校での子供たちの学びの状況を踏まえて

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方について

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会
高等学校教育の在り方ワーキンググループ 審議まとめ 令和7年2月12日



「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、
個別最適な学びと協働的な学びの実現～ (中央教育審議会答申 令和3年1月)

をうけて

- ・スクール・ミッションの再定義、スクール・ポリシーの策定
- ・これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、これからの学校教育をより良く変化させ、様々な課題を解決し、教育の質の向上を図ること に私たちはこれまで取り組んできた

【「令和の日本型学校教育」を構築するための具体的な方策】

1. これからの高等学校の在り方に関する基本的な考え方 ー取り組むことが特に重要とされることー

- 多様性への対応 ●地理的状況や各学校・課程・学科の枠に関わらず、
いずれの高校においても多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びを実現
- 共通性の確保 ●「自己を理解し、自己決定・自己調整ができる力」の育成
●「自ら問いを立て、多様な他者と協働しつつ、その問に対する自分なりの答えを導き出し、行動することができる力」の育成
●「自己の在り方生き方を考え、当事者として社会に主体的に参画する力」の育成
●義務教育段階において修得すべき資質・能力の確実な育成など、「知・徳・体のバランスのとれた土台」の形成

2. 各論点に関する現状・課題認識と具体的方策

- ①少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方
・教科・科目充実型の遠隔授業、全日制・定時制課程における通信教育の活用、学校間連携等の推進による学びの機会の充実に
実証研究の実施
・地域や学校を越えた生徒同士の学びのネットワークの構築 など
- ②全日制・定時制・通信制の望ましい在り方
・自宅等からの同時双方向型の遠隔授業や通信教育の活用に関する実証研究、モデル事例の創出 など
- ③社会に開かれた教育課程の実現、探究・文理横断・実践的な学びの推進
・探究・文理横断・実践的な学びの推進
・産業界等と専門高校の連携、協働の強化、専門高校を拠点とした地域人材の育成・地方創生の支援、専門高校の魅力発信
・DXハイスクール事業の更なる推進 など

【安全管理及び生徒への安全指導の徹底】

1. 実験・実習を行うに当たっては、実験・実習の安全確保を図るため、関連する法規等に従い、施設、実験・実習装置や照明などの日常の点検、施設・設備の安全管理及び学習環境の整備を行うこと
2. 機械や装置類の操作、毒物及び劇物などの各種薬品や薬剤、可燃物の使用に際しては、関連する法規に基づき適正に管理・運用するとともに、事故の防止に努め、生徒に対する安全と衛生の指導を徹底すること
3. 実験・実習における生徒への安全教育及び安全指導の時間を十分に確保し、学校全体で安全教育を推進し、安全意識の高揚を図ること
4. 学校における危機管理マニュアル等を改めて確認し、事故発生時の対応等について学校全体で共有すること

●生徒ができるようになること

自身の安全に留意した行動をとること
仲間の危険を察知して行動すること

●指導する者としての意識として

生徒は安全に対する意識も技術も
まだまだ未熟であるという認識

実験・実習における安全管理及び指導の徹底について 令和4年5月17日 文部科学省事務連絡より抜粋

【高等学校学習指導要領解説】

第3章 第2節 工業第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

第3節 実験・実習の実施に当たっての配慮事項

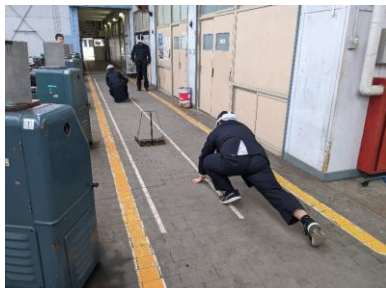
3 実験・実習を行うに当たっては、関連する法規等に従い、施設・設備や薬品等の安全管理に配慮し、学習環境を整えるとともに、事故防止や環境保全の指導を徹底し、安全と衛生に十分留意するものとする。また、排気、廃棄物や廃液などの処理についても、十分留意するものとする。

実験・実習を行うに当たっては、実験・実習の安全確保を図るため、関連する法規等に従い、施設、実験・実習装置や照明などの日常の点検、施設・設備の安全管理及び学習環境の整備が必要である。また、機械や装置類の操作、毒物及び劇物などの各種薬品や薬剤、可燃物の使用に際しては、関連する法規に基づき適正に管理・運用するとともに、事故の防止に努め、安全と衛生の指導を徹底する必要がある。実験・実習では、関連する法規を遵守するとともに、適切な管理と使用方法について十分理解することにより、実験・実習における事故防止や作業の安全確保、適切な薬品管理など、安全意識の高揚を図っていくことが大切である。

特に、工業に関する各学科における「実習」においては、排気、廃棄物や廃液などの処理について人体や環境に及ぼす影響に十分配慮し、安全管理について指導計画に組み入れて指導するなど、十分留意することが必要である。

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 工業編

神奈川県立川崎工科高等学校 ～ARゴーグルを用いた実習時の安全指導、防災・災害体験～



〔体験した生徒の感想〕

○煙の避難を経験してどう思った？

- ・煙が多くて怖かった ARゴーグルでは見えないことがこんなに怖いと思わなかった
- ・思った以上に低いところまで煙が来ると逃げるのが大変だった
- ・もっと周りが見えると思っていたけど煙の色が濃くて周りが見えなかった
- ・いつもならなんてことないけど、見えないことでいつもとぜんぜんちがうので危ないと思った
- ・実際には煙を吸ったらいけないと考えると怖い

○避難するときに気を付けた方がいいことは？

- ・下を向いて避難するから前を見られなくてぶつかりそうになって危なかった
- ・煙が濃いのでまっすぐ歩いているかわからなかった、壁はいくると非難しやすいと思った

○やってみて気づいたことは？

- ・視界が悪いとこんなに逃げづらいと思わなかった
- ・煙が危険で逃げづらい 見えないのがちょー怖かった
- ・実際にあったら焦って逃げるから怪我すると思った
- ・火災が発生していたらもっと焦ってあわてると思う

○日頃から準備しておけばよかったと思うことは？

- ・部屋の整理をしておけばよかったと思った そうすればぶつからないで逃げられた
- ・どこにものがあるか把握しておかないと工場は危険なものが多いから
- ・逃げるための通路を把握しておいた方がいい
- ・工場は危ないものや危険なものが多いからいつもから気をつけておかないといけないと思った

〔教師の実感〕

・通常の避難訓練では工場内で行うことがなく、必要な体験だと思う

・整理整頓の意味と工具や装置の危険性が生徒にもよく分かったと思う

・ARによる体験は臨場感があり現実に近い状況をリアルに感じることができた

・視界が悪い中で避難すると、手探りになりやすく、二次被害も起きやすいと思う

・火災に気づかず、煙が充満するような状況になっていたら有毒ガスも有りうるわけで、生徒全員を安全に逃がすことは簡単ではないと思われる

・火災や爆発、あつてはならないことだが、日ごろから気を引き締めていきたい

・ARのおかげで災害時に実際にどうなるのか仮想体験ができて実感を持てたと思う

実験・実習の安全に関して、普段、どのようなことを実践していますか？

1. 日常の点検、安全管理及び学習環境の整備

- ・ 鋳造実習の防護装備について、赴任前の状態で「何か」があった時の装備対策がされていなかった物を改善し、「もし・起きたら」から「もし・起きても」の状態に改善していった
- ・ ホースや器具の劣化の確認、正しく接続されているか（ガス漏れ）、ケーブルの劣化がないか（漏電）、機械からの異音がないか、正常に動作するか。空き時間には機械の保全や修繕を行う。何かあれば機械、器具の使用停止。直せたり交換できればすぐに対応する
- ・ 実習の始め、点呼の後に服装や体調を確認してから座らせて説明をしている
- ・ 実習服のマナー確認、ヘルメット、安全靴の確認
- ・ 自動カンナ盤やパネルソーへマシンオイルをさすことを日常的に行っている。ノミ研ぎを行う
- ・ 刃物の摩耗具合を把握し、必要に応じて研ぐ。機械類は事前に試運転
- ・ 月に一度、「安全管理点検表」が教員に配られ、自分が担当になっている教室や実習室等の点検を行い、提出している
- ・ 整理、整頓、清掃をし変化に気が付くことができる。綺麗にすることで、次に使用する人の安全にもつながり、事故があった時の2次被害もなくせる。物のある所を明確にすることで危険な場所等も把握しやすくなる
- ・ 整理、整頓をするのではなく、みんなが整理整頓したくなる（しなければいけない）と思えるような環境づくり
- ・ 実験装置の点検と運転（週に1回）、重機の点検と暖気運転（週に1回）
- ・ 屋外での実習がメインになるので、実習日の前日か当日の朝には、実習場所の下見に必ず行きます。交通量が多い時期もあるので、常に目配りをしています
- ・ 実習場の清掃。その後工具類の返却（位置）確認。各ブレーカーがオフになっているかの確認。私用した機器の状態確認
- ・ 片付けの徹底だけでなく死角をなくすために、棚や機械等の配置換え

2. 適正な管理と運用、生徒に対する安全と衛生の指導

- ・ 慣れが出てきた生徒は、作業服、保護メガネ等の装備がどうしてもおろそかになってしまう。その状況を見て、しっかり指摘し、一部の生徒は仲間のその状態を指摘しあってお互いに安全が守れるような指導も行っている
- ・ 学期・年度末実習の最後には大掃除をしている
- ・ 実習室、工具の整理整頓
- ・ 1年生、工業技術基礎で工具の使い方を保全とからめて実施する
- ・ 実習の前にKY活動を行う（旋盤）
- ・ 工具の適正な管理、使用前・使用後の確認
- ・ 刃物を使用するので、毎回注意喚起（過去の事例紹介）
- ・ 工具を使ったら戻す道具の住所を決める。実習時の危険作業例の共有
- ・ 測量実習の前に、熱中症対策、安全対策として健康チェックをやる（睡眠時間、食事状況、体調確認）
- ・ 日々実習前に、行う作業について、実践をすることで、気を付けなければいけないポイントなどを確認している
- ・ 担当教員との打ち合わせを必ず行っており、重要なポイントや作業の流れなどを確認している
- ・ 実習で使う機会は必ず事前に確認し、安全に使用できるようにしている
- ・ 旋盤はチャックが目の前で回転しているため、とても危険である。危ない行動があればその都度注意してチェックしている。そのチェックの数が全体に見えるように黒板に書いてある
- ・ 実習前に整列し、服装チェック、指差し呼称、危険個所の確認
- ・ 1年生最初の実習前に「実習安全」の時間を設け、電気・建設を中心に取り組むにあたっての心構えを学ぶ

3. 安全教育の推進、安全意識の高揚を図る

- ・ 当日の作業前に、電動工具・大型工具、危険について、短時間ではあるが毎回話をして作業に入る
- ・ 実習の授業の時に「ご安全に」と安全を促している
- ・ 電動工具類の使用方法的確認、点検を毎回行う
- ・ 自分たちで考えさせる。実習の作業内容を説明した上で、「危険なポイントはどこか」を発現させる
- ・ 危険予知トレーニング
- ・ なぜこの行動をしてはいけないのか。実際に発生した労働災害をあげイメージさせる
- ・ 安全教育の実施、危険予知活動
- ・ マニュアルポスターの掲示・作成
- ・ たとえ話を用いた説明
- ・ 5S標語を考えさせる
- ・ 視覚的に危険を経験

4. 事故発生時の対応等

- ・ 各実習室の管理者を設置し、毎回点検確認する
- ・ 口頭や手話だけでなく、書いて伝える（筆談）ができるように、各教室にボードを設置し事故発生時に備えている
- ・ 事故体験装置の活用
- ・ 事故発生時は委員会を作り対応
- ・ 事故発生時の連絡のフローチャートの共有
- ・ 全ての実習室に事故対応マニュアルが置いてあり、緊急時に対応できるようになっている
- ・ 職員全てと生徒に対して事故発生時のシミュレーション訓練を行っている

「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」

各教科等において習得する知識や技能であるが、個別の事実に限らず、社会的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含むものである。

何を理解しているか
何ができるか
知識及び技能

例えば、“何年にこうした出来事が起きた”という歴史上の事実に限らず、“その出来事はなぜ起こったのか”や“その出来事がどのような影響を及ぼしたのか”を追究する学習の過程を通じて、当時の社会や現代に持つ意味などを含め、知識相互がつながり関連付けられながら習得されていく。それは、各教科等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念の習得につながるものである。そして、そうした概念が、現代の社会生活にどう関わってくるかを考えていけるようにするための指導も重要である。基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容(特に主要な概念に関するもの)の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことが重要となる。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申) H28. 12. 21 下線部追記

●問いの設定にあたり

知識を相互に往還させる

事実に限らず、社会的な知識を習得する

- ・この材料には、このような性質がある
- ・公式を使って作用する力を計算できる

知識を相互に関連付けて活用する

- ・この材料で構造体を作るには？
- ・もし荷重が2倍になったら安全か？
- ・別の材料に変えるならどのような点に留意するか？

知識相互を往還しながら判断する段階へと学びを発展させる

工業の「見方・考え方」を働かせる

●「見方・考え方」とは

主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとし、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編 第4章 第1節

工業の見方・考え方とは、ものづくりを、工業生産、生産工程の情報化、持続可能な社会の構築などに着目して捉え、新たな時代を切り拓く安全で安心な付加価値の高い創造的な製品や構造物などと関連付けることを意味している。

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 工業編 第1章 第3節

ものづくりの場面に遭遇したとき

- そこに潜んでいる課題に気づくことができる
- 過去の経験をもとに分析・判断することができる
- 原因について推測することができる
- 課題の改善策やもっとよくするための方法を考えることができる

できるようになるために

- リアルな体験を通じた実践的・体験的な学び
- 学びを課題解決に有機的に結びつける問いの工夫
- 社会や産業界の流れを踏まえた指導(新技術・法改正など)
- プロの思考に触れる
生徒:「教科書ではこう書いてあったんですけど、なぜそうしないんですか？」
プロ:「この場合は〇〇という状況だから、敢えてこのようにしてるんだよ」
生徒:「なるほど！」
- 子供たちだけで原因や対策について考えさせてみる

●単元全体の指導を通じてデジタル学習基盤を活用した学びを充実しましょう

工業科におけるデジタル学習基盤を前提とした授業のイメージ

科目：単元

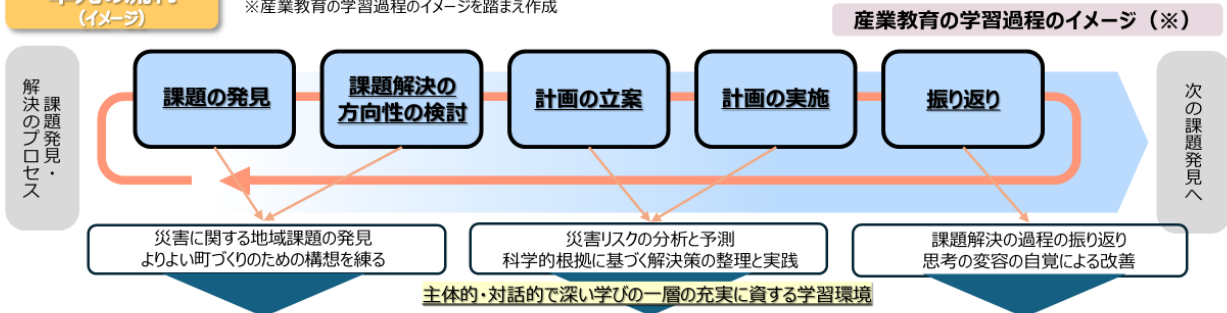
単元の概要

単元の流れ
(イメージ)

測量（土木分野）：測量技術の利活用

人工衛星の利用や情報通信機器を活用した測量など技術の進展に対応した測量技術について扱う

※産業教育の学習過程のイメージを踏まえ作成



学習者の自立した育成

工業の見方・考え方を働かせながら、データや情報を収集・分析することを通して、課題を自分事として捉え、よりよい解決に向けて主体的に考えようとする意識を高めることができる。

地域との連携・協働した活動の中で、課題の解決に向けた方策を科学的根拠に基づいて検討するとともに、工業の先端技術を活用した実践的な解決策を導き出すことができる。

学習過程のデータや成果を整理し、外部からの評価も踏まえ課題解決の過程を振り返るとともに、自らの思考の変容を自覚し、よりよい改善を図ることができる。

自分が住む町の過去の災害記録をデジタル端末で調べ、AIを用いて分析し、災害の傾向を見いだすとともに、「よりよい町づくり」への構想を練る

測量技術が防災・減災にどのように活用されているのかを画像や動画により調査する

ARやVRの技術の活用による被災模擬体験を通じて、自身の課題意識を高める

調査結果や得られたデータをクラウドで共有し、グループで分析・検討しながら課題解決の方向性を試行錯誤する

これまでの学習を生かしながら、起こりうる災害をシミュレーションにより推測し、防災・減災に関する自分の考えを科学的根拠に基づいてまとめる

GISやハザードマップデータを用いて、災害リスクの高い地点を分析し、分析によって得られた情報が実際に防災に役立つかをグループで検証する

ドローンやGIS等の測量技術を活用し、3D地形モデルやハザードマップの製作など課題解決に向けた学習活動を行う

オンラインにより課題の解決策を広く発信し、提案内容に対する外部専門家からの評価をもとに、更なる改善を図る

測量データや分析結果をクラウドに蓄積し、どのデータが課題解決に役立ったのかをグループで協議する

課題発見から提案までのプロセスをクラウド上に整理して、デジタルポートフォリオとして自身の思考の変容をまとめる

データサイエンス・AI等、情報技術を活用した実践的な学びの改善の方向性(工業科の例)

- ものづくり技術の高度化・複雑化が進む中で、工業製品や構造物の構造や仕組みの理解の深化、検証と改善のプロセスの強化、技術の効率的な習得のため、工業科の学習において、情報技術を活用した学習の充実を図る方向で改善してはどうか。
- よりよいものづくりを実現するため、工業科の各科目において、データサイエンスに基づく考え方を踏まえ、AI等のツールを活用して課題解決及び価値創出を図ることができるよう内容を充実する方向で検討してはどうか。

学習のイメージ

情報技術を用いた学習の例	データサイエンスの学習の例	AIを用いた学習の例
【見えない部分を可視化することによる構造や仕組みの理解の深化】 3Dモデルを活用し、工業製品や構造物の内部構造を、分解することなく視点や断面を変えて確認することで、構造や仕組みを多角的に検証 【模擬製作・仮想体験による検証と改善のプロセスの強化】 3Dプリンタ技術の活用により、ものづくりにおける検証と改善のプロセスを強化 - AR・VR技術を用いて状況を再現し、仮想体験することにより、興味・関心を高め、課題を自分事として、よりよい課題の解決につなげる 【試行錯誤と振り返りの充実による技術習得の効率化】 - タブレットを活用して作業場面を録画し、技術について互いに検証しあうことによる技術の向上 - 録画データをクラウド上で振り返りながら、技術向上の軌跡を振り返る - VR技術を用いて加工技術について反復練習することを通じて習得技術を高度化	【データの収集と分析・検証の充実】 - 課題発見の過程において、各種データを収集し、可視化や比較分析を通して傾向や相関関係を把握するとともに、要因の特定や仮説を検証 - 企業における実際の課題解決事例を調査し、自ら検討している解決策と比較・検証を行いデータに基づく合理的な意思決定につなげる 【シミュレーションによる検証・改善プロセスの強化】 - 大量のデータをプログラム等の活用により効率的に処理・分析し、その結果を基にシミュレーションを行い、科学的根拠に基づいたよりよい解決策を提案 【自動計測・情報技術を活用したものづくりの推進】 - センサ等を活用して必要なデータを自動で収集し、反応やプロセスを連続的なデータとして把握し、最適条件の導出や異常の検知 - 情報技術を搭載した設備機器から得られるデータを収集・蓄積・分析し、その結果に基づいて条件の最適化や予測を行うことで、精度の高い分析やものづくりを実現	【AIを活用したデータ分析の充実】 - 収集した各種データについて、AIを用いて現象の傾向を分析し、課題解決に向けた構想の方向性を検討 - AIによる画像解析技術等を用いることで、製品の状態を効率的かつ高精度に判断 【課題解決を支援するAIの活用】 - プログラムのバグ修正やデザインの提案などにAIを活用し、複数の解決案を比較・検討しながら課題を多面的に分析し、生徒の創造性を向上 - AIを活用してものづくりの工程や行動の最適化を図るとともに、安全性・責任・データ管理に関するリスクについても理解し、適切に活用 【AIをものづくりのツールとして活用する力の育成】 - AIを搭載したロボット等の活用事例から学びを深め、ものづくりにおいてAIを適切に活用 - AIの特性や限界を理解し、人間の判断と組み合わせながら活用することで、より高度で創造的なものづくりを実現

【兵庫県立姫路工業高等学校】 産業界と学校とでそれぞれの役割を明確にしなが生徒の興味・関心を育てる



→本資料P36下部のQRコードよりダウンロードできます

産業界と連携した教育を充実するために

- 生徒に「身に付けさせたい力」や「気づかせたいこと」を企業と共有しているか
 - ・「例年通りでお願いします」になっていないか
 - ・育てほしい姿を我々がどれだけイメージしているか
- 今、生徒が「できること」、「学んでいること」を企業は理解しているか
 - ・身に付けている知識や技術を生徒が実際に試してみる
→「まだまだだ」と気づかせることも
- 生徒自身で考え行動しなければならない場面を意図的につくる
例えば・・・
 - ・学校での学びと社会とのつながりを感じることができているか（ずっと掃除ばかり？）
 - ・生徒が自分の力で考えることができているか（言われたことをやっているだけ？）
 - ・プロの技術や考え方に触れることができているか（プロからの評価をもらえているか）
- 生徒が「自身の成長」に気づく振り返り
 - ・インターンシップを複数回（社）体験することも効果的
 - ・生徒による体験発表の機会は成長の場面の一つ
 - ・「キャリア・パスポート」を活用して振り返りを進路につなげる

地域との関わり・ものづくりの体験の中で

生徒が自分で考えなければならない場面をつくる

「自分でやらなければならない」からこそ成長する

- ・一人一人の役割を明確にし、生徒が主体的に動く“舞台”を用意する → 「誰かがやってくれるだろう」からの脱却
- ・時には思い切って生徒に任せてみる

生徒自身が考え、創造する体験を大切にする

試行錯誤しながら取り組む中で、「できた」「やり遂げた」という実感が主体性につながる

- ・「本当にできない」のか、それとも「まだやりきっていない」のか。そう問いかけながら挑戦を促す
- ・誰かが作ったものに頼るだけでは、新しいものを生み出す力は育たない
- ・新しい技術を生徒自身が使いこなそうとチャレンジする経験が大切

生徒の発想を受け止め、広げること

教師はその発想を広げ、深めていく“伴走者”でありたい

- ・声掛け「それはとてもいいアイデアだね！」 → 挑戦しようとする意欲を高める
- ・問いかけ「どうしたらもっとよくなる？」 → 生徒の思考が更に広がる
- ・振り返り「うまくいかなかったようだけど・・・そこからどんな発見があったのだろう？」 → 失敗を学びにつなげる

「学び合い」が育むタテの絆 ～実践的・体験的な学習の一場面より～

【神奈川県立神奈川工業高等学校】1・2・3年による「学び合い」の班活動

ー「学び合い」の班活動の要素ー

- ・各学年1名ずつの3名による班編成(40班)を行い、各自1テーマ出品する
- ・チューター制度により生徒同士が相談しやすい環境を作るとともにつながりを創出する
- ・全員が発表練習を2回は必ず行い、お互いに修正しあう
- ・全員一から作品を制作するので、下級生は上級生の技術レベルを見て自分との違いを実感する
- ・全員が自分の作品を発表し、事後には発表についての振り返りを行う
- ・学年の壁を越えてコミュニケーションを取ることで関係性の強化と次年度の自分の立ち回りを理解する

ー夏休みのポスターコンクールを全学年協働で参加しようー

①課題提示からはじまった「学び合い」の活動



班による練習

夏休み期間に各自が制作した作品へのアドバイスやよりよく発表するための練習を行う

②夏季休業中課題発表会

生徒全員が自分の作品をプレゼンテーション



<1年生>



<2年生>



<3年生>

③振り返り活動



班ごとにお互いの発表についてアドバイス

発表についての意見交換のみならず、日頃の学習の方法や、今のうちに準備しておいた方がよいことなど、学校生活を豊かに送るための質問やアドバイスも聞かせてきた



学び合いの実践

～活動を通して生徒の気づき～

～指導を通じて得られた教育的効果や教師の実感～

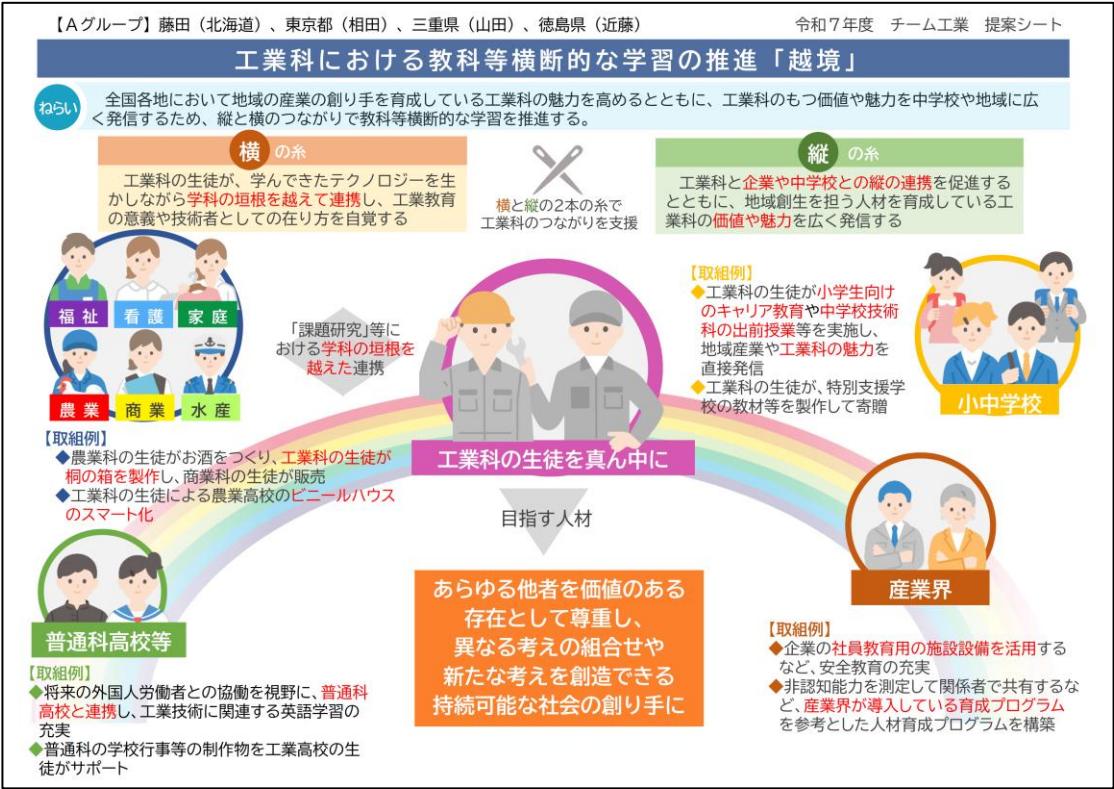
- ・学年を縦につなぐことにより、進路や課題の情報を共有する機会を与えることができた。教員からの話よりも、自分に近い存在の実体験を聞くことで、自分たちの将来を考える良いきっかけとなったと思う。
- ・生徒同士の学び合いを通じて、文化祭などのイベントだけでなく、普段の学校生活でも先輩後輩とコミュニケーションをとる機会が増え、クラス以外のコミュニティ、居場所を作ることにつながった。
- ・普段はあまり積極的ではない上級生もこの活動を通して、後輩の面倒をみる先輩へと変容した。
- ・学年を超えた学び合いでは、各学年に応じた役割や課題があり、生徒にはそれを自ら認識し、主体的に行動する力が求められます。3学年による学び合いを継続していく中で、話し合いの質は年々向上し、生徒が「今やるべきこと」に気づくまでの時間も短くなっています。

- ・LINEグループでのやり取りで、発表の待ち時間について質問をしたら、文字数や言うべきこと、発表の態度など、たくさんのことを丁寧に教えてくれてとても助かった。初めての発表会でいろいろなことが心配だったが先輩の助言はとても有益でありがたかった。【1年生】
- ・自信のなさから質問することができなかった、アドバイスを自分から求めることができなかった。そんなところがあったので次年度からはもう少し自分から質問をできるように、より良い発表ができるように頑張っていきたいと思いました。また次年度で先輩が困っていたりしたら優しく声をかけてあげたいと思いました。【2年生】
- ・1年生に、準備しておいた方がよいことや、発表前にあらかじめ発表時の雰囲気などを伝えて緊張を少しでも身構えられるようにしてあげるなど、私が言われたら安心する言葉を選んで伝えられたと思います。3年生の先輩にも伝わりやすいまとめ方なども教えてもらったので次回の夏課題の発表などでも活かしていきたいです。【3年生】
- ・たてわりで関われる貴重な機会なので今後も続けていくべきだと思いました。他学年との交流をすることでお互いの成長に繋がりが、娘を見ている気分で楽しかったです。【3年生】

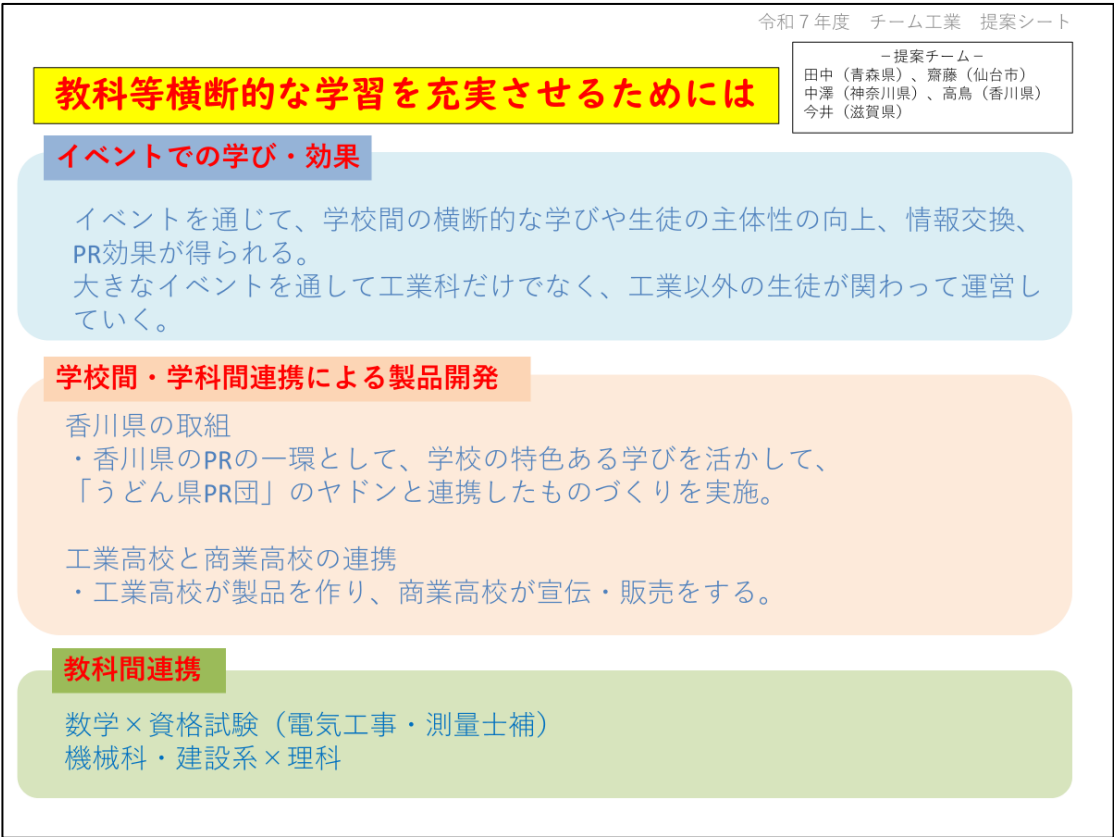
つながりを生かし課題研究発表会も協働で

協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM A



TEAM B



協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM C

令和7年度 チーム工業 提案シート

教科等横断的な学習を充実するためには

各県の現状

○4学科(工業・商業・農業・家庭)間で選択科目を共有できる仕組みがあり、学科間の横断的な学びが可能。
○普通科併設校では、総探と課題研究のコラボを実施。
一方で、
・実践的な連携(工業→農業へ機械提供、商業科による販売実習との連携)
・探究と課題研究の時間の統合による学科横断的な取組が行われている。
○SPHの活動として、数学・英語教員による工業科への指導支援など、教科横断的な指導が展開。また、建築の資材(おが屑)の農業科への提供や、本棚制作など他校との協働も活発。
○学校再編に伴い「帯時間」を設定し、工業・農業・福祉の生徒が混ざって学ぶ仕組みを導入予定。
○各学科が専門性を生かし、共通課題に協働で取り組む体制の構築。
○川崎総合科学高校では、複数学科(工業5+理数1)が連携し、課題研究を通じて学科横断的な探究活動を展開。選択科目や他校連携も充実しており、生徒の多角的な視点育成につながっている。

ー提案チームー
大友 悠央(岩手県)
一本鎗 裕(新潟県)
山下 良(京都府)
武智 義尚(愛媛県)
岡田 智弘(川崎市)

<キーワード>
○ミックス総探
○ゴール設定

普通科 工業科
総探
商業科 農業科

総合的な探究の時間と課題研究の効果的な活用

思い切って、課題研究の総探の代替をやめませんか

TEAM D

学校が「やってみたい」と思うヒント

教科間・学科間・学校間交流によるコラボ

令和7年度 チーム工業 提案シート

普通教科とのコラボからスタート (工業で三角関数を学ぶ前に、数学が授業で展開するなど)

校内の教育課程委員会等で教科について情報共有を行い、数学科がこの時期に〇〇をやっているから、工業科は時期をずらそうなど

探究の時間(課題研究)で帯を合わせてコラボ (機械の生徒が電気の分野を学ぶなど)

探究の時間などをつかって、一つのを題材に、複数の教科の視点から学んだり解説することで、専門性の違いから見え方・考え方が変わるという視点を学ぶなど

プロジェクト(起業)して学校間でコラボ (デザインを複数校の生徒たち考え、工業系高校が製作、商業系高校が販売するなど)

大きな目標に向かって、みんなで取り組む

ー提案チーム(D班)ー
長谷川(横浜市)、佐々木(宮城県)、澤田(高知県)、島竹(富山県)、松岡(大阪府)

協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM E

令和7年度 チーム工業 提案シート

教科横断的な学習を充実するためには

提案チーム

安藤（石川県）、五藤（名古屋市長工芸高校）、大淵（秋田県）、西山（福岡県）、山崎（兵庫県）

教科横断的な学習の実践例

【課題研究】

- グローバル人材の育成のために、英語科と工業科と連携して英語で成果発表会を行う
- ものづくりラボを設置し、他学科の生徒と一緒にものづくりを行う
- 農業と工業と農業研究センターと連携し、コンソーシアムをつくる

【総合的な探究の時間】

- 1年時に1単位を設けて、工業科以外の先生にも担当してもらう

教科横断を進めるためのヒント

- 「総合的な探究の時間」と「課題研究」の日時を合わせて学校間で連携する
- 大きなテーマ作成
(マイスター・ハイスクールなど大きな事業への取組)
- 他教科の部会と連携
(工業高校を見学してもらう)
- 工業科の科目を見つめなおして、どの単元で他教科と連携できるか等を考える

TEAM F

令和7年度 チーム工業 提案シート

教科等横断的な学習を充実するためには

ー提案チームー
山下 桂司（福井県） 乾 裕士（奈良県）
東田 隆（佐賀県） 神尾 博之（山形県）
和田 匠（神戸市）

教科等横断≠連携

例) <学科間連携>
電気科と建築科が共同した作品制作

私たちの生活そのもの

- 教員自身も教科横断の意識が必要
- 探求的な学びの推進

技術者の育成ではなく、
起業家精神を育成する

例) 起業家など外部人材を活用した授業の実施

- ・ 普通科の教員に工業の学びを知ってもらう
- ・ 学習内容での連携
- ・ 学科間連携
- ・ 子どもたちの方が気づきがあるのではないかな
- ・ 学科間(普通科)連携が必要
- ・ 課題研究での連携

- ・ 深い学びを起こさせるために、気づきや教科間の学びを
- ・ 探求的な学びを進めていく
- ・ 情報的な学びを加えていく

- ・ 「学習」⇒「学び」として
- ・ 生きていくための「学び」のための「気づき」がすでに。
- ・ それぞれの学習での学びの成果を活用していく

- ・ 学科横断的な取り組みではない。
- ・ 教科等横断≠連携（単に教科横断）

- ・ 教員自身も教科横断の意識が必要（壁を取っ払う必要がある）
- ・ 普通科⇒工業を学びに来ている生徒であること
- ・ 学科間連携
例) 電気科と建築科が共同して何かを製作した

協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM G

令和7年度 チーム工業 提案シート

県の教育を支える工業高校のラボ化

- 普通高校等の探究活動のアイデアを実現する「ものづくり力」
- 専門高校等の課題を実現する「ものづくり力」

<工業の武器>

- ・教員、高校生の「ものづくり力」、ものづくりの設備。産業界との連携力
- 地域を支え、無くてはならない工業高校となる。

<現状の課題>

- ・他校（普通高校等）では、工業高校で何ができるか分からない。
- ・工業高校では、他校・他科の課題、問題、サポート点が分からない。
- ・単発的な繋がりや横断が多く、先生方の関係性による部分が大きい。



<導入の取組> **子供たちからのボトムアップが継続の鍵**

- 各工業高校（専門高校）の武器、出来ることを公表する。
 - ・探究開始時に他校の取組動画の共有
 - ・普通科の先生方に協力いただき、探究の視点を取り入れる
 - ・地域（商業施設等で）の発表会を開催
 - ・課題と出来ることのコーディネート（交流会イベント）
- 子供同士が繋がるのが、一番効果が高い。**継続性。
- 工業高校生のものづくりに対する情熱UP。教員との関係性も良くなる。

－提案チームG－

佐藤（福島県）
柿崎（山梨県）
中谷（和歌山県）
濱田（長崎県）
佐々木（広島市）

TEAM H

テーマ：教科等横断的な学習を充実するためには・・・

－提案チーム－
H

近藤主事（茨城県）

学校種間の交流連携：海洋高校と農業や工業と一緒に課題研究を交流
水戸工業高校の総探で図書館を利用して実施 図書の貸し出しや情報活用

城本主事（熊本県）

グラフィックシラバス（図示）の作成し単元を結びつけられるように明示されている。力学の単元は物理につながっている等
→なんでこの学習をすのか？をイメージしやすいと好評
水車をテーマに学校として学科が担当を細分化して1つのモノを作成する取組（課題研究）
マイスター・ハイスクール継続申請（八代工業、天草工業、玉名工業） 産業実務家教育 最先端に触れる機会

竹内主事（長野県）

学科横断的な取り組みについて、再編計画の中で違う価値観と触れることはとても重要。

松井主事（京都市）

STEAM教育の充実：モチベーション維持、結びつける力の両方を満たすことが重要。

安達主事（鳥取県）

一部横断的なものとして、境港高校から海洋と水産、機械、電気、福祉でキッチンカーを作る取組みがある。

（各主事から多様な意見まとめ）

振り切った取り組みが必要になるのではないかな。

生徒の学びの活性も重要であるが、教師間の理解を深めることから始めてもいいのでは。例えば三角関数もどの時期にどのようなことを学んでいるかを普通科の先生方にも知ることから横断的になるのでは。

1つの事象が様々な教科につながっていることをもっと発信していくべきでは。

多様化を受け入れる行動が必要でないか。トヨタ自動車が自動車だけ作っているのではない現状。

⇒まとめ:「グラフィックシラバスで教科や時期の学びを見える化！」

学校全体で学びのつながりを知って、連携のきっかけに！

協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM I

令和7年度 チーム工業 提案シート

教科等横断的な学習を充実するためには

- 課題研究や総探、学校設定科目の中でのコラボレーションがしやすいのではないかな。
- 栃木・・・宇都宮工業高校 1 年次の学校設定科目で全科が共通で履修。1 つの大講義室で企業からの講話をいただいたり、各科の教員が他科の教室を回ってそれぞれの専門科目の授業をする。
- 学校間でのコラボレーションは壁が高いが、高校再編の中で大学科併設校が増えることをチャンスと捉えてみては。同じ学校の中でコラボレーションがしやすくなる。
- 1 つの設備を全学科で使用することをきっかけにできるのでは。
- 科長同士の協議会等でアイデアを出してもらう。
- 企業の出前授業等で、各科の生徒をシャッフルして1つのグループに指導をいただく。企業の視点と各科の生徒の様々な視点から意見が出るのではないかな。
- 先生同士のコラボも必要。特に普通科の教員とのコラボ。例えば、物理や数学で使用する記号と工業で使用する記号が異なっていたりする。普段から話ができる学校の雰囲気作りが大切。

－提案チーム－
三輪（岐阜県）、錦織（島根県）
吉田（大分県）、建井（堺市）、
松本（栃木県）

TEAM J

令和7年度 チーム工業 提案シート

教科横断をすすめるための「環境整備」

教科横断を進めたいが、どうすればいいのかな??



－J 班－
石井（群馬県）
山口（静岡県）
田内（岡山県）
福山（福岡市）
毛利（宮崎県）

教員の連携をしやすくすれば...

職員室を一つにする、時間割を配慮する、業務の精選...

お互いの学びを知る機会があれば...



「探究フェス」

教員も生徒も、お互いに学びを発表・意見交換しあう機会

「校内短期留学」

一定期間、他科の課題研究に参加し、技術を学ぶ

生徒・教員にきっかけを与えて自走できるように応援する！！

協議テーマ:教科等横断的な学習を充実させるためには

TEAM K

令和7年度 チーム工業 提案シート

K班

教科等横断的な学習を充実するために

ー提案チームー
高橋（埼玉県）、鈴木（静岡県）
木元（広島県）、下原（鹿児島県）

各県の取組（事業等）

- 広島県
学科の枠を越えたカリキュラム作成
1年：他学科を知る
2年：他学科の視点を取り入れる（実習）
3年：チームで課題の解決をする
※令和6年度から実施（工業，農業，商業）
- 鹿児島県，静岡県
くくり募集あり，1年次は学科横断
2年から縦割り
※ 課題研究に発展性の可能性
- 埼玉県
普通科と専門学科の授業を見る→共同研究へ発展を期待
英語で○○をしよう（工業の授業を英語で）
（学習指導案のデータベースきっかけ）

★ 協議中の話題

- ・ 他学科の学びがアイデアにつながる
工業技術基礎→工業探究プログラム
（1年生はマインドセット）
- ・ 複数学科が集まる研修を糸口に
教科横断への一步!!!!
- ・ それぞれの視点でアプローチ
一つの問いに対して，学科や教科で
見方，考え方は違う
- ・ 連絡しやすい環境づくり（学校）
チーム○○の構築
- ・ 授業や研究等のデータベース化!!!!

- 学校が教科等横断的な学習をやってみようかなと思う取組は？
 - ・ まずは併置学科で横断
 - ・ 学習指導案のデータベース化でタイムリーに手元へ
 - ・ 課題研究（テーマ・内容）のデータベース化

※ 時代の流れに柔軟に対応することが重要

TEAM L

令和7年度 チーム工業 提案シート

テーマ：「教科等横断的な学習を充実するためには」

ー提案チームー
川本 倫行（山口県） 横山 亮（愛知県）
井上 純一（千葉県） 新垣 保（沖縄県）

・ 学科横断での取り組み1

工業技術基礎において、ものづくりに必要な基礎的な技術に関連学科で学ぶ。例えば、機械科の生徒が電気科へ出向き、授業を受ける。

⇒ 各分野における技術への興味・関心を高め、工業に関する広い視野を養うことができる。

・ 学科横断での取り組み2

課題研究では、学科を越えて班編成を行う。

⇒ それぞれの専門学科の強みを活かせるので、学びの内容を発揮する場面がしっかりと提供できるのではないかな。

・ 教科横断での取り組み

課題研究をキャリア教育の軸に据えることを意識して各教科で学習指導を行う。

⇒ 全ての教科科目で社会を取り巻く課題を意識させる取り組みを行い、生徒が課題研究を履修するときに、生徒自ら課題を設定できる力を身に付けさせる。

【環境建設工学科】

A group of people, including a person in a wheelchair, participating in a community activity in a large hall. The person in the wheelchair is in the foreground, facing away from the camera. Other people are standing and moving around in the background. The setting appears to be a large, open hall with high ceilings and large windows.

A photograph showing a male teacher with glasses and a dark jacket leaning over a table, assisting a young female student with her project. The student is wearing a white shirt and a dark backpack. They are working on a project that involves some colorful materials on the table.

A yellow school bus with a floral pattern, parked in a lot. The bus is decorated with large, colorful flowers. It is parked on a paved surface, and there are other vehicles and a building in the background.

23

高等学校教育改革促進基金の創設 ～N-E.X.T. (ネクスト) ハイスクール*構想～

令和7年度補正予算額 (案)

2,955億円



*N-E.X.T. (ネクスト) ハイスクールとは、New Education, New Excellence, New Transformation of High Schools の略である。

「強い経済」を実現する総合経済対策 (令和7年11月21日 閣議決定) 抜粋

第2章 「強い日本経済実現」に向けた具体的施策 第1節 生活の安全保障・物価高への対応 (6) 公教育の再生・教育無償化への対応 (教育無償化への対応)

いわゆる高校無償化と併せて公立高校や専門高校等への支援の拡充を図るため、政党間の合意に基づき、安定財源を確保した上で、交付金等の新たな財政支援の仕組みを構築することを前提に、国から2025年度中に提示される「高校教育改革に関するグランドデザイン 2040 (仮称)」に沿った緊要性のある取組等について、都道府県に造成する基金等により先行的に支援する。

課題

- 2040年には、産業構造や社会システムの変化を踏まえた労働力需給ギャップにより、地域の経済社会を支えるエッセンシャルワーカーの圧倒的不足、いわゆる理系人材の不足が懸念されるところであり、産業イノベーション人材の育成が重要。
- 少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化が一層深刻化 (2040年には高校1年生が約36%減少)。現状でも約64%の市区町村において公立高校の立地が0又は1であることなどを踏まえ、**地理的アクセスを踏まえた多様な学びの確保が重要。**

①産業イノベーション人材育成等に資する高等学校教育改革促進事業 令和7年度補正予算額 (案) 2,950億円 支援期間：3年程度

各都道府県に基金を設置し、類型に応じた
高校教育改革を先導する拠点のパイロットケースを創出し、取組・成果を域内の高校に普及する。

事業内容

改革先導校の類型	事業スキーム		
	アドバンスト・エッセンシャルワーカー等育成支援	理数系人材育成支援	多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保
内容例	□ 地域産業や社会・生活基盤を支える分野において、新技術を活用し、生産性の向上・高付加価値化の実現が求められている。 □ 技術革新のスピードが加速する時代に適した課題解決能力の獲得に向け、探究的・実践的な学びの積み重ねや深まりのある学びを実現する。	□ 未来成長分野においては、理系高等教育への進学者の割合の増加、高等教育での実践的な教育が求められている。 □ 先進的な新たな知を生み出す力を育成するため、理数的素養を身に付けつつ、自ら問いを立て、解決する研究を行う高等教育を見据えた文理融合の学びを実現する。	□ 少子化への対応においては、生徒の地理的アクセスの確保を図ることに留意しつつ、多様な人間関係の中で得られる学びを踏まえれば、一定の生徒数の規模を確保した学びを提供することが必要。 □ 人口減少地域に、魅力ある学びの選択肢を増やすため、地域の教育資源を活かした学びや遠隔授業を活用した学びの提供を実現する。
	学ぶ意欲のある高校生が、家庭の経済状況に左右されことなく、学習習慣の定着、学習時間の増加、学びへ向かう姿勢の確立ができるよう、放課後等を活用し、学校と地域の連携による学力向上・学習支援のための取組、探究活動の深化による多様な進路に向けた支援を行う。 ・ 学科・コースの再編、学校設定科目の新設 ・ 域内の教育環境向上に貢献する取組 (遠隔授業、教員研修拠点等) ・ 高等教育機関・地域・産業界と連携、外部人材の登用 ・ グローバル人材育成に向けた留学の派遣・受入に係る環境構築		

②高等学校教育改革加速に係る伴走支援事業 令和7年度補正予算額 (案) 5億円

改革先導拠点の着実な実施にあたり、都道府県の進捗の確認・評価を行うとともに、類型ごとに、ノウハウの共有・専門家による支援を行う。

対象	補助率等	補助対象経費
①都道府県 ②民間	①10分の10	①改革先導拠点の創出に係る経費 (人件費、旅費、謝金、設備・施設整備費等) ②高校教育改革加速に係る伴走経費 (人件費、旅費、謝金、備品・消耗品費等)

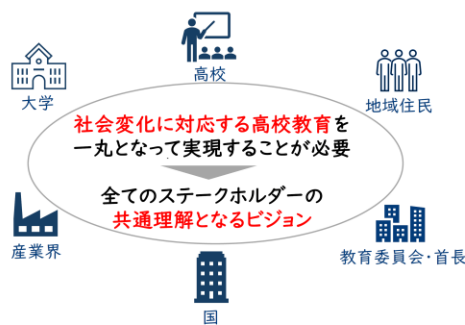
(担当：初等中等教育局参事官 (高等学校担当) 付)

高校教育改革に関する基本方針 (グランドデザイン) 【概要】 ～2040年に向けた「N-E.X.T. (ネクスト) ハイスクール構想」～

New Education, New Excellence, New Transformation of High Schools

1. グランドデザインの背景・必要性

- ✓ AIの実装などデジタル技術の目まぐるしい発展
2040年には、**少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化**が一層深刻化
→現在の人材供給トレンドが続けば、**労働力需給ギャップが発生**
(事務職は余剰、AI・ロボット関係、いわゆる理系人材は不足)
- ✓ 将来を正確に予測することは難しく、どのような未来が訪れるか分からない
→生徒それぞれの**多様な個性やニーズ、興味・関心に応じた学びを生かした自己実現**を支え、生徒の可能性を広げ能力を伸ばす
→全ての高校生が**家庭の経済状況等に左右されことなく**、希望する大学等への進学や就職等をし、それが**個人の幸福**につながり、ひいては、**我が国の経済・社会の基盤を強いもの**としていくことにつながる



2. 高校改革の方向性～2040年に向けた高校の姿～

視点1 不確実な時代を自立して生きていく 主権者として、AIに代替されない能力や個性の伸長	視点2 我が国や地域の経済・社会の発展を支える人材育成	視点3 一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保
学びの在り方の転換 (New Transformation) ✓ リアルとデジタルの良さを組み合わせつつ、「好き」を育み、「得意」を伸ばす機会を確保し、生徒の実態を踏まえた柔軟な教育課程の実現 ✓ スクール・ミッション、スクール・ポリシーを踏まえた教育活動の改善、公表 ✓ 高校教育と一貫した大学教育改革 (主体的・自律的な学修のための環境構築、出口における質保証等)	最先端を学ぶ高校の特色化・魅力化 (New Excellence) ✓ 探究・文理横断・実践的な学び、STEAM教育、産業界と協働した専門高校の学びの充実 → 理数・文系的素養やAIを使いこなす力を身に付け、社会で活躍するロールモデルを体感 ✓ 各高校の特色化・魅力化 → 学科構成の見直し、 専門高校の機能強化・高度化 、グローバル人材の育成 → 「普通科」の在り方の転換、即戦力の人材と進学を見据えた 高度専門職人材の育成	学ぶ機会・アクセスの確保 (New Education) ✓ 全国どこにいても多様で質の高い学びを保障 し、地方の生徒はもとより誰一人取り残されず、全ての生徒の可能性を最大限引き出す (地理的アクセスの確保、都道府県の実情等に応じた学校配置・規模の適正化、小規模校を含む遠隔授業等の推進) ✓ 通信制高校の教育の質の確保・向上 ✓ 不登校生徒への学習支援、特別支援教育や日本語指導が必要な生徒への教育の充実

3つの視点を重視しながら、更なる高校改革を進め、N-E.X.T.ハイスクール構想を実現する。
高校から大学・大学院に至るまでの一貫した改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材を育成する。

3. N-E.X.T.ハイスchool構想の中核となる高校支援

国の 高校教育改革に関する グランドデザイン策定

都道府県 実行計画策定

総合教育会議等を活用し、地域別就業構造の推計や人口の将来推計等を踏まえて検討。首長、関係部局、大学、地域の関係者や産業界との連携・協働を図る。

安定財源を確保した上で、 交付金等の新たな財政支援の 仕組みの構築

基金の執行状況等を踏まえ、R9年度予算の編成過程で検討。

※交付金等の構築に先立ち、高校教育改革のための基金を都道府県に造成し、N-E.X.T.ハイスchool構想の実現のために、パイロットケースとして先進的な学びの在り方を構築する高校（改革先導拠点）を創設。

新しい学校のイメージや取組例

専門高校の機能強化・高度化 (アドバンスト・エッセンシャルワーカーの育成等)

(学校のイメージ)
地域発のイノベーションを興すことのできる人材等の育成を目指し、理論と実践の往還によるカリキュラムの実施等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

(取組例)
✓ ビジネス経験の必修化
✓ ものづくりから流通まで一体的な学びの実践
✓ 「高校版企業寄附講座」等の実践やそれを前提とした進学・就職機会の確保

普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化 (文理の双方の素養を有する人材の育成等)

(学校のイメージ)
文理にとらわれない幅広い教養等を備えた新しい価値を創造する人材等の育成を目指し、実社会につながる生きた授業の実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

(取組例)
✓ 実社会につながる生きた授業の実践
✓ 高度実験環境を核とする理数探究拠点整備
✓ 探究型授業研修の充実による教師のスキル向上、探究伴走支援専門チームの構築

地理的アクセス・多様な学びの確保

(学校のイメージ)
学校の枠を超えて多様な人々と協働し、社会の課題を主体的に探究・解決できる人材等の育成を目指し、柔軟で質の高い学びの実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

(取組例)
✓ 学校間連携や遠隔授業等を活用した教育機会の確保
✓ 学校と地域の関係機関の連携・協働の強化による学習環境の提供
✓ 他の学校種との連携の充実

これらの取組の一環として、留学支援を含むグローバル人材育成支援や、学校と地域が連携・協働した学力向上・学習支援などについて取り組む。

2040年までに達成を目指す目標

【職業教育の高度化・魅力の強化関係】

・地域の産業界等と連携・協働した取組を行う専門高校：100%
・少子化傾向においても専門高校の生徒数を現在と同水準

【普通科の在り方の転換・魅力の強化関係】

・文理横断的な学びに取り組む普通科高校：100%
・普通科でいわゆる文系と理系の生徒の割合：同程度

【多様な学びの確保関係】

・学びの状況に関する生徒の肯定的な評価の向上
・高校卒業段階の進路未決定者の割合の半減

文部科学省各種事業

マイスター・ハイスchool（次世代地域産業人材育成刷新事業）

令和7年度予算額 2億円
(前年度予算額 3億円)

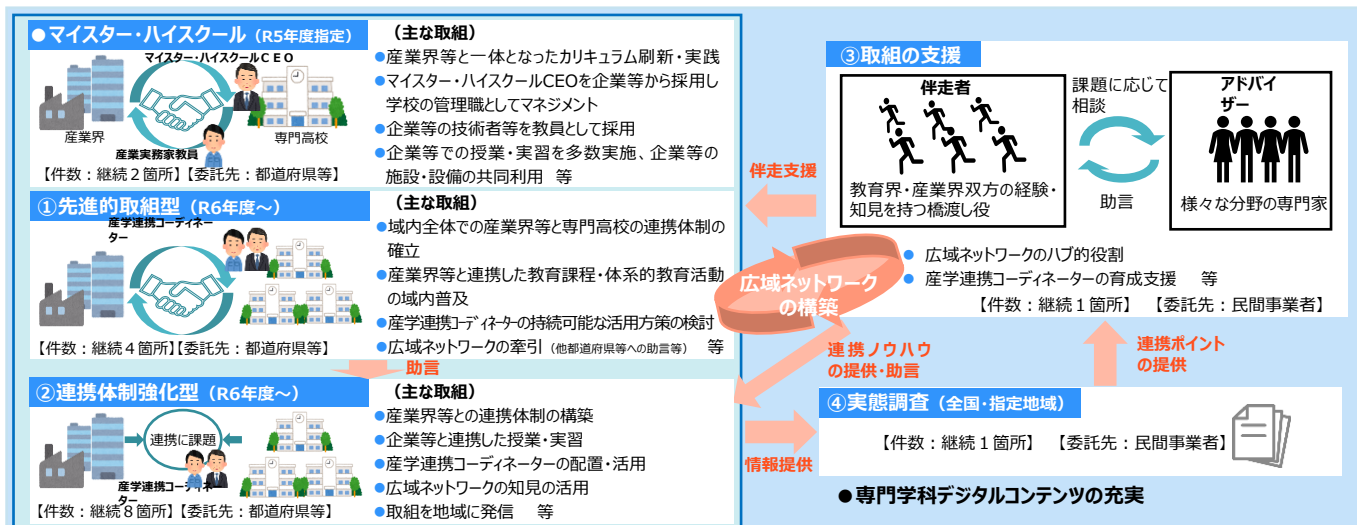
現状・課題

- 第4次産業革命の進展、デジタルトランスフォーメーション（DX）、六次産業化等、産業構造・仕事の内容が急速かつ絶えず革新する中、専門高校では、産業構造の絶え間ない変化に即応した職業人材育成が急務。
- そのため、令和3年度より、産業界等と専門高校が一体となって職業人材育成を行うマイスター・ハイスchoolを実施。
- 我が国の産業の発展のためには、**マイスター・ハイスchoolの全国的な横展開が必須**。しかし、産業界等との連携に課題のある地域では導入が困難であることから、実践的な取組を通じた研究や全国実態調査等を通じて、連携体制の強化の方策について明らかにする必要。

事業内容

- 産業界等と一体となった先進的取組を行う都道府県等・専門高校が中核となり、産業界等と連携した人材育成の**広域ネットワーク**を牽引
- 産業界等との**連携に課題のある地域が**、先進的取組を直接学びつつ、**連携体制の強化プロセスを実践研究**
- 民間事業者による**取組に応じた支援、広域ネットワーク内をつなぐネットワークハブ**
- 産業界等と専門高校の**連携段階ごとの課題及びその解決策**について調査し、実効性のある連携体制構築のポイントを整理

→ **地域産業の持続的な成長を牽引する最先端の職業人材育成エコシステムを確立**



【マイスター・ハイスクール】 仙台市立仙台工業高等学校(工) 令和5～7年度指定

一事業名一

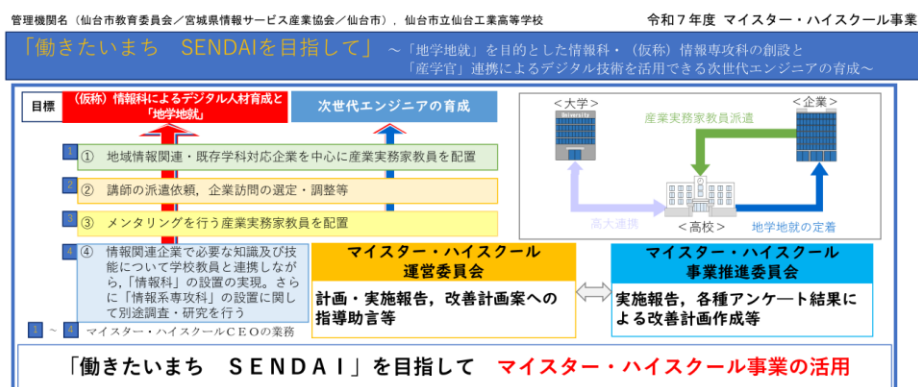
「働きたい街 SENDAI」を目指して

～「地学地就」を目的とした情報科と(仮称)情報専攻科の創設と「産学官」連携によるデジタル技術を活用できるエンジニアの育成～

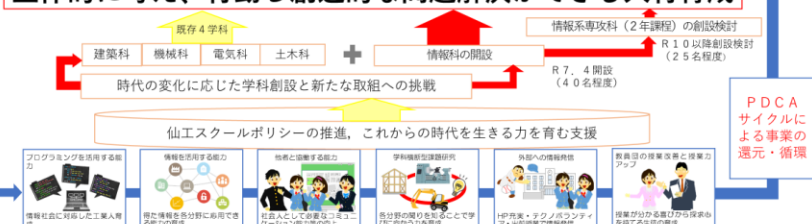
一事業概要一

本事業を活用しながら、次の3点を目的として、IT化が進行する地元企業への就職に直結した、効果的な指導体制のあり方と教育課程の編成について、地元企業と連携した実践を通じて協議し、整備していく。

なお、本事業で育むべき生徒像は、単にデジタル機器の活用にとどまらず、「基本的なデジタル技術や情報セキュリティに係る知識と能力を身に付け」、「企業が取り入れているITについて実習やインターンシップ等を通して学び」、「業種の融合や新たな事業展開の可能性を広げるベースとしてITを活用できる」資質能力を身に付けた生徒と捉えており、CEOの采配や産業実務家教員の実践的で実務的な指導の果たす役割は大きなものとなる。



主体的に考え、行動し創造的な問題解決ができる人材育成



(1) 既存学科(建築科、機械科、電気科、土木科)における、実務に直結したIT活用能力と、ITを活用した柔軟な対応力の育成

・連携企業の産業実務家教員に授業・実習等を担っていただくほか、就労や課題研究におけるメンタリング、デュアルシステム等で協力いただくことを通し、現在の企業が求める資質能力を身に付けた高卒者を輩出する。

(2) (1)に基づいた既存学科の改編と情報科の開設に向けた教育課程の編成・情報科の設置と、(仮称)情報専攻科など上位の学びにつなぐ連携の可能性の検討を進め、これからの時代に重要となる、ITが持つ、様々な領域を融合する可能性を活用できる基礎力と発想力を身に付け、地域への就労(「地学地就」)につなげる。特にBIMなどの運用は、情報技術科目の一環として、他のデジタルツールの運用などと共に実施されている。産業界からは主として建築現場の施工技術者育成を託されていることから、社会人として必須のデジタルリテラシーの獲得を目標にし、これにより将来、地域企業のイノベーションに貢献できる人材育成に、地域の学校が寄与する、地域の「人材育成エコシステム」につなげていく。

(3) 「産官学」連携によるデジタル技術を活用できる人材育成の他校への適用

前述の指定校では、マイスター・ハイスクールCEOが既存学科担当と情報交換を行い、各科が関連する業種でのAIやロボット等の最先端技術を導入している地域企業から産業実務家教員の協力を得ながら、質の高い授業や実習を行い、時代に即した工業界の就労に直結したITを活用できる能力を身に付けた人材の育成を目指す。

5年後、10年後の社会変革を見据え、今後、事業の成果は仙台市立高等学校各校の実情に応じて教育課程に反映させていくことも視野に入れている。

例えば、商業高校では卒業後は商業の学びを生かし、事務職を中心に小売業や金融業に従事する者が多い。情報セキュリティの管理、ネットワークの設計や構築を含め、事務職として即戦力となるよう、デジタル機器や会計業務に係るアプリケーション活用能力を身に付けることを重視してきた。

しかし、これまでの対面や紙による取引から電子化への転換期を迎えている昨今、商業高校においても大学や企業と連携して商取引の現状を学び、新たな商品の開発、関連企業との業務提携、マーケティング市場の開発、企業情報の発信等に、柔軟な発想でITを活用できる能力を身に付けることは必須である。

大学進学者においても卒業後は地元企業に就労する者が多く、商業高校におけるIT活用能力の育成は、工業高校と同様に持続可能な「地学地就」につながり、本市の施策である「働きたいまちづくり」に貢献することになる。



学校の具体的な取組など詳しい内容は以下よりご覧ください

(文部科学省ホームページ:令和7年度マイスター・ハイスクール事業成果発表会)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00013.htm



【マイスター・ハイスクール】 清和学園高等学校(工・家) 令和5～7年度指定

一事業名一

「レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX人材養成モデルの構築」

一事業概要一

近年ICT(情報通信技術)やIoT(モノのインターネット)が急速に発展・普及し産業構造が目まぐるしく変化する中、本校は、通信制高校でありながら、全国唯一の国家資格が取得可能な学校であり、工業(自動車科)・家庭(調理科)を有する専門高校に匹敵する新しいスタイルの高等学校である。

越生町は、埼玉県一の「梅・ゆず」の生産地であるが、この地域産業に関する持続性・継続性が大きな課題の一つである。

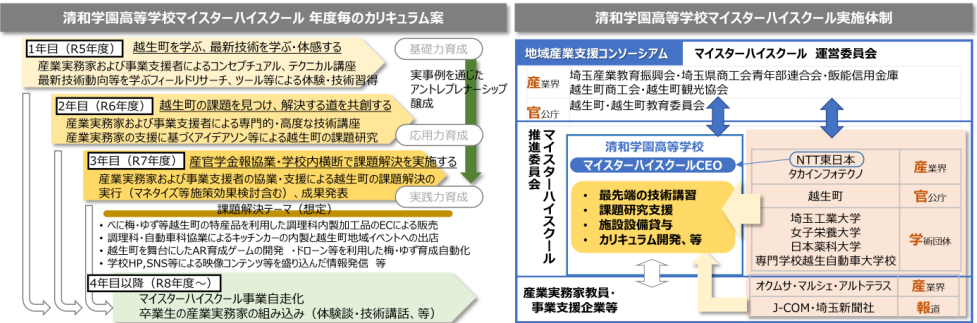
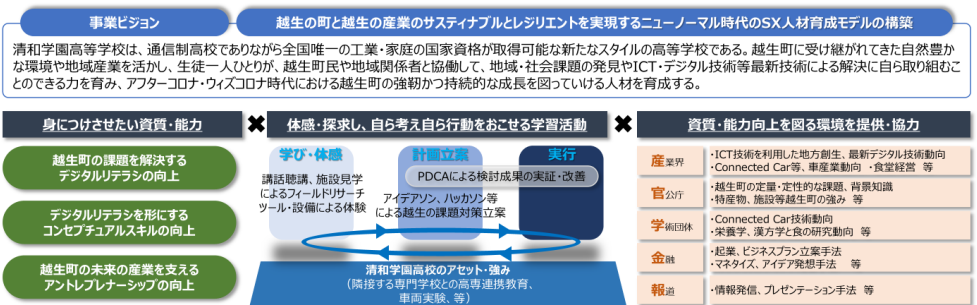
①梅・ゆず農家の高年齢化・後継者不足、②梅・ゆず販売単価の低減化。豊かな自然環境を背景に観光振興策の一つとして全国初の「ハイキングの町」宣言しているが、成果指数は目標値に届いていない。これらの課題に対し、観光資源の有効活用と農産物の元々持っている価値を更に高め、生産性の価値を上げる食品加工(2次産業)流通・販売(3次産業)に取り組み、栽培から収穫、加工、流通・販売といった「梅・ゆず」農家の一連のビジネスバリューチェーンの作業毎に、生徒ならではの新鮮な目線でのアイデアを励起し盛り込み、解決に向けての取り組み活動を推進する。

また、6次産業化を目指した取り組み活動を通して、町が掲げる産業振興と観光の町の発信の中で、越生ブランド振興事業の創設や地場産業の振興・町のPRの推進を念頭に、生徒が主体的に自らの視点で、町の課題を見つけ解決する道を共創し、Connected carとしてのキッチンカーの運用や環境に配慮した「CASE」最新技術等の研究を進め、学校魅力化やSX人材養成モデルの構築Sustainability Transformationを掲げて、持続可能な地域活性化に向けた事業を産業界と地域の関係者とが協働し、解決を図ることができる次世代マイスターの育成を行う。

管理機関名 (清和学園高等学校/東日本電信電話株式会社/越生町) 清和学園高等学校

令和7年度 マイスター・ハイスクール事業

レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX (Sustainability Transformation) 人材養成モデルの構築



管理機関名 (清和学園高等学校/東日本電信電話株式会社/越生町) 清和学園高等学校

令和7年度 マイスター・ハイスクール事業

レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX (Sustainability Transformation) 人材養成モデルの構築

令和7年度目標：カリキュラムの定常化・地域課題解決の実践

CASE最新技術 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科 ● CASEの概要、仕組み、講義、学習 ● 実証フィールドによる体験授業 【産業実務家教員・事業支援者】 ・日産プリンス埼玉販売（株） ・埼玉工業大学 ・(株)FOMM ・埼玉トヨタ自動車（株） ・埼玉スバル（株）	車産業動向 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科 ● 最新FA技術のフィールド見学 ● 実地体験 ● 次世代自動車整備技術動向 【産業実務家教員・事業支援者】 ・日産プリンス埼玉販売(株) ・埼玉工業大学 ・(株)FOMM ・埼玉スバル（株） ・専門学校越生自動車大学校 ・埼玉トヨタ自動車（株）	栄養学・漢方学と食の研究 授業対象学科 ■ 調理科 ● 越生名産のべに梅・ゆずの栄養学・漢方学知見から見た講義 ● 各学術的知見に基づく新たな特産加工品の開発、成分分析 【産業実務家教員・事業支援者】 ・女子栄養大学/香川調理製菓専門学校 ・日本薬科大学	特産品開発・飲食店経営 授業対象学科 ■ 調理科 ● 特産品開発の企画、販売、パッケージングの実地体験 ● 生産・販売拠点道の駅を活用した飲食店経営の実地体験 【産業実務家教員・事業支援者】 ・(株)越生特産物加工研究所 ・女子栄養大学/香川調理製菓専門学校 ・東京山手調理師専門学校/山手調理製菓専門学校 ・オクムサ・マルシェ ・越生町商工会・観光協会
ICTを利用した地域創生手法 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科 ● 実証フィールドによる実験参画（ドローン・農業ICT・観光AR、等） ● 地域特産とテクノロジーの掛け合わせをするアイデアの創出（アイデアソン、等） 【産業実務家教員・事業支援者】 ・NTT東日本 ・(株)タカインフォテック ・(株)アルトテラス	最新デジタル技術 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科 ● XR技術、ゲーミングプログラムを活用した地域の魅力発信につながる実験参画 ● NW・クラウド等の基本技術からAI活用などの講義、学習、体験 ● 動画など各種デジタルコンテンツ作成についての講義、実証 ● 各種ツールを利用したサイバーセキュリティの知識学習、体験 【産業実務家教員・事業支援者】 ・NTT東日本 ・(株)タカインフォテック ・(株)アルトテラス	コンセプチュアルスキル等 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科 ● 越生町の資源を活用したビジネスプラン策定講義、学習 ● 策定プランについてのプレゼンテーション ● 資金調達等のファイナンス知識の講義、学習 ● ICTを駆使したホームページ、SNS等の知識学習、体験 【産業実務家教員・事業支援者】 ・(株)タカインフォテック ・飯能信用金庫 ・オクムサ・マルシェ	

学校の具体的な取組など詳しい内容は以下よりご覧ください

(文部科学省ホームページ: 令和7年度マイスター・ハイスクール事業成果発表会)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00013.htm



【マイスター・ハイスクール普及促進事業：先進的取組型】
北海道教育委員会（農・商・水・工） 令和6～7年度指定

一事業名一

北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト

一事業概要一

・本事業では、指定校にマイスター・ハイスクールCEOが配置されたことで、高度熟練技能者による指導、企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的かつ体験的な学習活動が充実した。こうした連携体制による教育実践を踏まえ、北海道教育委員会に産学連携コーディネーターを配置することにより、都市部に所在する企業をはじめ、各地域の産業界等と専門高校を人的につなげることで、実践的な職業教育の充実を図る。

・企業を対象とした専門高校との連携に関する意向調査を実施し、謝金等が不要で出前授業等が可能な職業人をデータベース化した「産業実務家教員リスト」を作成し、専門高校で共有する。本リストは、専門高校と産業界の双方にとってプラスとなる関係性をベースにしており、学校の実態や学科の特徴に応じた人的資源の活用を促進する。

・産業構造の変化に対応した教科指導や進路指導の充実を図るため、半導体関連産業や洋上風力発電、スマート農業・水産業や建設DXなどの職業理解に資する「おしごとガイドブック」を制作し、全道の中学1、2年生と高校1、2年生、経済団体等に配付する。

・専門高校の教員や企業、生徒を参加対象とした「産学連携シンポジウム」などのイベントを開催し、他校・他学科で実施している産業界等との連携・協働の取組を共有することにより、道内の各専門高校における職業人材育成システムの構築を促進する。

・課題の解決に向けて、産学連携コーディネーターを高校教育課に配置し、職業学科担当の指導主事と連携しながら、道内の専門高校を支援する「北の専門高校プラットフォーム」の創設を目指す。産学連携コーディネーターの主な役割は、本プラットフォームの柱である次の3点とする。

- ① 人的ネットワークの構築
- ② 産業実務家教員リストの作成と活用促進
- ③ 新たな産業や専門高校への理解促進

管理機関名（北海道教育委員会）、学校名（北海道室蘭工業高等学校 他3校） 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業（先進的取組型）

北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト

次世代半導体製造拠点の立地や洋上風力発電の導入など、産業構造が大きく変化している中、地域創生を担う産業人材を育成している専門高校と産業界をつなぎ、産学連携を強化するとともに、専門高校の価値や魅力を広く発信し、魅力ある北海道を創る人材育成を推進する。

専門高校と産業界の連携における課題

- ①連携した取組が少ない
- ②連携の進め方や配座点不明
- ③ニーズ等が異なり、連携が進みづらい
- ④教員が多忙なため企業等と調整不足

横のつながり

横と縦の糸で専門高校のつながりを支援

専門高校が**学科の垣根を超えて連携**し、効果的な職業人材育成システムを、他の専門高校に**自主可能な形で横展開**

縦のつながり

専門高校と**企業や中学校との縦の連携**を促進するとともに、**地域創生**を担う産業人材を育成している**専門高校の価値や魅力**を広く発信

ONE-TEAMコミティの発足

有識者で構成し、本プロジェクトの推進に向けて、専門高校の視察や産学連携に関する協議を行い、専門の見地から指導・助言

本プロジェクトのゴールイメージ

産学連携コーディネーター
専門高校と産業界が**サステナブル**※につながる

KPI

- ① 産業界との連携・協働体制を組織的に構築できている専門高校の割合（道立の専門高校56校）
【R5: 7%（実績値） R6: 14% R7: 50%】
- ② 産業界の有識者を招いた協議等の機会を設けて、地域の人的・物的資源を活用しながら教育活動を行っている専門高校の割合（道立の専門高校のうち、農工商水54校）
【R5: 54%（実績値） R6: 61% R7: 91%】

産学連携コーディネーターの役割

北の専門高校プラットフォームを創設

- ◆人のつながりを生む機会を創出
産学連携シンポジウムなど、産学連携に資する機会を創出し、専門高校と産業界等を、学科の特性に応じて**人的につなげる**
- ◆産業実務家教員リスト2.0の作成
謝金等が不要で出前授業等が可能な**職業人をデータベース化したリスト**（R6作成）をアップデートし、産学連携を促進
- ◆新たな産業や専門高校への理解促進
DXを活用して働く専門高校の卒業生や、産学連携、学科の垣根を超えた連携などの事例を紹介する**おしごとガイドブック2025**を制作し、中高生や経済団体に配付

管理機関の役割

- ◆ONE-TEAMコミティを設置し、広域分散型の本道における産学連携の推進に向けて、拠点校と協力しながらプロジェクトを展開
- ◆産学連携コーディネーターを配置し、専門高校の産学連携を支援
- ◆専門高校を拠点とした**地域創生**や**地域人材の育成**に資する取組を推進
- ◆専門高校の**価値や魅力**を産業界や中学校に普及・啓発

横展開のイメージと拠点校の役割

【横展開のイメージ】
◆北海道を4つの圏域に分割し、それぞれの圏域に拠点校を配置
◆各圏域ごとに実施によるイベントの開催が可能になり、**地域に根ざした活動が可能**

【拠点校の役割】
◆管理機関と連携し、他の専門高校や産業界の関係者等に対して、産業界と連携した効果的な取組やその成果等を広く発信

管理機関名（北海道教育委員会）、学校名（北海道室蘭工業高等学校 他3校） 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業（先進的取組型）

北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト

令和7年度のねらい

- ◆専門高校や産業界等を対象としたイベント等を通じて、人的ネットワークを強化し、サステナブルな職業人材育成システムを構築する
◆高校や教員が新たな産業構造や専門高校の価値・魅力を理解する機会を創出し、地域の担い手となる人材育成を推進する。

令和7年度の取組とスケジュール

◆ONE-TEAMコミティ

2年目開始

5月 拠点校ミーティング
拠点校4校の代表教員が参集し、拠点校としてのマインドをセット。

10月 専門高校の教員や産業界の関係者を対象に、拠点校ごとに参集で開催。職業人の指導による実践的な授業等を視察した上で、地域の魅力やニーズを捉えて、意見交換を実施。（4会場）

2月 7つの職業学科や産業界の関係者等と北海道産業教育審議会建議【R7.11月】の概要を共有し、意見交換等を実施。（1会場）

産業実務家教員リスト2.0、おしごとガイドブック2025

北の専門高校ONE-TEAMフェスタ

★ONE-TEAMニュース

※教育・企業関係者に向けた通信

先導事例がある熊本県などの専門高校と道内の専門高校がタッグを組み、生徒や教員による協議等を行い、日本の専門高校ONE-TEAMに向けた一歩を踏み出す。（オンライン）

専門高校と産業界の連携・協働が強化
持続的な産学連携
専門高校の魅力up
地域産業界の活性化
2年以降のサステナブルな産学連携につながるイベントを開催。（1会場）

新たな産業や技術革新に対応し、専門高校の価値や魅力を発信するONE-TEAMの主な取組

出前授業・バスツアー等

半導体や洋上風力発電に関する出前授業やバスツアーにより、産業技術や体験的に学び、産業構造の変化に対応。

農薬×工業×商業×水産

どこぞくらぶで魅力発信

農業、商業、水産科の生徒が企業と連携して開発した商品を北海道のアナタショップで販売し、6次産業化を体験。

農業×水産×商業

各種オンラインセミナー

技術革新に対応するための教員向けセミナーと併せて、専門高校の特徴的な取組等を、企業や経済団体関係者に紹介。

農薬×工業×商業×水産

中学校等との連携強化

中学生保護者や中学校教員を対象に「専門高校魅力発見ミーティング」を開催するほか、中高連携による成果等を発信。

農×工業×商業×水産×学

目指す姿

地域を支える最先端の職業人材の持続的な育成
地域創生の実現



【マイスター・ハイスクール普及促進事業：先進的取組型】
福井県教育委員会(全専門分野) 令和6～7年度指定

一事業名一
産学共創による輝く次世代の地域人材育成システム推進事業

一事業概要一

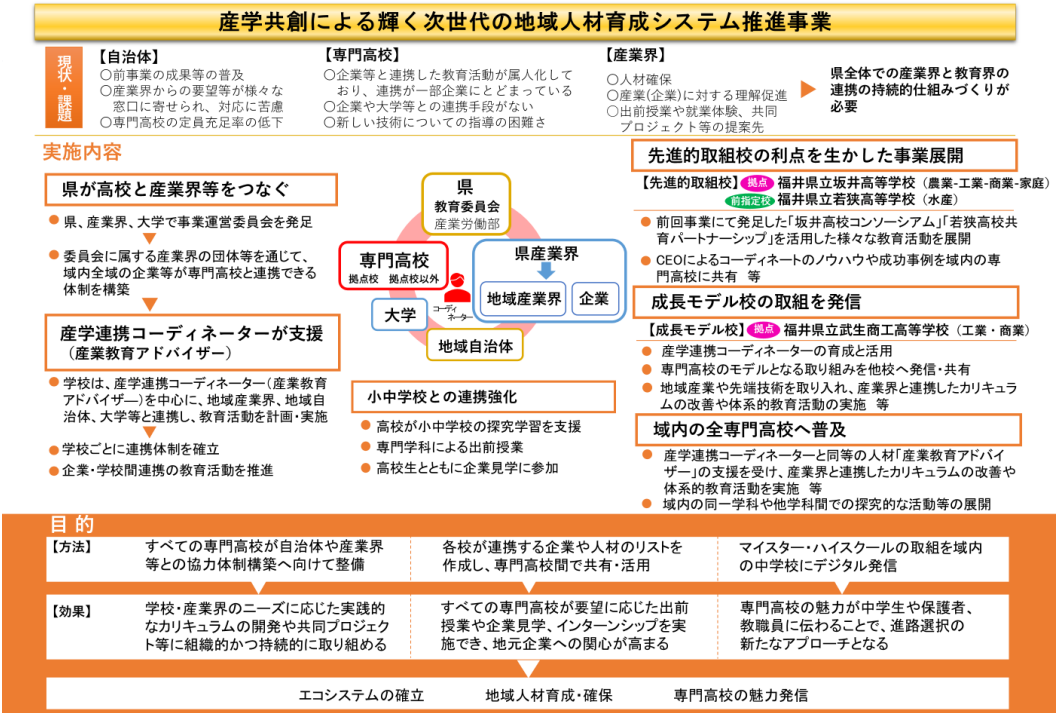
・県(教育委員会・産業労働部)や事業運営委員会に所属する産業界団体を通じて、域内全域の企業が専門高校との連携を視野に入れた協力体制を構築。各校との連携を通じて、カリキュラムの改善や体系的な教育活動を、より実践的かつ現実的なものへと進化させる。

・坂井高校や若狭高校は、事業を通じて構築した地元産業界との連携体制や、コーディネート機能の運用経験など、得られたノウハウや成功事例を域内の専門高校に共有する。

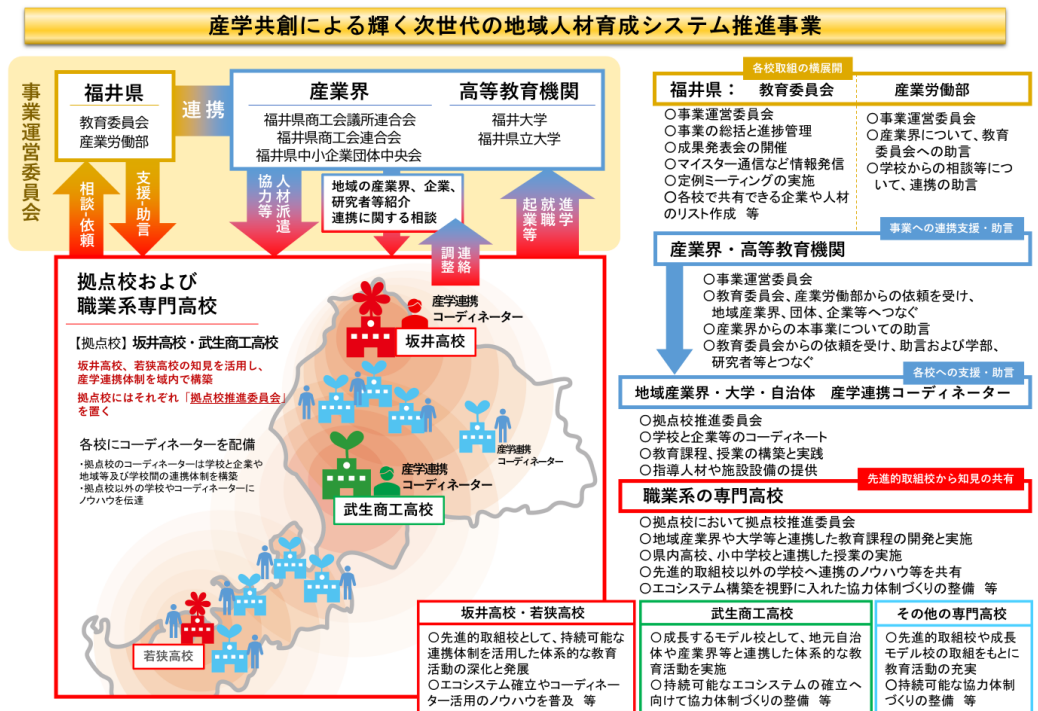
・武生商工高校は、産学連携コーディネーターの育成・活用方法や、自立運営に向けたエコシステムの構築を目指し、率先して事業を推進。この取組により、成長する専門高校のモデル校としての役割を果たし、他校とその成果を共有する。

・その他の域内専門高校は、拠点校のノウハウを活用しつつ、産業界と連携した教育活動をさらに充実。同時に、エコシステム構築を視野に入れた協力体制の整備を進めていく。

管理機関 (福井県)、拠点校 (福井県立坂井高等学校 福井県立武生商工高等学校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業 (先進的取組型)



管理機関 (福井県)、拠点校 (福井県立坂井高等学校 福井県立武生商工高等学校) 令和6年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業 (先進的取組型)



学校の具体的な取組など詳しい内容は以下よりご覧ください
(文部科学省ホームページ:令和7年度マイスター・ハイスクール事業成果発表会)
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00013.htm



【マイスター・ハイスクール普及促進事業：先進的取組型】
熊本県教育委員会・熊本県商工労働部（農・商・福・工） 令和6～7年度指定

一事業名

熊本県版マイスター・ハイスクールによる持続可能な産業人材の育成
～自律的に学ぶ生徒を育てるための学校と産業界の絶え間ない協働～

一事業概要

八代工業高等学校におけるマイスター・ハイスクール事業の成果を活用しながら、新規拠点校において「産業人材育成の複数校での導入」と「産業界と学校が自律的・持続的に連携する仕組みづくり」の視点から本事業に取り組み。その導入の過程で得られた下記をはじめとした多くの知見を分析・整理し、更なる普及に資する好事例としてとりまとめ、ドキュメントとしてパッケージ化、周知することで成果の県域への普及に取り組む。

- ・県域の産業界との合意形成と連携のプロセス（事業運営委員会、事業推進委員会等）
- ・学校が立地する地域との合意形成と連携のプロセス（市町村や地域産業界）
- ・学校内における取組のルール化のプロセス（スクールミッションや校務分掌等）
- ・本事業の推進における産学連携コーディネータの在り方
- ・他校や産業界に対する成果普及に係る情報発信や周知の在り方
- ・産業界と学校が一体となった体系的な教育システムの構築のプロセス

○マイスター・ハイスクール事業の成果を活用した産業人材育成活動の複数校での導入
八代工業高等学校での成功の大きな要因は下記の5点である。これらの成果を活用しながら、新規拠点校に導入し、その導入や改善のプロセス及び成果を分析し、様々な学校で活用可能な汎用性の高い好事例としてまとめ、普及することにより他校での展開を図る。

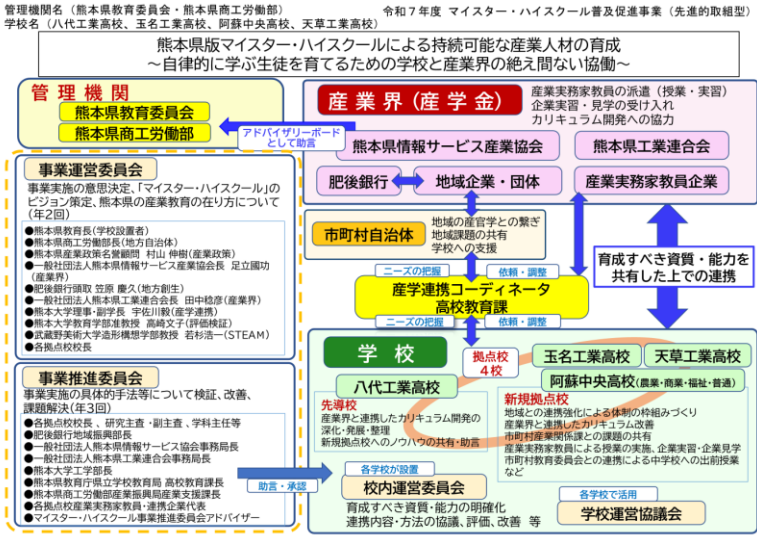
- ①産業界と学校での目標の明確化・共有化
- ②学校全体での組織的なPDCAサイクル
- ③産業実務家教員と学科の継続的な対話
- ④データ分析による改善
- ⑤産学官金による組織的なバックアップ

○産業界と学校が自律的・持続的に連携するための仕組みづくり

八代工業高等学校における事業成果は、（一社）熊本県情報サービス産業協会の全面的な協力と、多くの産業界のリーダーの協力の元にモデル作りとして取り組んだ結果である。このモデルを普及させるには、産業界の個々の企業と学校が自ら繋がり、自律的に連携を進めていく他校で活用できる「仕組み」づくりも重要であり、仕組みづくりのプロセスと仕組みそのものも好事例としてパッケージに組み込む。主な取組は下記のとおり。

- ・持続的な地域振興、地域産業界の発展の視点に立った拠点校の市町村、地元産業との連携による市町村単位の産学官連携のエコシステムの構築
- ・八代工業高等学校の教師及び産業実務家教員によるノウハウ共有のための研修会
- ・産学連携コーディネータによる学校間及び学校と企業間のコミュニケーション支援
- ・県の各事業におけるコーディネータ間の情報共有や連携による持続的で効果的な学校支援及びマッチング体制の構築

管理機関名（熊本県教育委員会・熊本県商工労働部） 学校名（八代工業高校、玉名工業高校、阿蘇中央高校、天草工業高校）		
令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業（先進的取組型）		
熊本県版マイスター・ハイスクールによる持続可能な産業人材の育成 ～自律的に学ぶ生徒を育てるための学校と産業界の絶え間ない協働～		
（自治体において）	【申請者の現状・課題】	（専門高校において）
○拠点校が立地する基礎自治体、肥後銀行各支店と、管内企業・地域課題と学校のマッチング機能を含む合意形成を図り、産学連携プラットフォームの構築を模索した。 ○産業界、自治体、学校と「熊本県版マイスター・ハイスクール」参加への合意形成を図り、8団体を対象に取組周知や意向調査を行った。 ○連携プラットフォームの関係機関の役割が明確であり、活用に係る手順等の定めがある。 ○連携プラットフォームを特長とするため、評価・改善のプロセスについての整理が必要である。	○拠点校がマイスター・ハイスクールビジョンを定め、市内の連携体制を構築した。 ○先導校である八代工業高校は、効果的に産業界との連携を推進・拡充し、自律的・持続的な連携体制を確立している。 ○新規拠点校は産学連携コーディネータからの支援を活用し、地元企業との連携・授業等の取組を開始している。組織的に連携を進める体制の定着が必要である。 ○カリキュラムの刷新を含めた持続的・自律的な取組に向けていく必要がある。 ○県域の全教員に「熊本県版マイスター・ハイスクール」の理念に対する理解を深める必要がある。	
（自治体において）	【実施内容】	（専門高校において）
○産業界と学校が自律的・持続的に連携するための仕組みづくり：持続的な地域振興、地域産業界の発展の視点に立った市町村単位の産学官連携のエコシステムの構築・検証・改善（活用手順の明確化、関係機関の役割の共通理解等）、産学連携コーディネータによる基礎自治体と連携した地元企業・地域課題とのマッチングやコミュニケーションの支援、周知・広報活動の充実、関係普及・自立化に向けた在り方の検討 ○事業実施の過程で得られた知見や学びをドキュメント化 ○県域の産業界との合意形成のプロセス、学校が立地する地域との合意形成のプロセス、学校内における取組のルール化のプロセス、本事業の推進における産学連携コーディネータの在り方、他校や産業界に対する成果普及に係る情報発信や周知の在り方、産業界と学校が一体となった体系的な教育システムの構築のプロセス等をとりまとめる。	○拠点校における組織的な取組の定着：アセスメントシートを参考に、学校の現状や進捗状況を把握し、学校全体での組織的なPDCAサイクルの効果的な運用のモデル化、自立化を見据えた市町村単位のエンジニアリング運用に向けた各拠点校における産学連携推進委員会の実施 ○拠点校におけるカリキュラム刷新と連携強化 ○関係機関のドキュメント化と、カリキュラム検討の進捗状況を確認するアセスメントシートを活用し、学校と産業界との対話を基盤としたカリキュラム刷新のPDCAサイクルの確立、地域課題への取組進捗、好事例の整理・成果の可視化 ○普及促進に向けた取組：拠点校全教員研修、拠点校を基盤とした県内高校における教員研修、産業界と連携した学校の取組を支援	
【目的】		
（自治体において） 本事業（産業界と専門高校の連携）を通してどんな変化を目指すか		（専門高校において）
○県域の産業界と教育界、自治体との共通目標と実施計画、ロードマップ、客観的な成果指標の開発など連携システムを作り、持続可能な連携基盤とする。 ○上記取組を他校のモデルとする自立的なシステムを確立することで、県全体の高等学校（専修・専攻・普通・専修）への普及を図る。 ○新規拠点校の導入プロセスや企業と連携したカリキュラムの刷新、産学連携コーディネータの在り方、他校や産業界に対する成果普及に係る情報発信や周知の在り方、産業界と学校が一体となった体系的な教育システムの構築のプロセス等をとりまとめる。 ○市町村単位の取組モデルと県域でのモデルとしての連携を示すことで、市町村の取組意欲を高めたり、取り込む上で参考にできるようにする。	○学校と地域の産業界が自律的・持続的に連携する市町村単位のエコシステムを構築する。 ○拠点校で各校の目標とする教育充実のために、学校と企業が効果的に連携しながらカリキュラムの刷新に取り組む、開かれた教育課程を実現する。 ○高校生が地域社会の発展のために取組むことにより、社会の一員としての使命感を持つとともに、主体的な問題発見・解決に取り組む姿勢及び能力を育成する。 ○プロセスや成果を好事例としてとりまとめたものを活用することで、今後、新しく取組を開始する学校の負担軽減と取組意欲の向上を図る。 ○効果的にコーディネータを活用するモデルを作成することで、自律的に学校と企業が互いに連携できるようにする。	



【マイスター・ハイスクール普及促進事業:連携体制強化型】
山形県教育委員会(農・商・水・家・看・情・工) 令和6~7年度指定

一事業名一
山形県魅力ある県立高校づくり推進事業「次世代地域産業人材育成事業」

管理機関：山形県教育委員会 拠点校：山形県立産業系高校14校 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業（連携体制強化型）

山形県魅力ある県立高校づくり推進事業「次世代地域産業人材育成事業」

《申請者の現状》
山形県教育委員会では、令和5年度からの新規事業において、持続可能な地域社会の実現や、産業系高校教育の充実のため、自治体・産業界・大学等で構成する協議会（コンソーシアム）を産業系高等学校13校に設置し、地域のニーズを踏まえた教育課程の開発や地域産業界との連携・協働による特色化・魅力化を図ることとした。（コンソーシアムの設置は、R7開校の新庄南を除く。）

《実施内容》
本事業においては、産業系高等学校14校を拠点校に指定し、コンソーシアムの円滑な運営と地域産業界との連携強化を図るため、地域産学連携コーディネーターを派遣する。
拠点校における各産業の次世代分野（AI・IoT・ドローン・ロボティクス）の研修や産業現場における長期研修（インターンシップ）や地域産業界との連携を図る。（新庄南を拠点校に加える。）

《背景》
・中教審答申「新しい時代の高校教育の在り方」
・学校教育法施行規則改正（R4.4.1）
・山形県産業教育審議会答申（R4.10.26）

《課題》
・コンソーシアムにおける地域産業界との連携強化
・社会や各産業の変化に対応できる人材の育成
・山形の各産業の未来を担う人材の育成（県内定着）
・産業系高校の志願倍率の低下

《目的》
○生徒が、地域や社会をフィールドとした学びの中で、技術の進展を肌で感じ、学校の学びを社会貢献に活かそうとする意欲を持つ職業人の育成
○外部人材の活用により、地域との連携・協働による探究型学習の推進
○地域産業の理解により、県内就職等地元定着や、大学等進学後の県内帰郷

県立産業系高校 産業教育連携協議会(コンソーシアム)

【大学・学校関係者】
・大学教授 ・県立産業技術短期大学校教授等
・校長、同窓会、PTA関係者等

【自治体】
・県、総合支庁担当課
・市、町教育委員会
・市、町担当部長

【産業界】
・商工会議所・企業
・J A、農業経営者
・市町商工会等

拠点校 14校

<産業教育連携協議会(コンソーシアム)事務局>
事務局長：各校事務部長（教頭、事務長）
事務局員：市、町各課員、市商工会、学科長等

【コンソーシアムの事業概要】
・各産業高校に自治体、産業界、大学等からなる協議会を設置
・各産業高校の魅力化・特色化に向けた地域連携事業や教育課程について、協議会において検討する。
・各産業高校において、小中学校との連携を強化し、各産業の担い手を目指す入学者増を図る。

**令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業
魅力ある県立高校づくり推進事業「山形県次世代地域産業人材育成事業」**

山形県

【山形県教育委員会】
・事業運営委員会（年2回）
・地域産学連携コーディネーターの配置（拠点校へ派遣）
・産業教育連携校会議開催
・産業教育連携シンポジウム開催
・成果報告書（デジタル版）発行

【拠点校(山形県立産業系高校14校)】
・次世代産業人材育成研修プログラム
①次世代分野（AI・IoT・UAV・ロボティクス）研修
拠点校において、次世代分野のスペシャリストによる授業・研修の実施
②次世代産業分野長期研修（インターンシップ）
産業現場における長期研修において、地域産業の次世代を担う人材の育成を図る。

拠点校 14校

地域産学連携コーディネーターによる地域産業界とのマッチング

連携・支援

拠点校：職業に関する学科を設置する全ての山形県立高校14校

一事業概要一

(1) 県教育委員会における取組

① 地域産学連携コーディネーター派遣
コンソーシアムを設置する産業系高等学校に対し、地域産学連携コーディネーターを派遣し、コンソーシアムの円滑な運営と地域産業界との連携強化を図る。
・地域産学連携コーディネーターの派遣 13校×6回
・教育委員会における打ち合わせ・執務等 4人×4回 計94回

② 産業教育連携校会議・シンポジウムの開催（R6は連携校会議及び研修会を開催）
産業系高校（拠点校）、産業界等、関係機関等が一堂に会し、産業系高校と地域産業界とが一層の連携強化を図るため、シンポジウムを開催する。
・産業教育連携校会議・web会議2回
・産業教育連携シンポジウム
地域産学連携コーディネーター・学校と地域との連携に造詣の深い学識経験者をパネリストとする予定

(2) 拠点校における取組

① 各産業の次世代分野（AI・IoT・ドローン・ロボティクス）研修
・次世代分野のスペシャリストによる講義・実習
14校大学科1回（土木分野を学ぶ学科は1回追加する）
県内又は県外講師（旅費基準地：東京）を招聘
・地域産業界の参加希望者も受講可能とする。

② 産業現場における研修（長期インターンシップ含む）
・14校大学科ごとに産業現場における長期インターンシップ及び企業における各科目の 実習、授業を実施する。

③ 専門学科の魅力発信
・SNS等を活用し、専門学科の学習の魅力等について、積極的に情報発信を行う。

学校の具体的な取組など詳しい内容は以下よりご覧ください
（文部科学省ホームページ:令和7年度マイスター・ハイスクール事業成果発表会）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00013.htm



31

【マイスター・ハイスクール普及促進事業:連携体制強化型】
静岡県教育委員会(普・工) 令和6～7年度指定

一事業名一

Society5.0 実現を牽引する未来思考型産業人材育成プロジェクト ～カーテクノロジーミュージアムによるSTEAM教育の実践と普通科への普及～

一事業概要一

以下の事業の推進により、EVなど次世代自動車に対応した産業人材の育成を目指す。

①次世代自動車に対応したカリキュラム開発
スズキ(株)や神奈川工科大学等と連携し、EV・水素自動車・空飛ぶクルマ等の次世代自動車の先端技術を学ぶことができるカリキュラムを開発

②実習場の展示物等の拡充

既存の実習場に、車両・エンジン等の実機や、生徒が作成した自動車技術に関連するパネル・ポスター等を展示し、カーテクノロジーミュージアムにリニューアル。自動車開発や経済発展、環境問題等の変遷を時系列で学ぶことができるSTEAM教育の場を設置

③普通科における産業人材育成

普通科未来クエストコースに、新たに工業系列(STEAM系列)の教育課程を編成

④STEAM Teacher の育成

教科横断的思考を育成する授業改善と生徒一人一人の学びの深まりを評価する評価方法の開発

⑤就職支援

普通科生も含めて就労体験(国内外インターンシップ)を実施、起業プログラムを取り入れたシラバスを策定

⑥海外人材の確保

スズキ(株)が海外法人を設置している国から留学生の受入れ、留学生向け入学試験の策定、自動車整備士・危険物等の資格取得支援

⑦事業成果の横展開

成果報告書のとりまとめ、成果報告会の開催、県内企業や他校と連携したワークショップ・交流会等の開催

⑧ 県の次世代自動車施策との連携

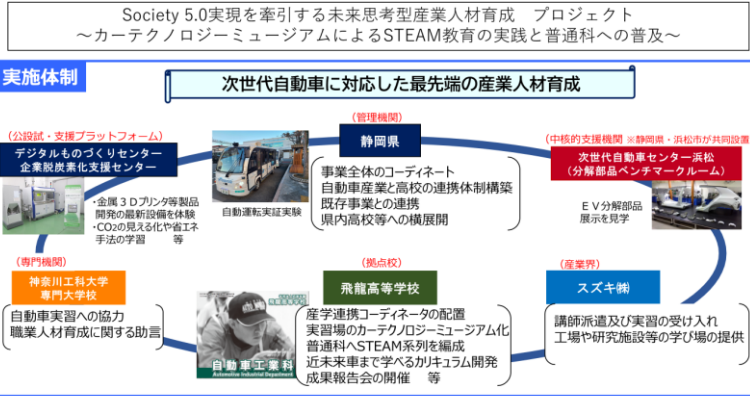
県事業と連携して、拠点校の高校生に以下のプログラムを提供

- ・中核的支援機関「次世代自動車センター浜松」に設置している、国内外の最新EVの分解部品の展示場(ベンチマークルーム)の見学
- ・「デジタルものづくりセンター」に導入した、次世代自動車の開発に不可欠な金属3Dプリンタ、設計シミュレーション、3Dスキャナ等の体験
- ・脱炭素推進拠点「企業脱炭素化支援センター」を活用した自動車産業における脱炭素に向けた取組(CO2の見える化や省エネ手法)の学習
- ・市が実施する自動運転実証実験の見学、自動運転車両の試乗(沼津市、富士市等)
- ・県が開催経費の一部を負担する学生フォーミュラ日本大会への招待、出場する県内大学(静岡大学、静岡理工科大学等)との交流

管理機関名(静岡県)、学校名(飛龍高等学校) 令和6年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

Society 5.0実現を牽引する未来思考型産業人材育成 プロジェクト ～カーテクノロジーミュージアムによるSTEAM教育の実践と普通科への普及～	
静岡県	飛龍高等学校
現状・課題 ・本県の基幹産業である自動車産業は、2050年のカーボンニュートラル達成や2035年までに軽自動車を含む乗用車の新車販売の全てを電動車とする国目標への対応など、100年に1度とも高まる大きな変革期を迎えている。 ・自動車産業の持続的な発展に向けて、新たな技術の変化に即応した次世代自動車の開発・生産・メンテナンス人材の育成が急務である。	・EV化に伴い、自動車の機能や製造方法が大きく変化しているにも関わらず、学生が学ぶ内容はガソリンエンジン中心のカリキュラムとなっている。 ・近年、中学生の志願状況が減少傾向にある。 ・企業から寄せられる多くの求人に応えきれない。
実施内容 ①事業全体のコーディネート ・事業運営委員会の運営、事業全体の進捗管理 ・自動車産業と高校の連携体制構築支援 ②県の次世代自動車施策との連携 ・次世代自動車センター浜松に展示されているEV部品を学習 ・デジタルものづくりセンターの最新設備を体験 ・自動運転実証実験の自動運転車両への試乗 等	①令和6年度実施した校外研修等を入り込んだシラバス等の体系化と自走に向けた教育課程・シラバスの策定 - スズキ：開発理念 トヨタ：水素エンジン - 日産：電気自動車 ホンダ：環境問題の領域を担当 ②令和7年度未来クエストコース入学生を対象した、2年次以降STEAM(工業)系列の教育課程編成・提示
目的 ・自動車産業が、EV(電気自動車)化やデジタル化、脱炭素など100年に一度の大変革期を迎える中、スズキ等々の企業と継続的な連携を通して、次世代自動車(モビリティ)に対応できる産業人材の育成 ・自動車を通して「システム思考」を涵養し、経済・エネルギー問題、過疎化等日本の課題解決に挑む人材の育成	
指標①	課題解決型思考に対する好意的回答の増加、自動車関係の高等学校(大学等)への進学者数の増加 等
指標②	国家二級整備士・危険物取扱者試験等の合格率の向上、校外研修(企業の施設を利用した校外研修を含む)参加者の満足度の向上、インターンシップ(国内外)参加者の増加 等

管理機関名(静岡県)、学校名(飛龍高等学校) 令和6年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)



【マイスター・ハイスクール普及促進事業:連携体制強化型】
兵庫県教育委員会(工) 令和6~7年度指定

一事業名一

カーボンニュートラルへの挑戦！ ～蓄電池業界を牽引するゲームチェンジャーの育成～

一事業概要一

Society5.0時代に適応できる工業高校の実現に向けて、創造的な活動を通して新しい価値の創出や課題の解決に貢献できる人材を輩出するため、産学共創により工業高校の専門高校としての革新的な学びのために、将来の日本の「モノ」づくりを支える人材育成フォームを確立する共創プロジェクトを展開する。その中で、「モノ」としてバッテリーに注目し、今に対応できるバッテリー人材の育成にもつながる可能性を探究することで新しい「モノ」と「学び」にチャレンジし新たな価値を創出し、革新的で創造的な人材の育成に取り組む。

1 蓄電池(バッテリー)に関する学習

- (1) 関西蓄電池人材育成等コンソーシアムで作成された授業テンプレートを活用したバッテリーに関する学習(実習、座学)の実施
- (2) 専門人材を活用した授業(実習、座学)の実施
- (3) カーボンニュートラルに関する探究学習の実施
- (4) 小・中学生向け出前授業の実施
- (5) 成果発表会(生徒・教員)の実施

※連携校(兵庫県立洲本実業高等学校、兵庫県立兵庫工業高等学校)も参加し、外部講師による特別講演及び県下の工業高校へ案内して実施する。

「モノ」からの「学び」を核として推し進めることで、多様な分野につながる網羅的な学び方を自ら選択しながら創造的に進めることができる学びであると考えており、生徒が自己の在り方生き方を考えながら進路実現を図ることに効果が期待できる。

2 連携の強化

- (1) 大学の学識者による授業(座学)及び研究授業の実施
- (2) 企業技術者による授業(実習)及び技術研修の実施
- (3) 生徒、教員対象の企業・大学等への視察及び実習体験の実施
- (4) 脱炭素と蓄電池の活用に関する探究学習のために、産業会と連携して蓄電池を活用した持続可能な学び場を創出する。
- (5) ビオトープを小さな地球ととらえ、地球規模での環境問題を身近な問題として捉えた環境と工業の共創に向けた学習を実践
- (6) 地元企業重点型人材育成事業として新たに立ち上げる。地域の銀行等との連携を現在推し進めており、多数の企業とさらにつながることが可能であり、継続的な事業として準備している。
- (7) 関西蓄電池人材育成等コンソーシアムに加盟する近畿の高校と交流(大阪府、和歌山県)
- (8) 拠点校から連携校(兵庫県立洲本実業高等学校、兵庫県立兵庫工業高等学校)への情報交換、発信

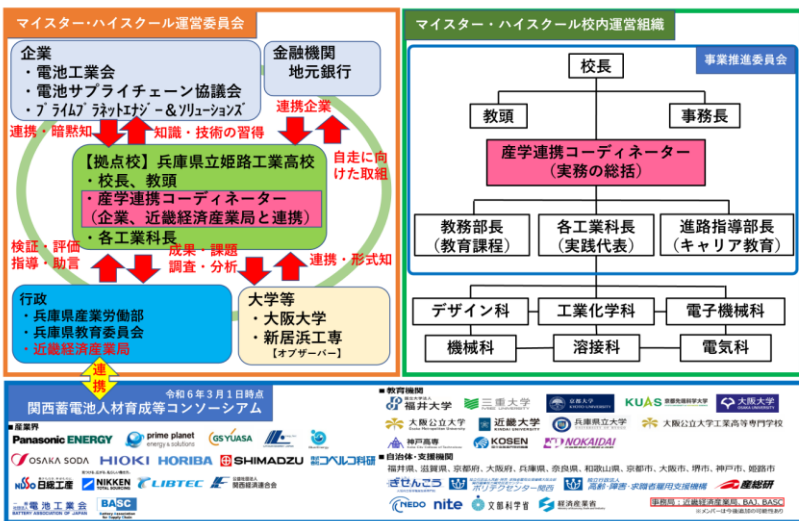
管理機関名(兵庫県教育委員会)、学校名(兵庫県立姫路工業高等学校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

カーボンニュートラルへの挑戦！～蓄電池業界を牽引するゲームチェンジャーの育成～

現状	【自治体・専門高校】 - 我が国に加え世界各国は、2050年前後のカーボンニュートラルの実現を国家目標として設定している。 - 脱炭素社会の実現に向けた取組は、気候変動対策だけでなく、新時代の経済成長の源泉となっている。 - 蓄電池は、脱炭素社会の社会インフラや経済安全保障の観点から重要な産業分野である。 - 関西蓄電池人材育成等コンソーシアムでは、教材(授業テンプレート)が開発されその活用と成果が期待されている。 - Society5.0を支える人材として、工業の技術力が求められる中、工業高校へ入学する生徒が減少している。	【専門高校】 - バッテリーに関する学習(座学・実習) ※関西蓄電池人材育成等コンソーシアムで作成された授業テンプレートを活用 - 大学の学識者による授業(座学)及び研究授業 - 全学域で取り組むカーボンニュートラル 「モノ」から「学び」を進め、新しい専門高校として姫路工業モデルを実施 - 企業技術者による授業(実習)及び技術研修 - 生徒、教員対象の企業・大学等への視察及び実習体験 - カーボンニュートラルに関する探究学習 - 小・中学生向け環境に関わる出前授業 - 連携校(兵庫県立洲本実業高校・兵庫県立兵庫工業高校)への情報交換、発信
	【課題】 - 今後もグローバルで市場の成長が予測されており、人材の育成・確保は喫緊の課題である。 - 工業高校で実施する教育プログラムが、学校を取り巻くステークホルダーのニーズに対応できていない。 - 短期的な産学連携に留まり、外部ソースの獲得が不足している。 - 蓄電池に関する教材の活用と成果の検証、専門知識を有する生徒および教員の育成が必要である。	
実施内容	【自治体】 - マイスター・ハイスクール運営委員会の指導・助言 - 他府県のマイスター・ハイスクールに関する取組を情報発信 - 県内の連携校(兵庫県立洲本実業高校)との調整 - 産業労働部、近畿経済産業局との連携・調整 - 実習装置等の導入・調整 - 関西蓄電池人材育成等コンソーシアムに所属する大阪府、和歌山県の高校との調整(教育委員会間の連携) - 成果発表会に関する会場及び講師派遣等の支援 - 学校設定科目の指導・助言 - カーボンニュートラルに関する探究学習の指導・助言	【専門高校】 - 専門高校の特色化・魅力化による定員充足率の向上 - 地域社会との持続可能な連携による人材育成(生徒・教員)、イノベーションの創出 - 時代のニーズに対応した教育活動及び教育課程の編成 「モノ」から「学び」、専門高校の革新的人材育成研究 - 専門業高校の学びを地域社会のフィールドへ展開
	【目的】 - カーボンニュートラル社会のキーテクノロジーである蓄電池技術を支える技術者を社会に輩出し、新たな価値を創造する人材の育成 「工業×環境」によりカーボンニュートラル社会の実現に取り組む企業との連携を支援 - 産業界、大学、高専、行政等が連携した教育プログラムの周知・広報	

管理機関名(兵庫県委員会)、学校名(兵庫県立姫路工業高等学校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

カーボンニュートラルへの挑戦！～蓄電池業界を牽引するゲームチェンジャーの育成～



【マイスター・ハイスクール普及促進事業:連携体制強化型】 長崎県教育委員会(農・商・水・情・福・工) 令和6~7年度指定

一事業名一

NEXT長崎人材育成事業

一事業概要一

- ・長崎型産学連携コーディネーターとして「民間経験者、校長経験者、知事部局職員」の3名を配置することにより、高校と産業界等との連携を各分野の様々な視点と豊富な人脈により、多面的に支援し、県全体で産業界と連携する体制を構築しながら、専門高校全体の学びの充実を図る。
- ・専門高校で育成していく資質・能力の策定や支援の在り方など、専門高校全体で共通する内容等を協議する、事業運営委員会を設置する。また、分野ごとに協議会を開催し、本県の産業教育における産学連携の基盤づくりを行い、組織的かつ持続的な取組を目指す。なお、将来的に事業運営委員会にて各協議会の横断的取組・連携を推進し、イノベーション創成へとつなげる。
- ・企業の担当者と高校の教員による意見交換や学校見学を行い、産業界が求める資質・能力を明確にするとともに、教員向けの企業見学や産学連携に関する研修会を実施し、教員が産業界の実情や先端技術等の知見を広げ、高校のカリキュラムと地域産業をつなげる取り組みを行う。
- ・県内企業や大学等から講師を招聘し、各分野の専門的な技術や先進的な取組等に関する講座の実施を通じて、外部人材の活用のノウハウや産業界等の連携強化を図り、将来的な産業実務家教員による授業や地域産業と連動させることで、「イノベーション人材」を育成するカリキュラムの開発につなげていく。

・【工業】

半導体分野では、産学官の半導体関係者が構成員となっている「ながさき半導体ネットワーク」と連携することにより、工業高校に「半導体製造技術」の学校設定科目を新たに設定するなど、企業や大学等からの講師派遣や半導体関連企業への見学等を通じて、半導体の専門人材を育成する。

工業分野では、長崎県工業連合会と工業科との連携協定を締結しており、一定の連携はできているが、一歩進めた「学びの連携」へ向け、お互いのニーズ・シーズをマッチングしながら、先端機器等を活用した工業学習の充実を図る。

建設分野では、長崎県建設業協会と工業科との連携協定を締結しており、先進校では「学びの連携」が実装している。この取組の良さを共有しながら、県下の関係学科への展開を目指す。

管理機関名(長崎県教育委員会)、学校名(県立高等学校15校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

NEXT長崎人材育成事業

【申請者の現状・課題】

- ・本県は全国でも人口減少が進んでいる地域であり、各産業で人手不足が顕著となっており、ICT等を活用したDXや先端技術の活用等による生産性の向上等が急務となっている。
- ・半導体関連企業の進出や長崎県スタジアムシティの開発など、本県の産業構造が大きく変化していく中、地域の産業が持続し成長するためには、専門的なスキルや実践的・汎用的なスキルを持ち、課題の解決や新しい価値を創造することができ「イノベーション人材」を育成する必要がある。
- ・一部学校では企業等と連携した取組を行っているが、離島・半島地域が多い本県の地理的特性もあり、近隣地域との連携や属人的なものが多く、県内の豊富な資源を活用することができず、広く連携体制を構築する取組が必要である。

【実施内容】

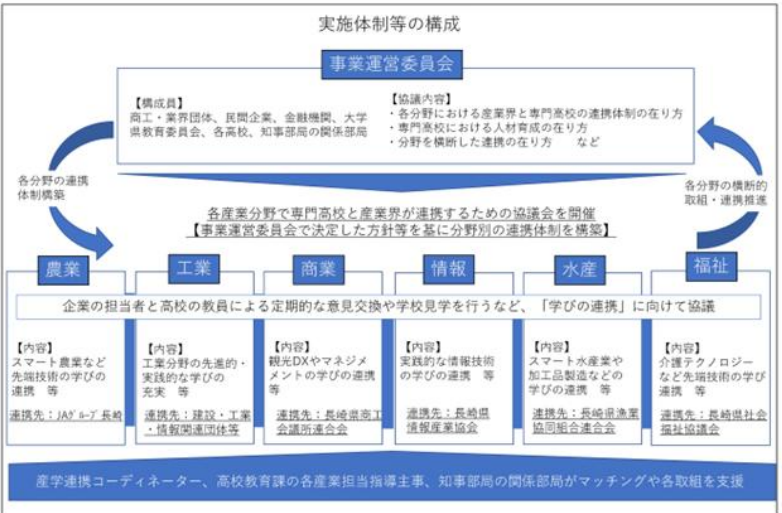
- ・長崎型産学連携コーディネーターとして「民間経験者、校長経験者、知事部局職員」の3名を配置することにより、高校と産業界等との連携を各分野の様々な視点と豊富な人脈により、多面的に支援し、県全体で産業界と連携する体制を構築しながら、専門高校全体の学びの充実を図る。
- ・専門高校で育成していく資質・能力の策定や支援の在り方など、専門高校全体で共通する内容等を協議する、事業運営委員会を設置する。また、分野ごとに協議会を開催し、本県の産業教育における産学連携の基盤づくりを行い、持続的な取組を目指す。なお、将来的に事業運営委員会にて各協議会の横断的取組・連携を推進し、イノベーション創成へとつなげる。
- ・企業の担当者と高校の教員による意見交換や学校見学を行い、産業界が求める資質・能力を明確にするとともに、教員向けの企業見学を実施し、教員が産業界の実情や先端技術等の知見を広げ、高校のカリキュラムと地域産業をつなげる取り組みを行う。

【目的】本事業(産業界と専門高校の連携)を通してどんな変化を目指すか

- ・本県では、これまで専門高校と産業界のつながりが人材確保や就職先確保といった出口の連携が主であったが、産業界等と専門高校の連携協定を締結し、連携体制を構築しながら、産業実務家教員による体系的・実践的な授業を導入等を通して、産業教育の「学びの連携」の充実を図る。
- ・産業界が求める資質・能力を明確にし、高校のカリキュラムと地域産業の課題をつなげた「学びの連携」を図ることにより、地域産業で活躍したいというふさふさとした意識の醸成と、持続可能な地域産業へとイノベーションを実現できるNEXT長崎人材を育成する。
- ・これまで産業界別に行っていた人材育成について、事業運営委員会等を通じて横断的人材育成へと発展させることで、分野を横断した一体的な人材育成を図る。

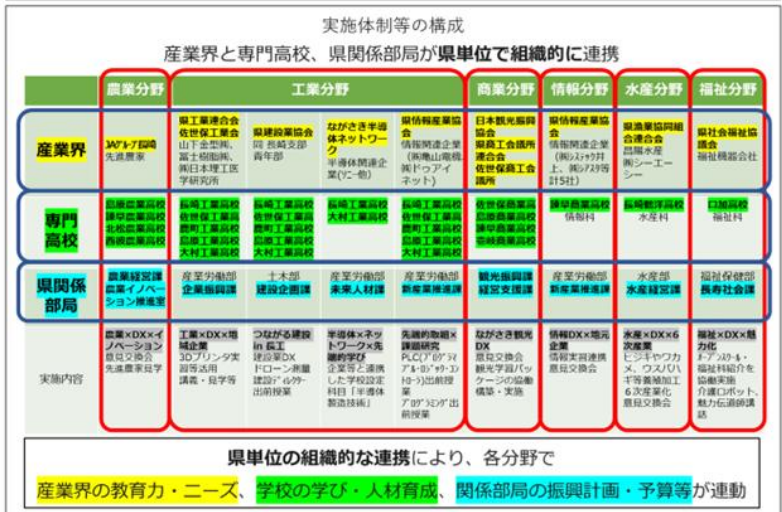
管理機関名(長崎県教育委員会)、学校名(県立高等学校15校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

NEXT長崎人材育成事業



管理機関名(長崎県教育委員会)、学校名(県立高等学校15校) 令和7年度 マイスター・ハイスクール普及促進事業(連携体制強化型)

NEXT長崎人材育成事業



学校の具体的な取組など詳しい内容は以下よりご覧ください

(文部科学省ホームページ:令和7年度マイスター・ハイスクール事業成果発表会)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00013.htm



高等学校DX加速化推進事業（DXハイスchool）

令和7年度補正予算額

52億円



現状・課題

大学教育段階で、デジタル・理数分野への学部転換の取組が進む中、その政策効果を最大限発揮するためにも、高校段階におけるデジタル等成長分野を支える人材育成の抜本的強化が必要

事業内容

情報、数学等の教育を重視するカリキュラムを実施するとともに、専門的な外部人材の活用や大学等との連携などを通じてICTを活用した探究的・文理横断的・実践的な学びを強化する学校などに対して、そのために必要な環境整備の経費を支援する

支援対象等

箇所数・補助上限額 ※定額補助

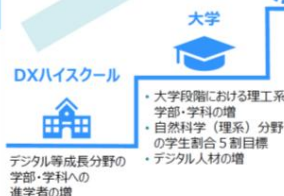
公立・私立の 高等学校等 (1,300校程度)	新規採択校 : 100校程度 × 1,000万円
	継続校 : 200校程度 × 500万円（重点類型の場合700万円）【2年目】
	1000校程度 × 300万円（重点類型の場合500万円）【3年目】

※必須要件に加えて、各類型ごとの取組を重点的に実施する学校を重点類型として補助上限額を加算（80校（半導体重点枠を含む））



採択校に求める具体の取組例（基本類型・重点類型共通）

- 情報Ⅱや数学Ⅱ・B、数学Ⅲ・C等の履修推進（遠隔授業の活用を含む）
- 情報・数学等を重視した学科への転換、コースの設置
- デジタルを活用した文理横断的・探究的な学びの実施
- デジタルものづくりなど、生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進
- 高大接続の強化や多面的な高校入試の実施
- 地方の小規模校において従来開設されていない理数系科目（数学Ⅲ等）の遠隔授業による実施
- 専門高校において、デジタルを活用したスマート農業やインフラDX、医療・介護DX等に対応した高度な専門教科指導の実施、高大接続の強化



事業スキーム

文部科学省

補助

学校設置者等

(担当：初等中等教育局参事官（高等学校担当）付）

令和7年度DXハイスchool 取組概要

継続
基本高知県立安芸高等学校
(公立・普通科・工業科)

デジタル・理数分野、自然科学を含む理工系の人材育成

取組

「防災探究」をテーマとした防災に関する
デジタルコンテンツの制作

「総合的な探究の時間」において、最新のデジタル技術を活用し、地域の防災力を高めるための仮想空間を構築。学校周辺や旧校舎を含めた安芸市の街並みを3Dデータ化し、VR・ARを通じてリアルな防災体験ができるコンテンツを制作。

活用技術

- 360°レーザースキャナー：街並みや地形を高精度で計測し、3Dモデルを生成
- ドローン空撮：広範囲の地形データや街並みを効率的に収集
- VR/AR技術：没入型の防災体験を実現
- デジタルツイン：現実世界を仮想空間に再現し、シミュレーション可能な環境を構築

制作するコンテンツ

- 旧校舎を含めた安芸市の街並みを再現した3D仮想空間
- 災害シナリオを体験できるVR防災シミュレーション
- スマートフォンやタブレットで体験できるAR防災ガイド

期待される効果

- 教育的効果：探究型学習の深化、ICTスキルの習得、普通科・工業科の枠を超えたSTEAM教育の推進
- 地域社会への効果：防災意識の向上、地域資源のデジタルアーカイブ化、地域連携の強化
- 技術的・産業的効果：デジタルツインの実践事例創出、スマートシティへの布石、地域産業とのシナジー
- 持続可能性・社会的インパクト：SDGsへの貢献、教育と地域課題解決の融合



大学・企業及び地域との連携

- データサイエンスの知識やプログラミングを活用し、津波による浸水等のシミュレーションを作成する。
- （有）礒部組と連携し、ドローン等のデジタル機器の操作により、データを収集し、データ分析活用技術の習得を目指す。
- 徳島大学理工学部と交流し、防災とDXの関連、地域での活用方法などを学ぶ。
- 関西学院大学による「探究学習の基本的なプロセスと仮説設定・検証時の重要事項」についての講演を実施。
- 制作したデジタルコンテンツを活用し、地域のイベント等でVRやARを利用した防災体験の実施予定。



小・中学校や地域への出前講座

制作したデジタルコンテンツを利用して小・中学校や地域の防災イベント等でVRやARを利用した防災体験ができる出前講座を実施予定。

育成する生徒像・取組による効果

視覚的・体験的な学びを地域の方々に提供することで、日常から防災意識を高める。また、デジタルツインの制作により興味・関心が湧き、高度な技術や知識を身につけ活用することで、理工系大学を目指す人材の増加が期待される。



大学理系学部進学率：9.9%（令和5年度実績値）
：20%（目標値）※令和10年度

数理・データサイエンスをテーマとする「総合的な探究の時間」
：9.2%（令和6年度実績値）
：20%（目標値）※令和8年度



新規HPの開設 ※ 5月中に公開予定



新規Instagramの開設

生徒が製作した高校紹介動画



「いいね」コンテスト開催中!

小中学生に大人気
有名芸能人も
PRに参画!



コンテストで受賞した動画は左記HPにおいて掲載予定

教員確保に向けた取組 ～文部科学省ホームページ～

教員の魅力を発信します

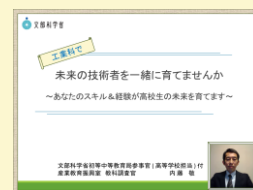
社会人の方向け

～専門的な知識や経験を持った
社会人のみなさんへ～
あなたのスキル&経験が高校生の
未来を育てます



大学で学ぶ学生さん向け

工業科の教員の魅力を伝える動画
未来の技術者を一緒に育てませんか



工業関係実践事例集 ～実践的・体験的な学習の充実～



工業科【実践的・体験的な学習の実践事例集】

- 01 学びの見直しをもち、生徒自ら課題の解決方法を模索(熊本県立球磨工業高等学校)(PDF:289KB)
- 02 企業で得た学びを活かす ～学びと社会とのつながり～(三重県立桑名工業高等学校)(PDF:182KB)
- 03 ICTの活用事例(愛知県立愛知総合工科高等学校)(PDF:327KB)
- 04 企業技術者と共に学ぶ(道県立産業理工科高等学校)(PDF:302KB)
- 05 産業ととの連携によるキャリア教育の推進(熊本県立今市工業高等学校)(PDF:157KB)
- 06 学校と企業とで作る授業(熊本県立八代工業高等学校)(PDF:208KB)
- 07 POCAを機能させ組織の主体性を高める(福井県立科学技術高等学校)(PDF:201KB)
- 08 産学連携による人材育成(愛知県・ロボットStar企業工業高校)(PDF:234KB)
- 09 実習における評価の見える化(愛媛県立今治工業高等学校)(PDF:299KB)
- 10 1年次から自分の働く姿をイメージする(東京都立六郷工科高等学校)(PDF:280KB)
- 11 1年次から自分の働く姿をイメージする(東京都立六郷工科高等学校)(PDF:306KB)

過去にお届けした実践事例も
紹介しています



つながよう
産業のバトン！
佐賀から維新をふたたび！

第36回全国産業教育フェア佐賀大会



さんフェア SAGA 2026

2026年10/24(土) - 10/25(日)

◆会場：SAGAアリーナ、SAGAプラザ、佐賀市文化会館、
学校法人 旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校

◆主催(予定)：文部科学省、佐賀県、佐賀県教育委員会、産業教育振興中央会、
全国産業教育振興会連絡協議会、佐賀県産業教育振興会

◆問合せ先：第36回全国産業教育フェア佐賀大会準備委員会事務局 (佐賀県教育委員会事務局 学校教育課内)
TEL：0952-25-7228 Mail：sanfair-saga2026@pref.saga.lg.jp

▼詳細はこちら▼

大会HP



Instagram



全国産業教育フェアについて

1 趣 旨

専門高校等の生徒の学習成果を総合的に発表する全国産業教育フェアを、都道府県教育委員会との連携・協力を得て、全国的な規模で開催することにより、全国の専門高校等の生徒の学習意欲や産業界、教育界、国民一般への専門高校等の魅力的な教育内容について理解・関心を高めるとともに、新たな産業教育の在り方を探り、新しい時代に即した専門高校等における産業教育の活性化を図り、その振興に資することを目的とする。

2 開催一覧

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年
開催地	千葉県	静岡県	富山県	京都府	和歌山県	山形県	群馬県

	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回
	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
開催地	福岡県	島根県	徳島県	岐阜県	岩手県	北海道	広島県

	第15回	第16回	第17回	第18回	第19回	第20回	第21回
	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
開催地	東京都※	埼玉県	沖縄県	大阪府	神奈川県	茨城県	鹿児島県

	第22回	第23回	第24回	第25回	第26回	第27回	第28回
	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
開催地	岡山県	愛知県	宮城県	三重県	石川県	秋田県	山口県

	第29回	第30回	第31回	第32回	第33回	第34回	第35回
	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年
開催地	新潟県	大分県	埼玉県	青森県	福井県	栃木県	福島県

	第36回	第37回	第38回	第39回	第40回	第41回	第42回
	令和8年	令和9年	令和10年	令和11年	令和12年	令和13年	令和14年
開催地	佐賀県	愛媛県	熊本県	長野県	香川県	山梨県	高知県

	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回
	令和15年	令和16年	令和17年	令和18年	令和19年	令和20年	令和21年
開催地	長崎県	兵庫県	滋賀県	奈良県	宮崎県	鳥取県	東京都

※文部科学省、都道府県教育委員会、その他産業教育に関係する団体等との共催により「全国産業教育フェア」を平成3年より開催。

※上記開催地は開催予定も含む。

専門高校の基礎データ

高等学校学科別生徒数・学校数（令和7年5月）

区 分		生徒数（人）	比率（％）	当該学科を置く学校数（延べ数）	単独学科学校数
合 計		2,865,463	-	6524	3,403
普 通 科		2,123,778	74.1	3693	2,518
職業学科（専門高校）	小 計	482,854	16.9	1889	885
	農 業	66,199	2.3	292	119
	工 業	197,538	6.9	512	247
	商 業	157,989	5.5	570	154
	水 産	7,003	0.2	42	21
	家 庭	33,929	1.2	256	4
	看 護	10,753	0.4	95	5
	情 報	3,484	0.1	27	1
	福 祉	5,959	0.2	95	2
その他専門学科		104,352	3.6	561	49
総 合 学 科		154,479	5.4	381	283
工業（令和6年度）		199,712	6.9	516	250
工業（令和5年度）		203,449	7.0	517	254

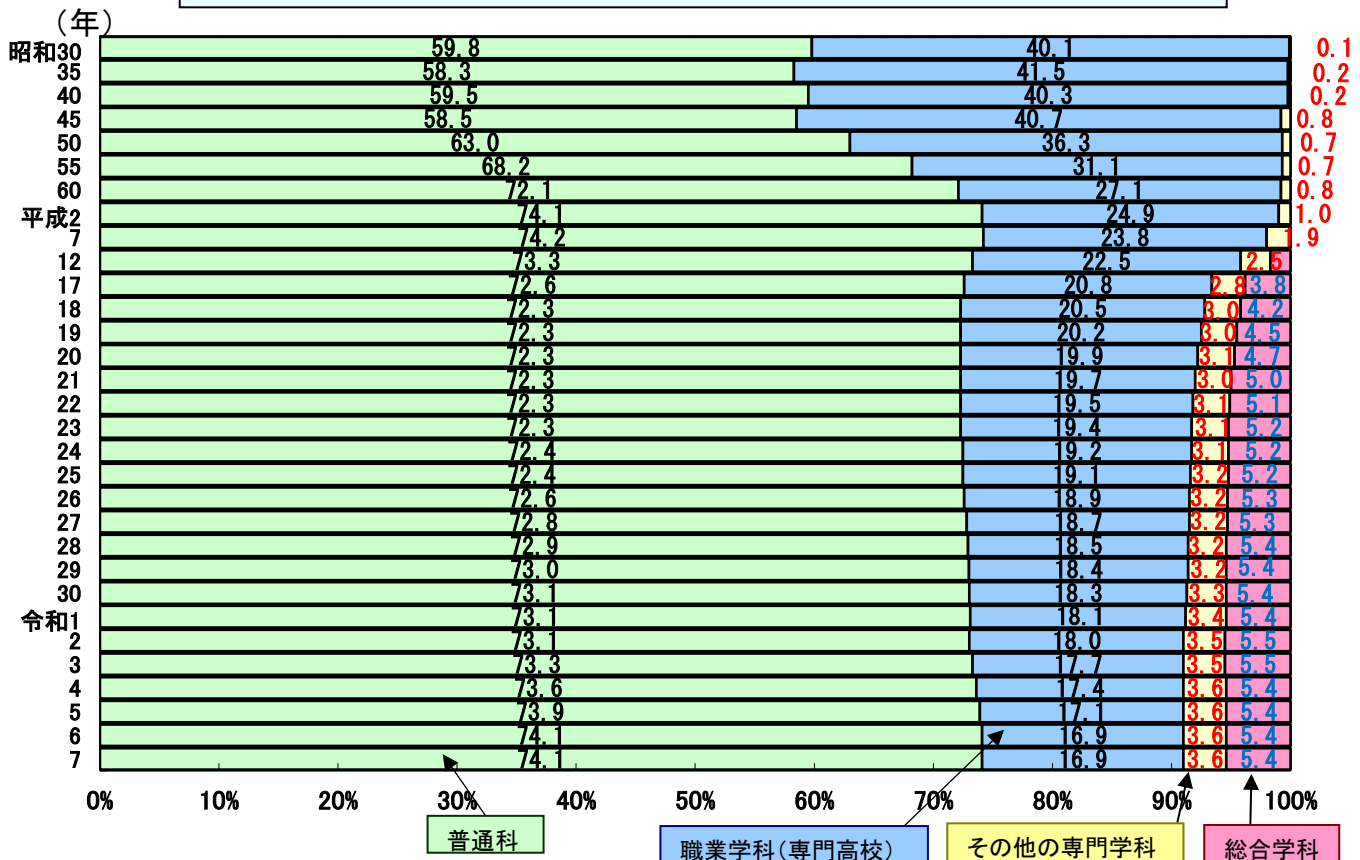
※ 全日制・定時制のみの統計である（通信制は含まれない）。

資料：文部科学省「学校基本調査」

※ 「当該学科を置く学校数」欄は、複数学科を置く学校について、それぞれの学科に計上した延べ数である。

学科別生徒数の構成割合の推移

職業学科の比率は年々減少。普通科は近年微増、総合学科とその他学科は変化なし



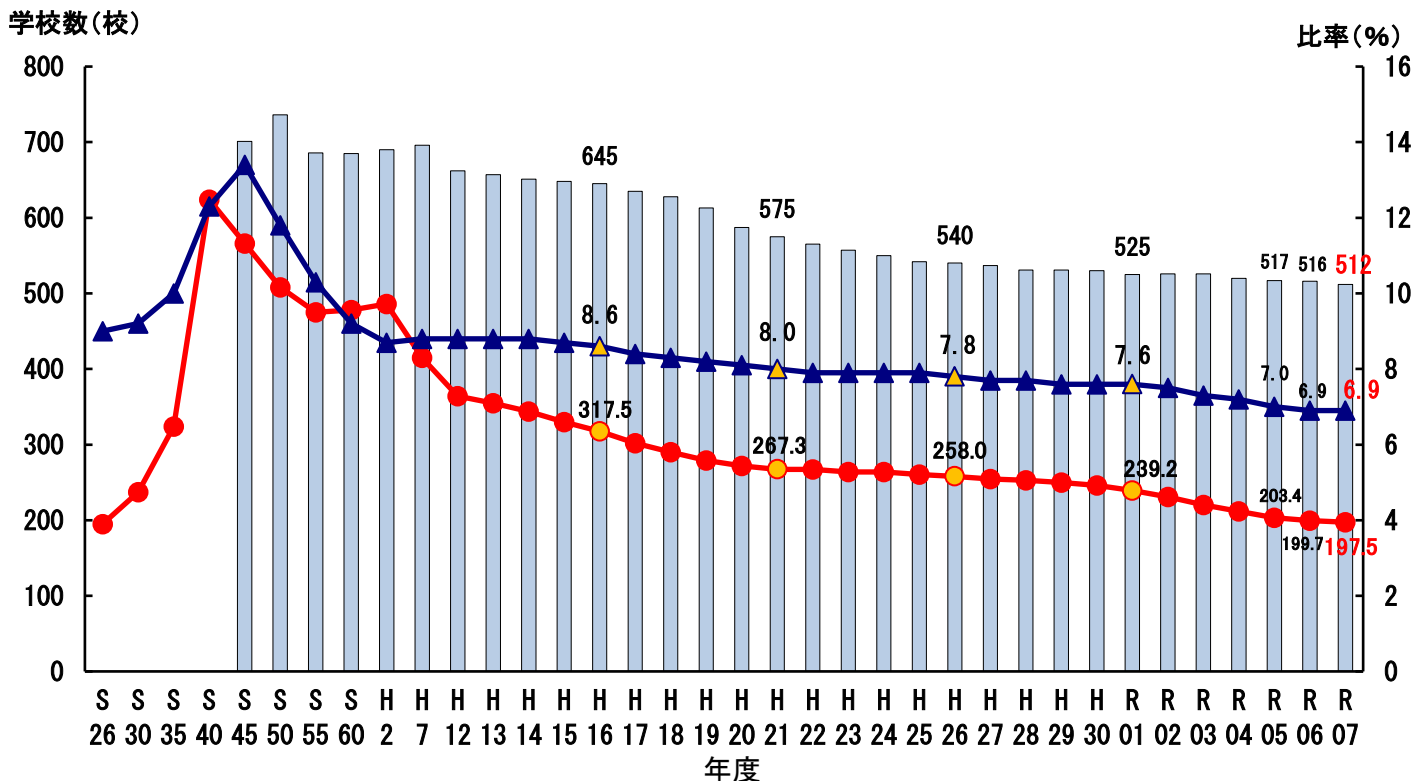
※総合学科は平成6年度より制度化。

「その他の専門学科」には、理数、体育、音楽、美術、外国語、国際関係等の学科がある。

資料：文部科学省「学校基本調査」

工業科を設置する高等学校数及び在籍生徒数の推移

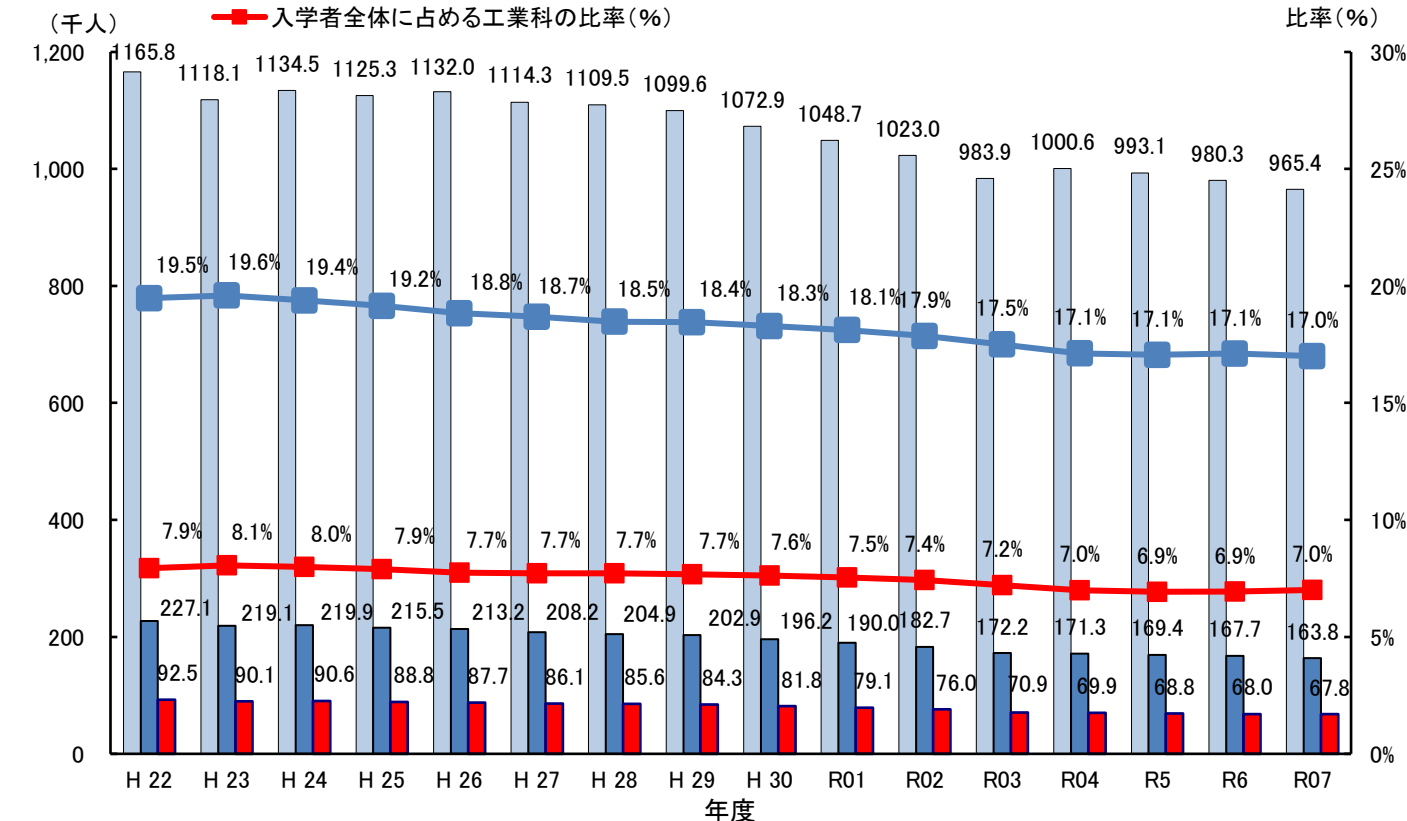
工業科を設置する学校数(校) 工業科在籍生徒数(千人) 比率(%)



(注1)「比率」は全高校生に占める割合。
 (注2)昭和40年以前の「学校数」については学校基本調査において該当項目がないため記載していない。 資料：文部科学省「学校基本調査」

工業科への入学者数の推移

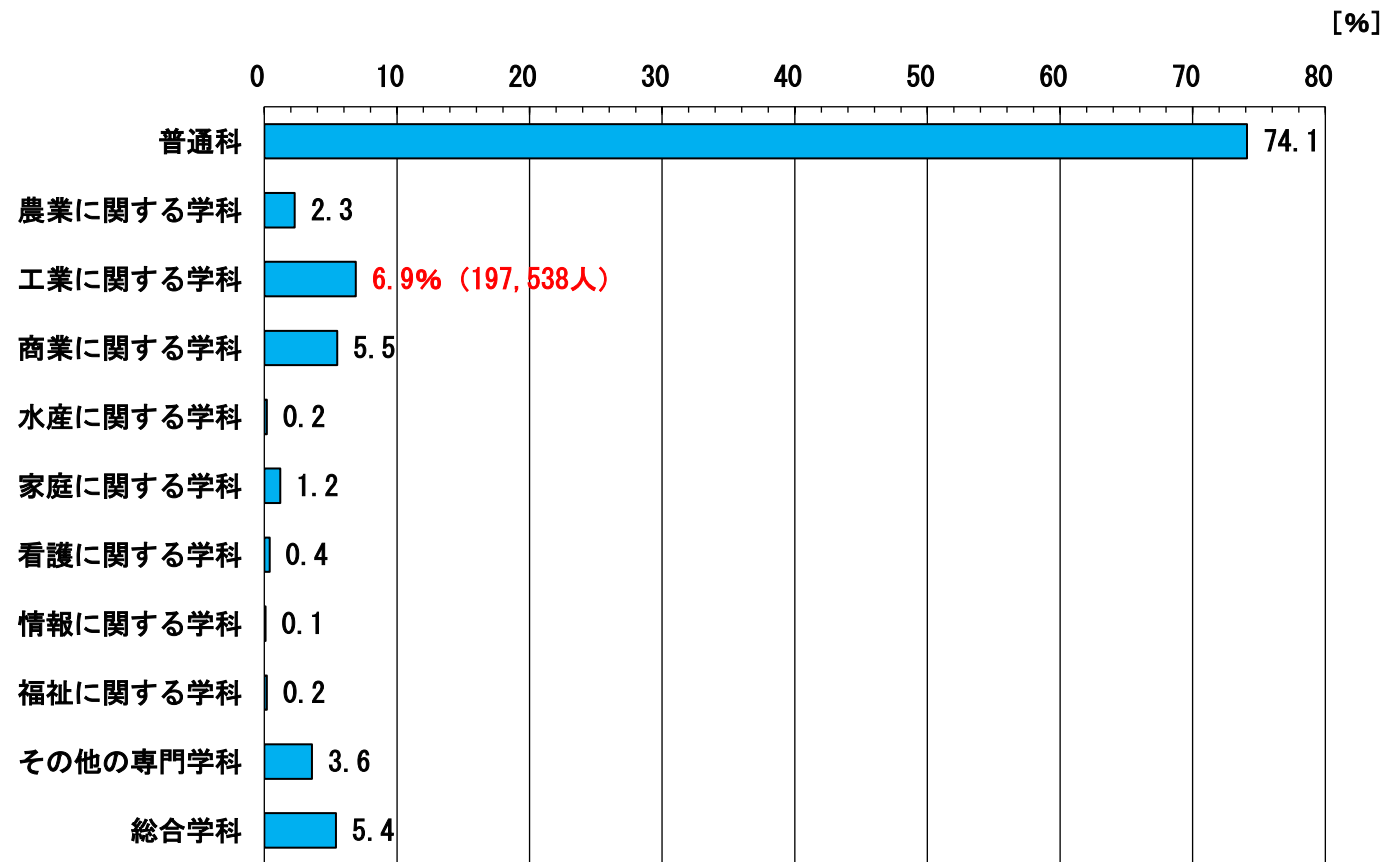
高校入学者 職業学科入学者 工業科入学者 入学者全体に占める職業学科の比率(%) 入学者全体に占める工業科の比率(%)



(注1) 入学者は全日制及び定時制の本科について示している
 (注2) 職業学科は農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報及び福祉を表す
 (注3) 職業学科以外には普通科、その他の専門学科及び総合学科が含まれる

資料：文部科学省「学校基本調査」

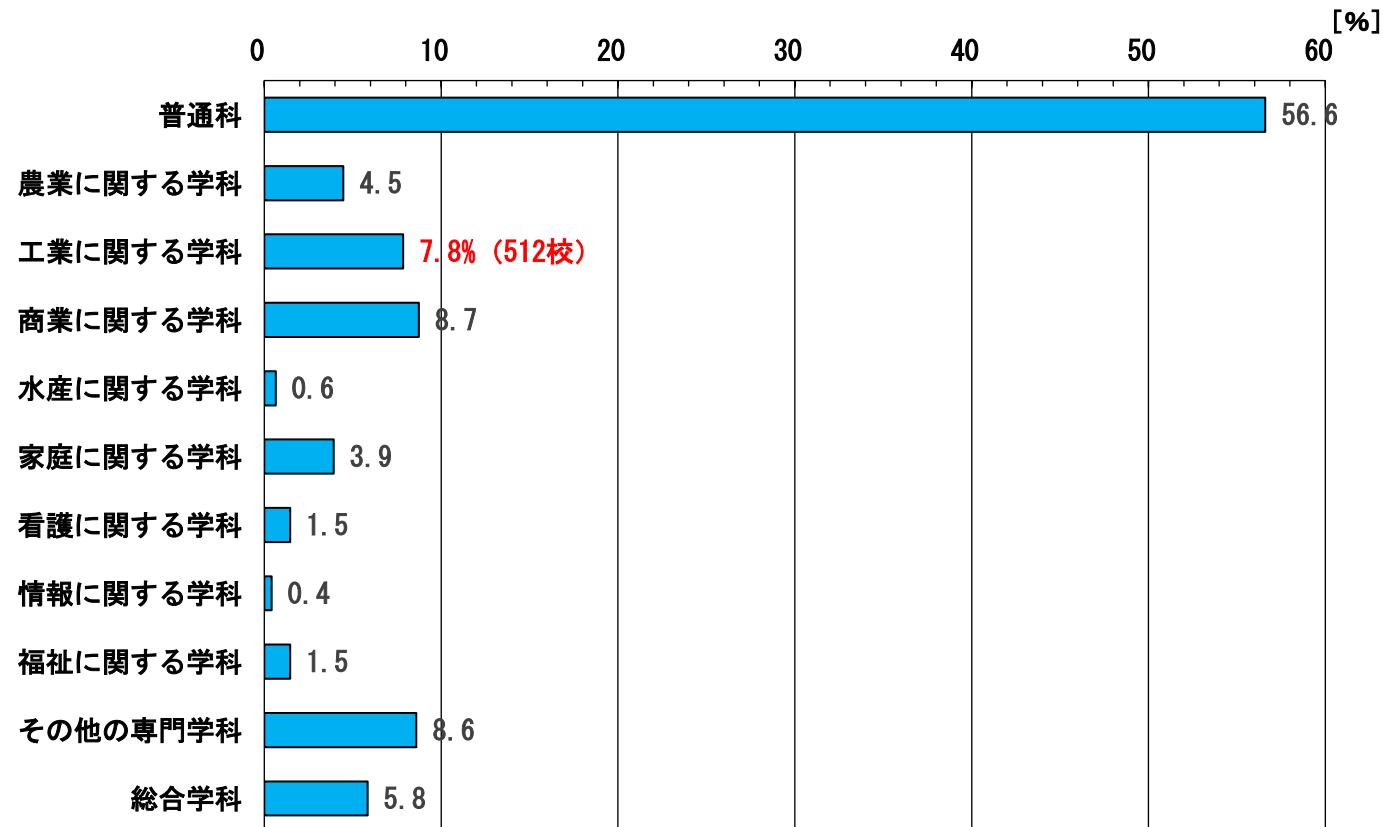
高等学校の学科別生徒数の割合 (本科) (2,865,463人)



参考：令和6年度工業科生徒数 199,712人

資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

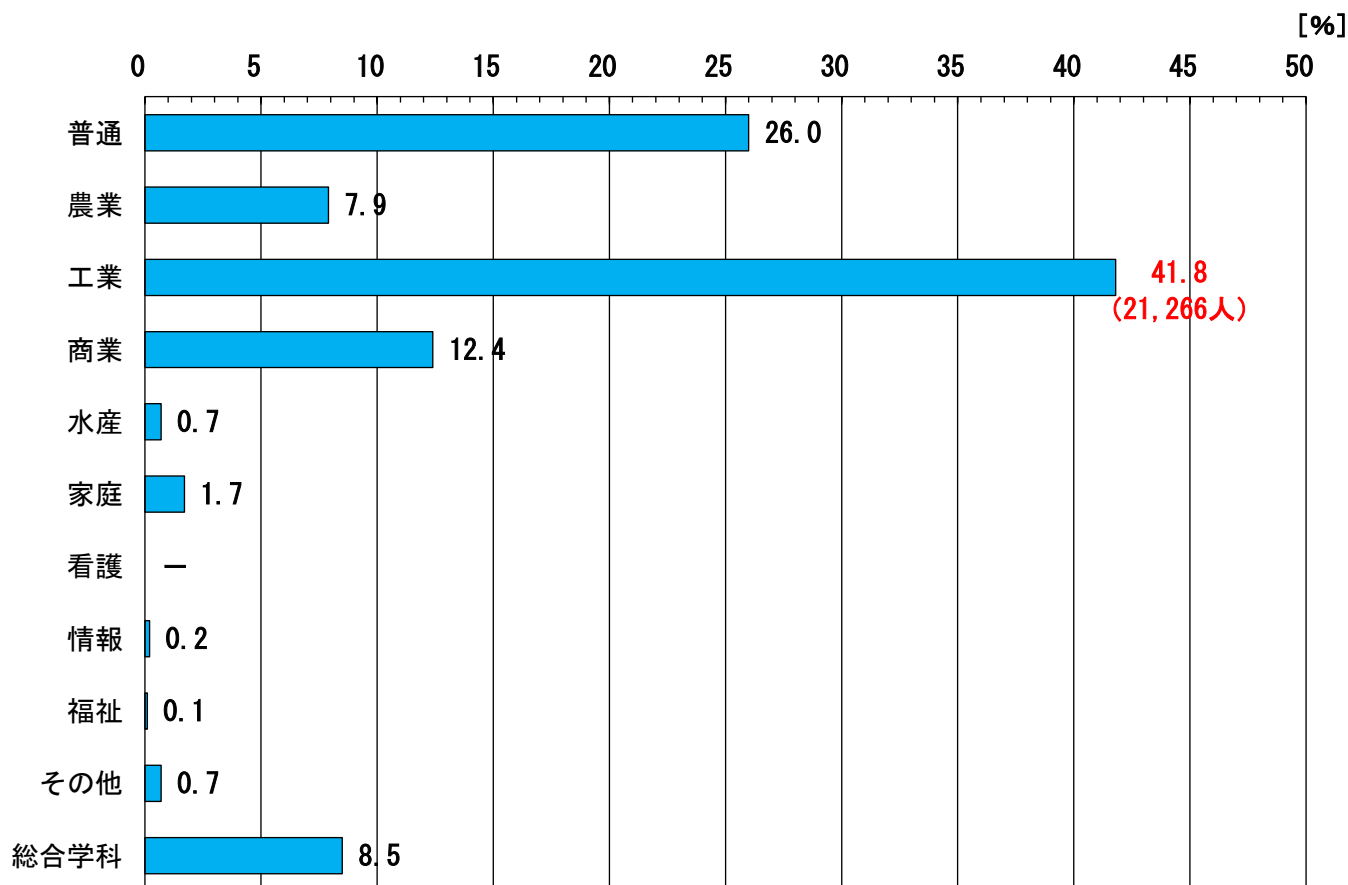
高等学校の学校数の割合 (延6,524校)



参考：令和6年度工業に関する学科設置学校数 516校

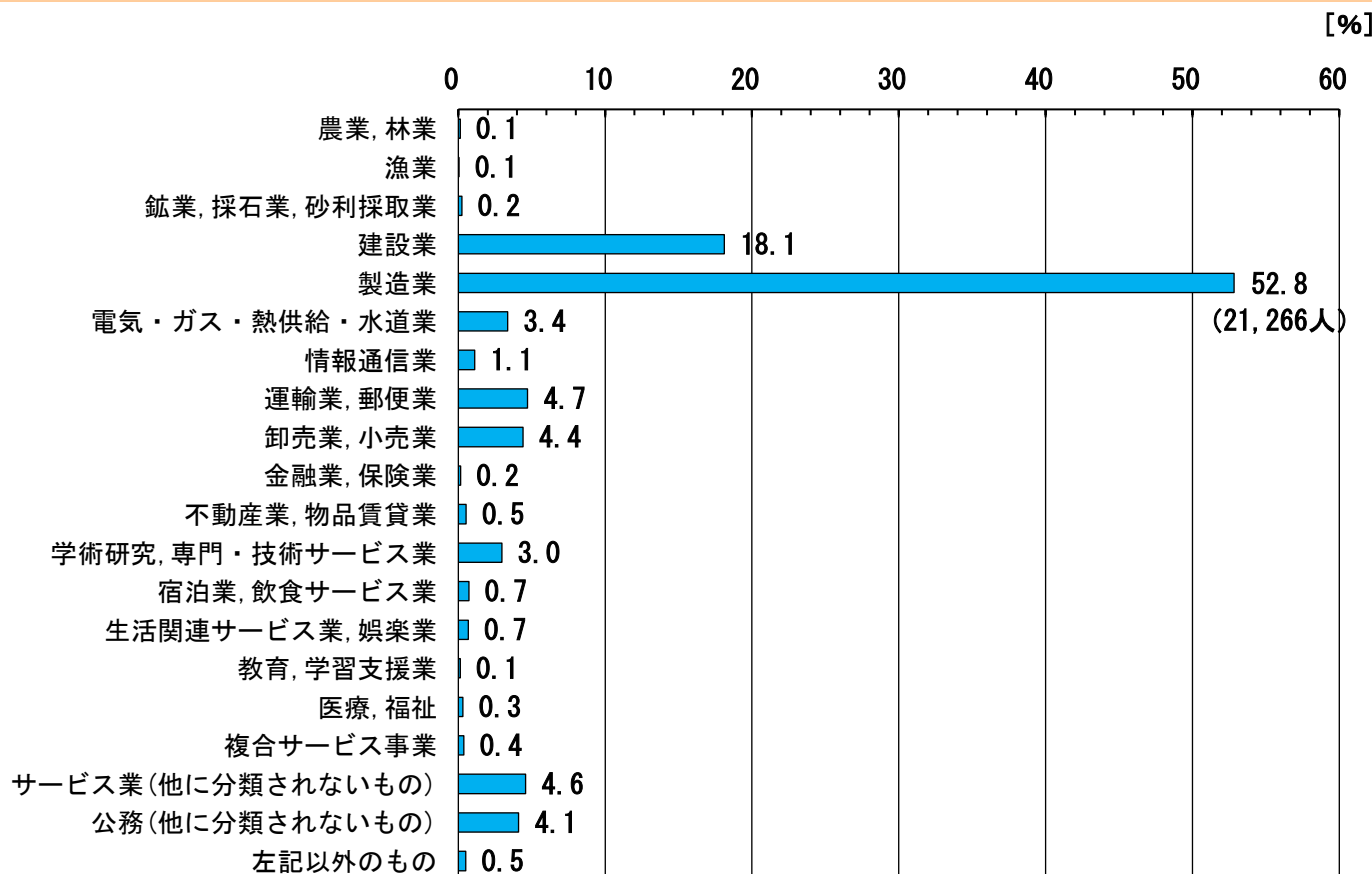
資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

製造業への学科別就職者数 (50,914人)



資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

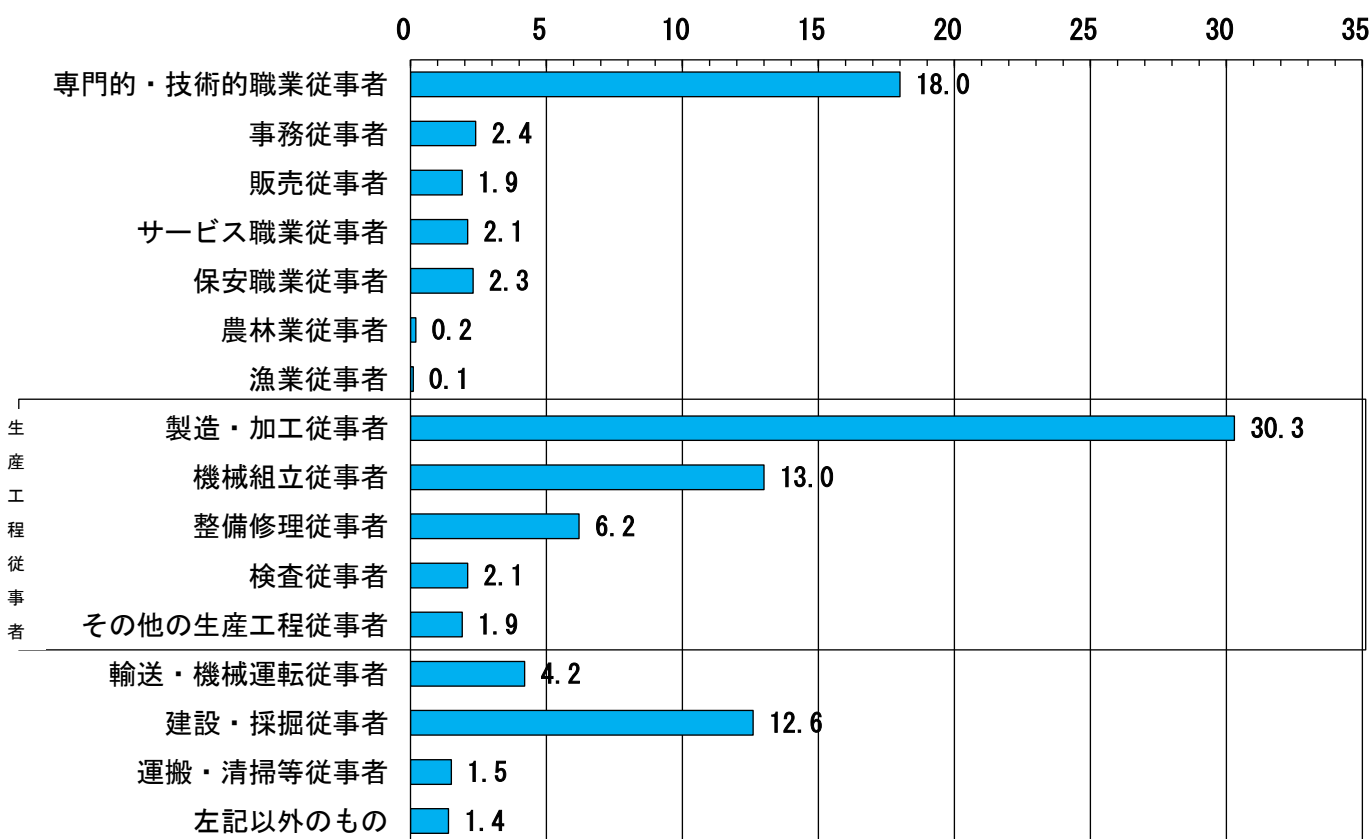
工業科における産業別就職状況 (40,259人)



資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

工業科における職業別就職状況 (40,259人)

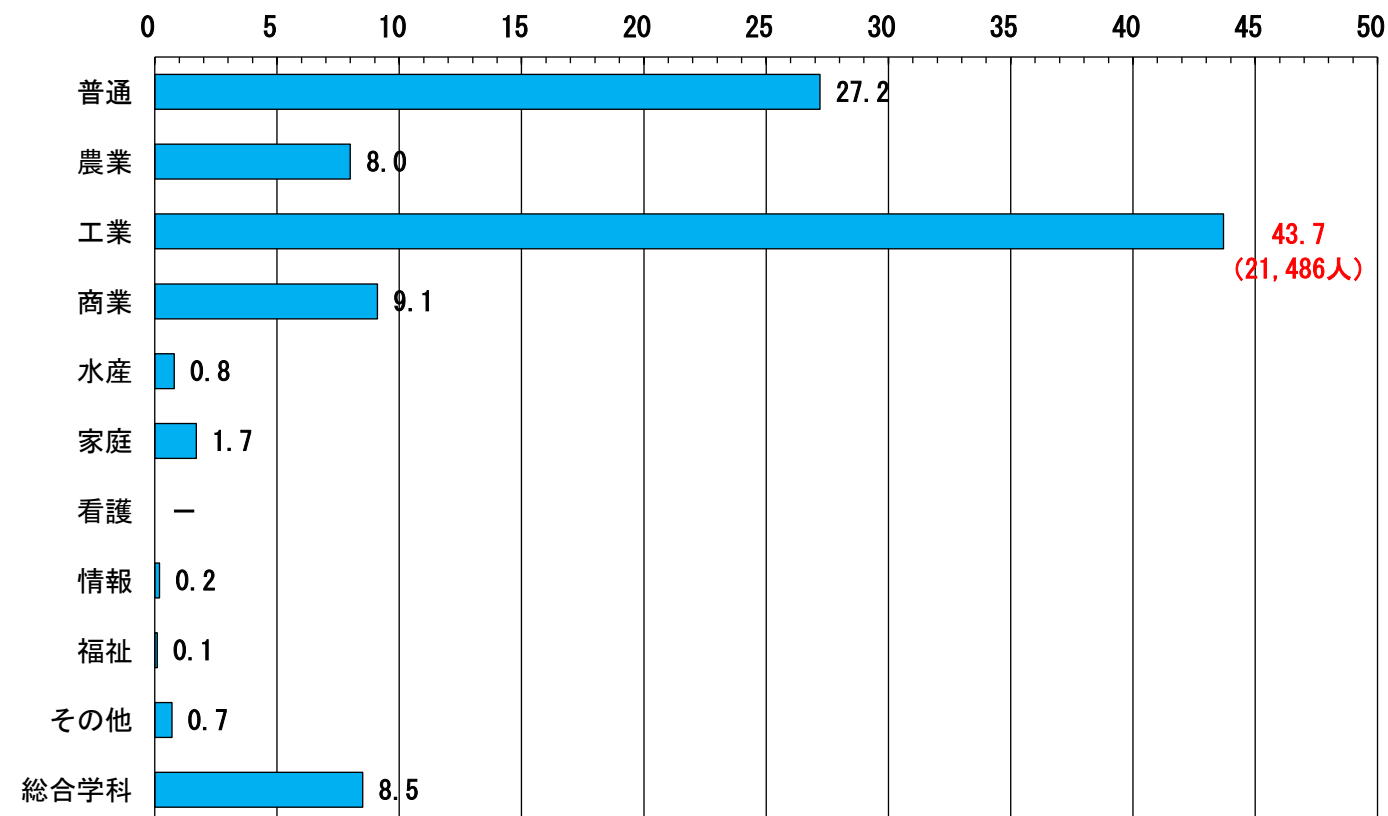
[%]



資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

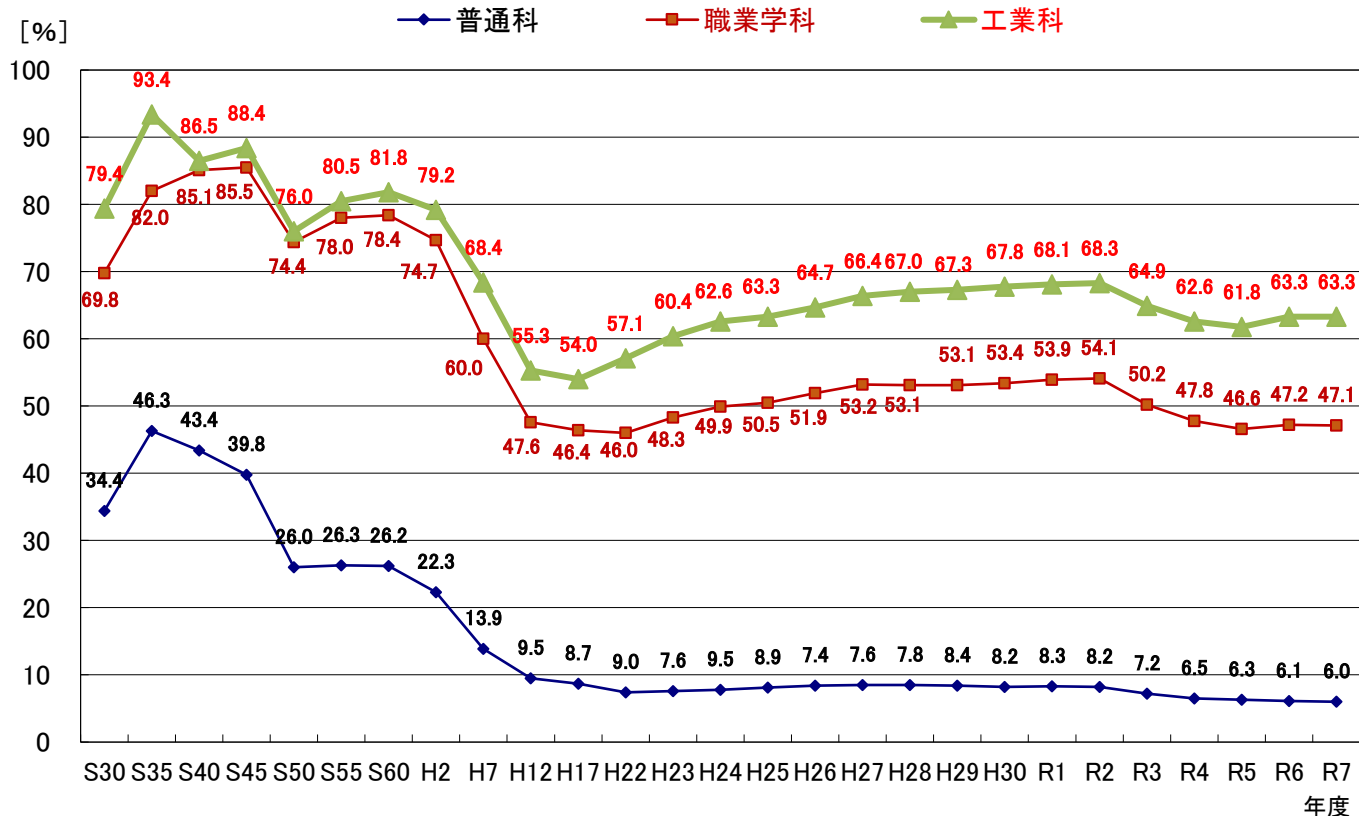
生産工程への就職者数の学科別割合 (49,154人)

[%]

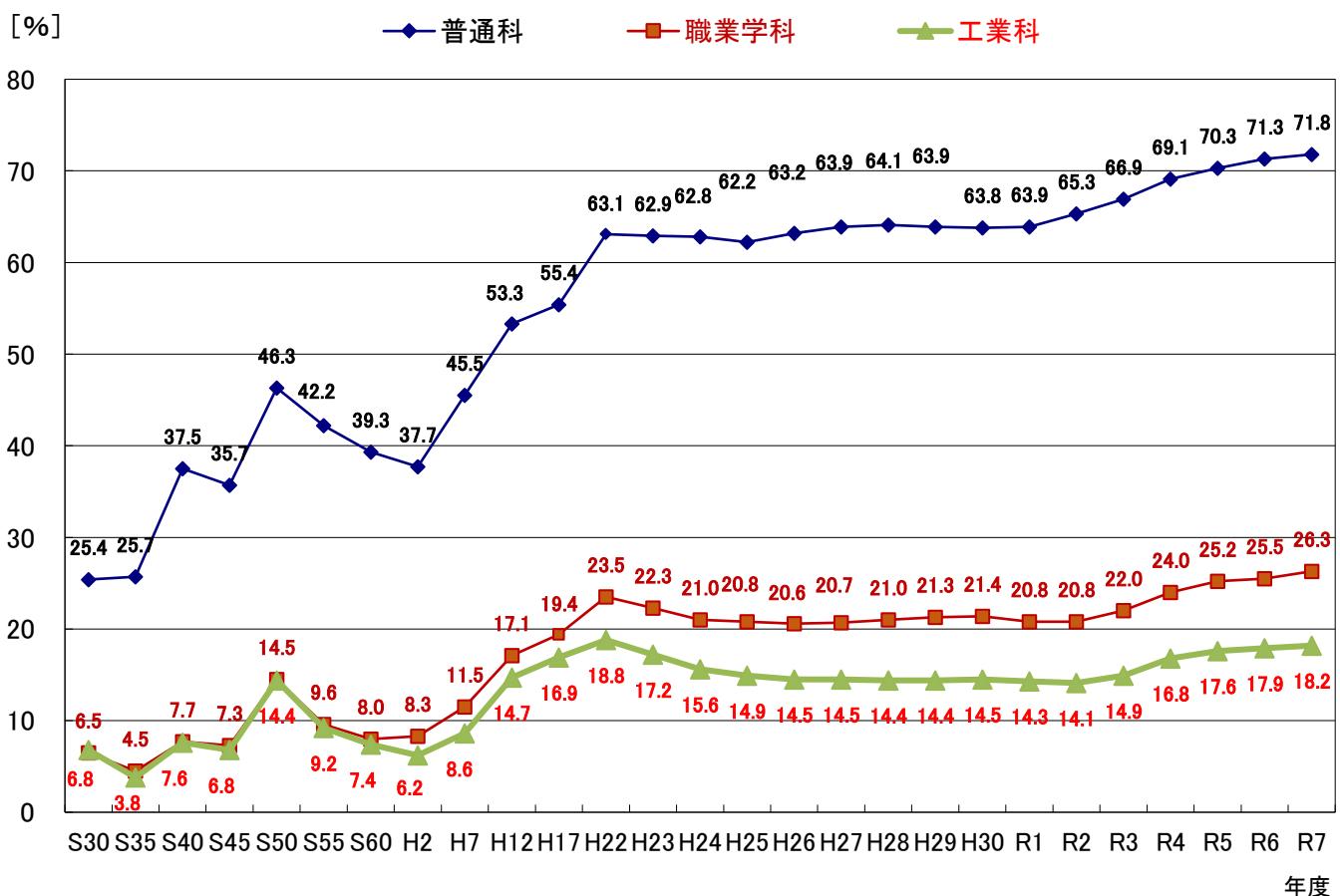


資料：文部科学省「学校基本調査(令和7年度)」より

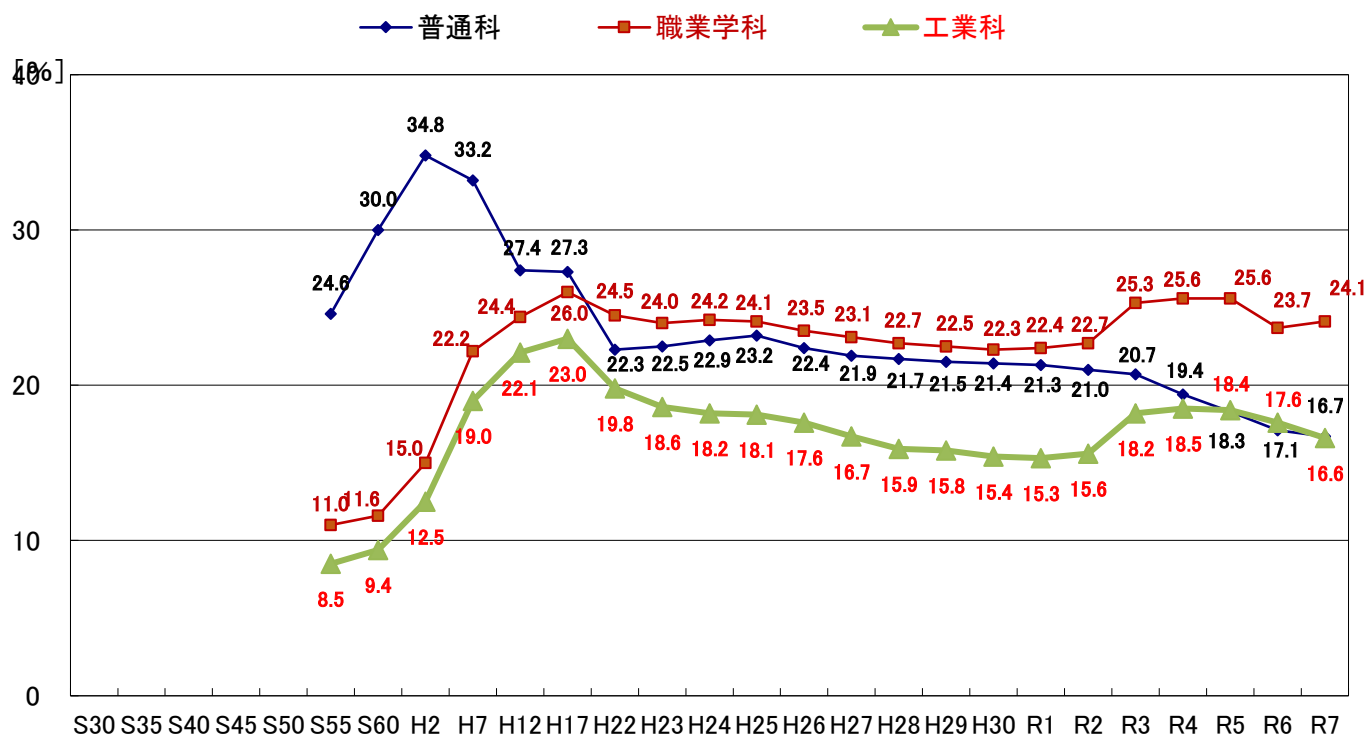
普通科・職業学科別就職率の推移



普通科・職業学科別大学・短大等進学率の推移



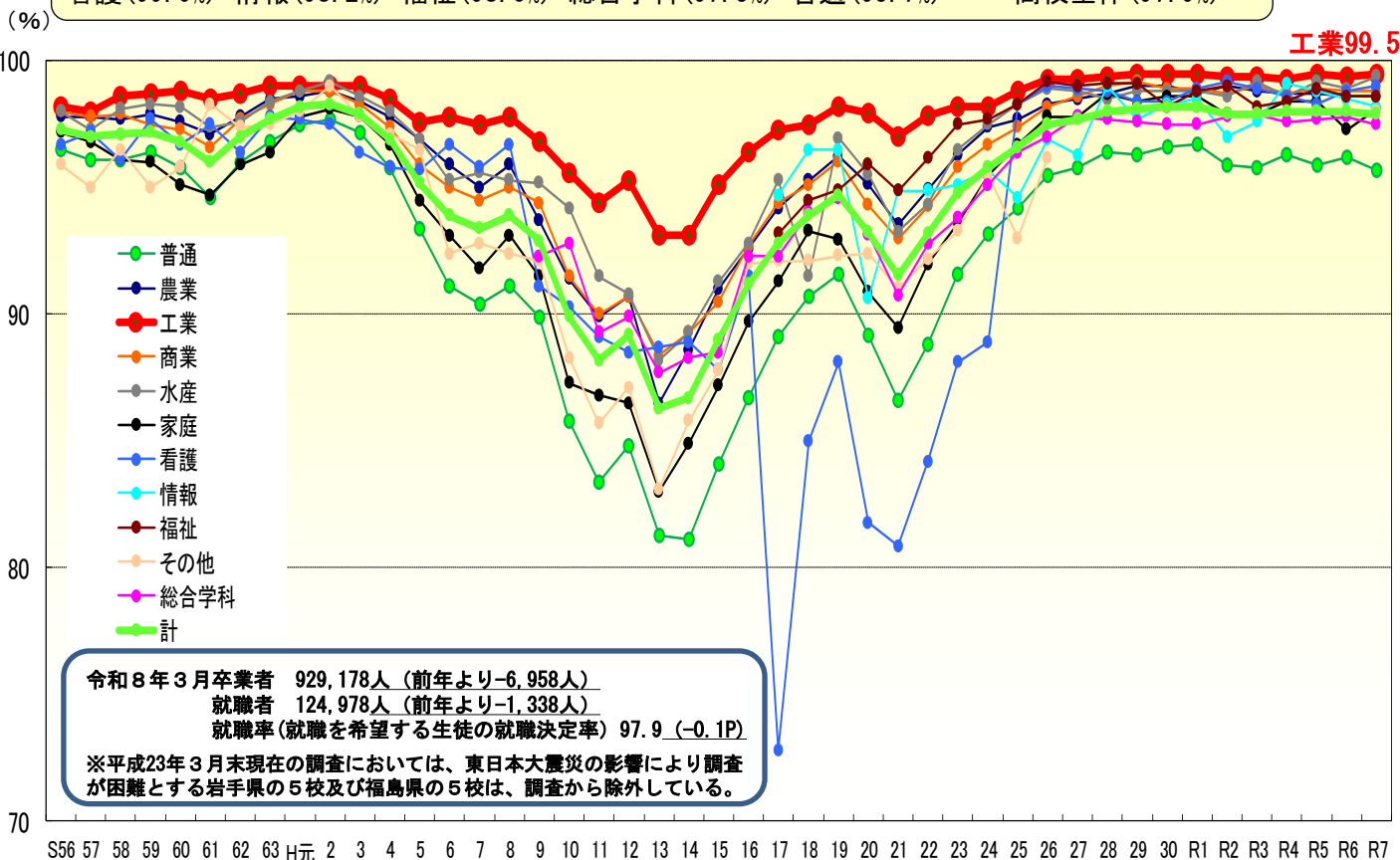
普通科・職業学科別専修学校・公共職業能力開発施設等進学率の推移



資料：文部科学省「学校基本調査」

新規高等学校卒業者の就職状況の推移（各年度3月末時点）

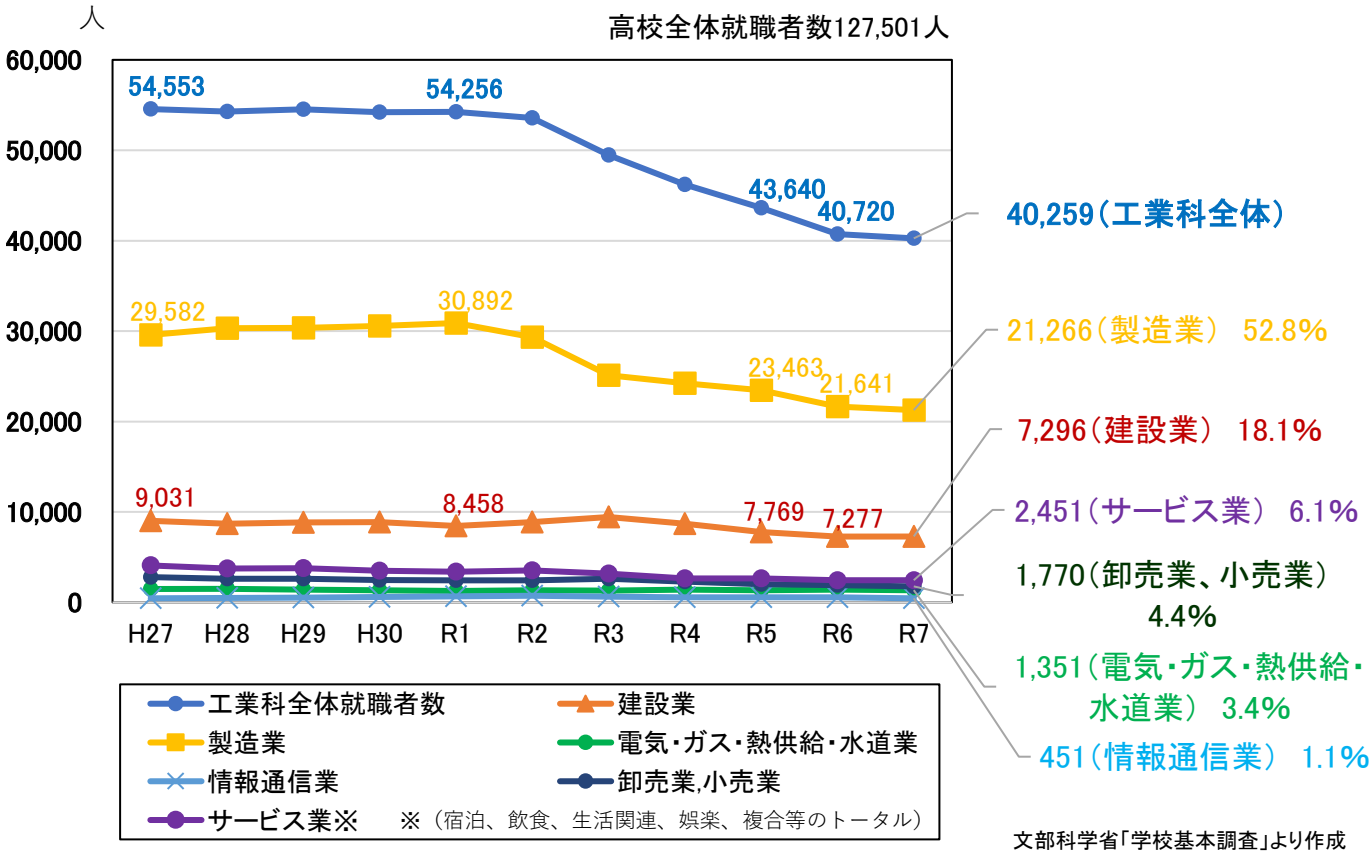
学科別就職率は、**工業 (99.5% (+0.1))** 農業 (98.6%) 商業 (98.8%) 水産 (99.4%) 家庭 (98.1%) 看護 (99.0%) 情報 (98.2%) 福祉 (98.6%) 総合学科 (97.5%) 普通 (95.7%) 高校全体 (97.9%)



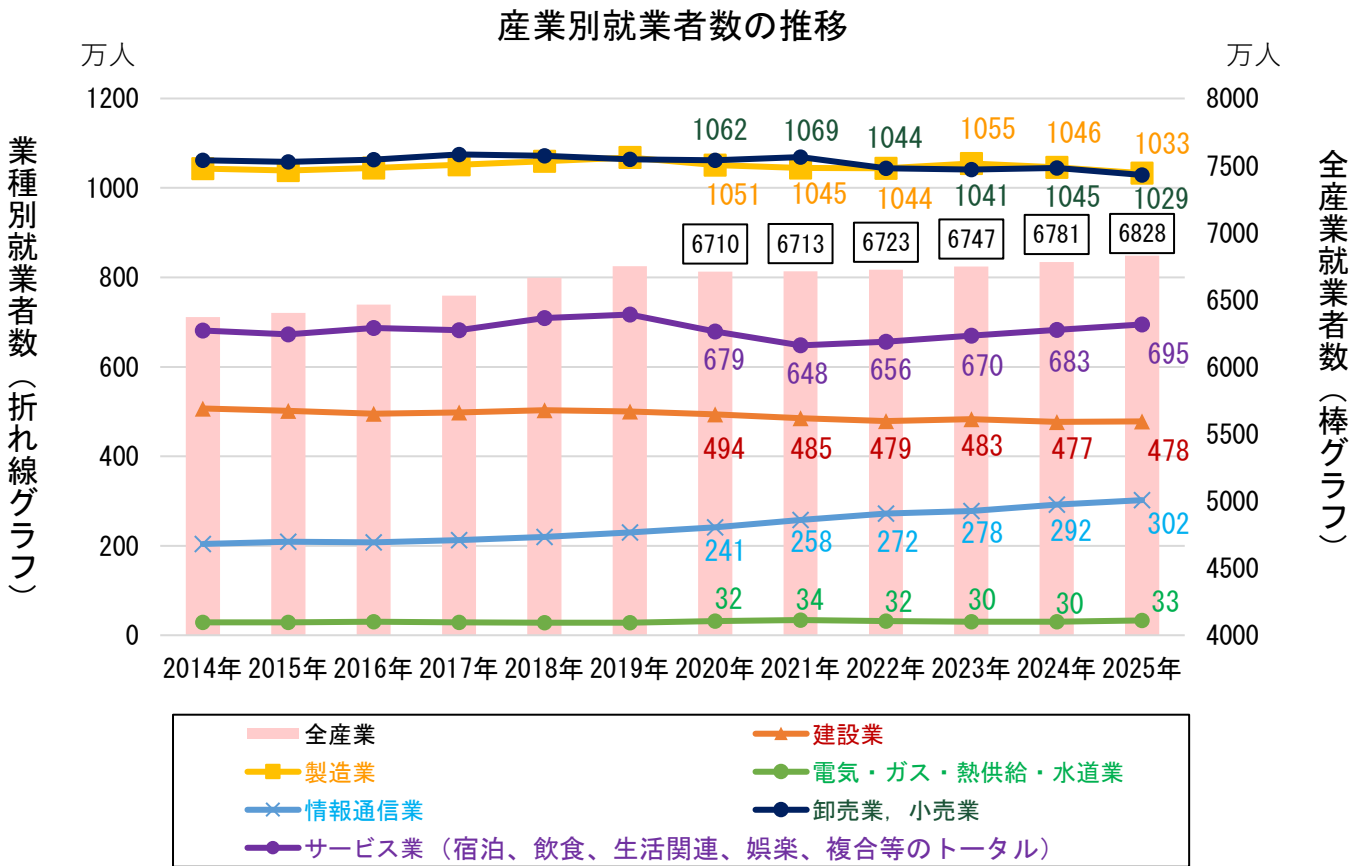
文部科学省「新規高等学校卒業者の就職状況に関する調査」より

工業科の就職状況

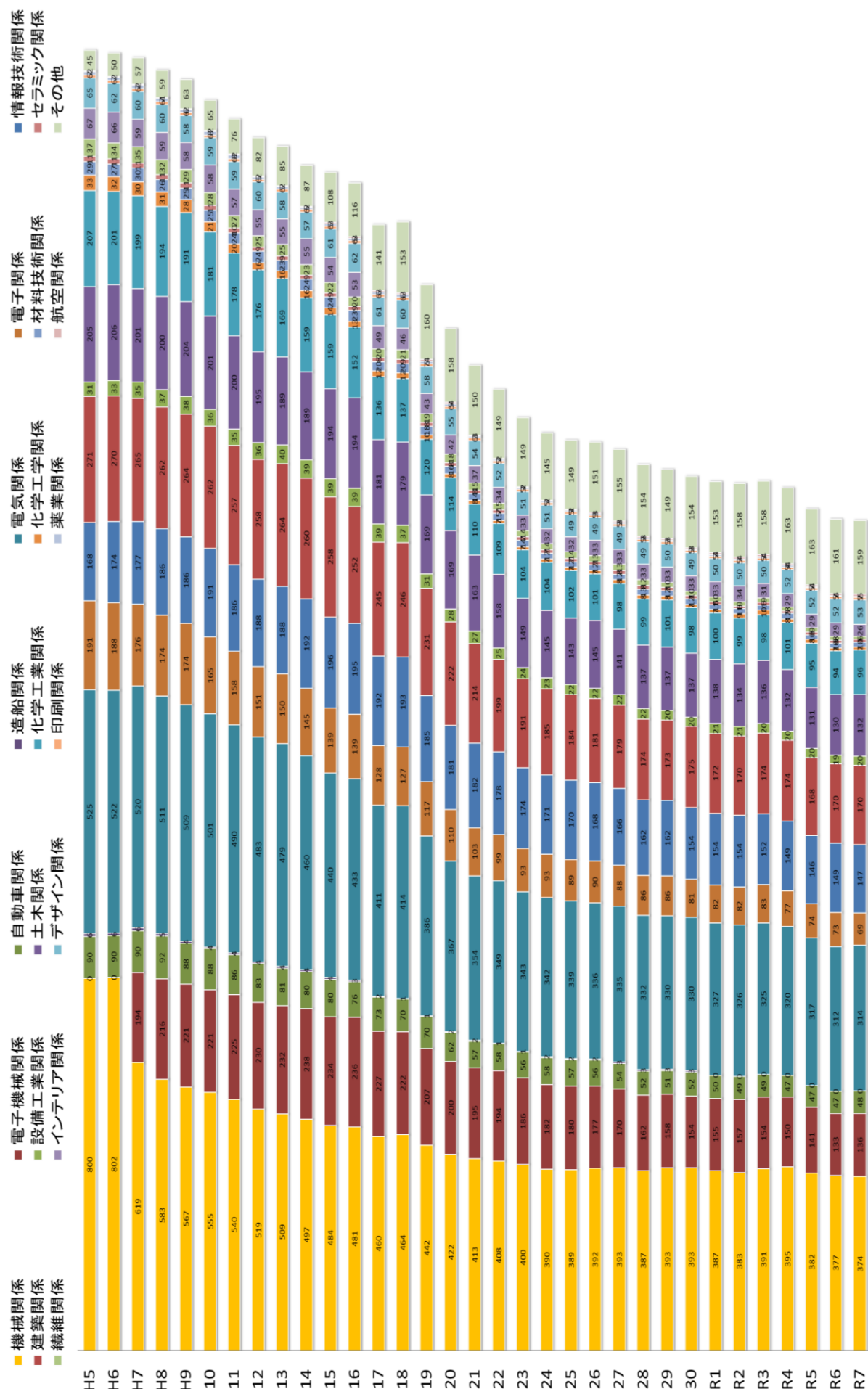
工業科における新規学卒入職者数(主な業種のみ記載)



産業別就業者数 ～労働政策研究・研修機構(JILPT)統計より～



小学科別学科数数の推移



機械	電子機械	自動車	造船	電気	電子	情報技術	建築	設備工業	土木	化学工業	化学工学	材料技術	セラミック	繊維	インテリア	デザイン	印刷	業業	航空	その他
374	136	48	-	314	69	147	170	20	132	96	7	10	6	6	26	53	5	2	5	159